岡山県埋蔵文化財発掘調査報告83

山陽自動車道建設に伴う
発　掘　調　査　7

平瀬古墳群
富原西奥古墳
白壁古墳

1993・1

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡　山　県　教　育　委　員　会

序

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所は、山陽自動車道の建設に伴い、その予定路線敷地内にある遺跡について、岡山県教育委員会と協議し、記録保存のため発掘調査を実施しております。

1988年度には、富原西奥古墳、1989年度には平瀬古墳群、1990年度には白壁古墳の発掘調査を実施いたしました。

本書は平瀬古墳群、富原西奥古墳、白壁古墳の発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、教育・学術のため広く活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表わすものであります。

平成4年3月

日本道路公団広島建設局
岡山工事事務所
所　長　佐伯　博三

序

山陽自動車道は、瀬戸内圏域をむすぶ東西交通の大動脈であり、建設後の交通量の緩和および文化的・経済的波及効果については図りしれないほど大きいものがあると期待され、各方面から早期建設の要望がだされていたところであります。

こうした大規模開発事業の施行にあたっては、埋蔵文化財の保護・保存をいかに果たすかが課題になります。岡山県教育委員会ではこのたびの山陽自動車道の建設に先立ち、関係当局と繰り返し協議、調整を図ってまいりましたが、やむなく記録保存の処置を講じなければならない遺跡については、日本道路公団・建設省からの委託を受け、昭和52年度より発掘調査を実施してきました。

今回の第７分冊には昭和63年度から平成２年度に調査した岡山市所在の３遺跡、平瀬古墳群・富原西奥古墳・白壁古墳について収録しております。このうち平瀬古墳群と富原西奥古墳は工事着工の寸前に新たに発見されたものであったため、調査には多くの困難を伴いましたが、学術的に多くの貴重な成果を得ることができました。この報文が今後の地域史解明の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを希望します。

発掘調査の実施・報告書の作成にあたっては、高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の各先生方から種々の御教示と御指導を得、また日本道路公団をはじめ地元の方々から、多大な御協力を賜りました。関係各位に対し、記して厚くお礼申し上げます。

平成４年７月

岡山県教育委員会

教育長　竹内　康夫

例　　言

1．この報告書は、山陽自動車道の建設に伴い、日本道路公団の委託を受け、岡山県教育委員会が発掘調査を実施したものである。

2．報告書に収載する遺跡は、平瀬（ひらせ）古墳群、富原西奥（とみはらにしおく）古墳、白壁（しらかべ）古墳である。

3．発掘調査および報告書の作成にあたっては、「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の各位から有益な助言・指導を得た。記して深甚の謝意を表するしだいである。

鎌木　義昌（岡山理科大学）
水内　昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
西川　　宏（山陽女子高校）
間壁　葭子（倉敷考古館）
根木　　修（岡山市教育委員会）
高見　周夫（岡山県遺跡保護調査団）
西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団　1991年まで）
新納　　泉（岡山大学　1991年まで）
稲田　孝司（岡山大学　1991年から）
土井　基司（岡山大学　1991年から）

4．石材鑑定は岡山理科大学三宅寛教授に、小鉄塊の分析は新日本製鉄大沢正己主任技師に依頼し、鑑定および分析の結果を得た。衷心より感謝いたしたい。

5．報告書の作成は、主として整理作業を岡山県古代吉備文化財センター津寺事務所でおこない、各執筆者がそれぞれの調査事務所で製図および原稿を仕上げた。

6．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さないかぎり磁北である。

7．報告書に掲載する遺構、遺物の縮尺比率は基本的に共通するが、細部は各遺跡ごとに統一を図った。

8．報告書で用いた時代区分は、一般的な政治区分に準拠し、それを補うため文化史区分、世紀を併用した。

9．報告書に関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）に一括保管している。

目　　次

1．平瀬（ひらせ）古墳群 …… 1

2．富原西奥（とみはらにしおく）古墳 ……101

3．白壁（しらかべ）古墳 ……145

4．付　　載 ……173

本報告書に係る調査、報告書作成の体制

昭和62年度（1987年度）

岡山県教育委員会文化課

課　　長　高橋　誠記（12月15日まで）
　　吉尾　啓介（12月16日以降）
課長代理　河野　　衛
課長補佐（埋蔵文化財係長）　伊藤　　晃
主　　査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　橋本　泰夫

総務課

課　　長　佐々木　清
総務主幹　藤本　信康
主　　任　花本　静夫、岡田　祥司

調査第一課

課　　長　河本　　清

調査第二課

課　　長　葛原　克人
文化財保護主幹（第一係長）　正岡　睦夫
文化財保護主査（第二係長）　松本　和男
主　　事　佐守　　学

昭和63年度（1988年度）

岡山県教育委員会文化課

課　　長　吉尾　啓介
課長代理　河野　　衛
課長補佐（埋蔵文化財係長）　伊藤　　晃
主　　査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　水田　　稔

総務課

課　　長　佐々木　清
総務主幹　藤本　信康
主　　任　花本　静夫、岡田　祥司
　　片山　淳司

調査第一課

課　　長　河本　　清

調査第二課

課　　長　葛原　克人
第二係長　松本　和男

平成元年度（1989年度）

岡山県教育委員会文化課

課　　長　　吉尾　啓介（11月30日まで）
　　鬼澤　佳弘（12月１日以降）
課長代理　　河野　　衛
課長補佐（埋蔵文化財係長）　　伊藤　　晃
主　　査　　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　長瀬　日出明
次　　長　　河本　　清

総務課

課　　長　　竹原　成信
課長補佐（総務係長）　　藤本　信康
主　　任　　岡田　祥司、平松　郁男
　　片山　淳司

調査第一課

課長事務取扱　　河本　　清

調査第二課

課　　長　　葛原　克人
課長補佐（第一係長）　　井上　　弘
文化財保護主任　　井上　　篤
文化財保護主事（調査第一課からの応援）　　大智　　浩

調査第三課

課　　長　　正岡　睦夫

平成２年度（1990年度）

岡山県教育委員会文化課

課　　長　　鬼澤　佳弘
課長代理　　光吉　勝彦
課長補佐（埋蔵文化財係長）　　伊藤　　晃
主　　査　　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　長瀬　日出男
次　　長　　河本　　清

総務課

課　　長　　竹原　成信
課長補佐（総務係長）　　藤本　信康
主　　任　　平松　郁男、坂本　英幸

調査第一課

課長事務取扱　　河本　　清

調査第二課

課　　長　　葛原　克人

調査第三課

課　　長　　正岡　睦夫
課長補佐（第一係長）　　松本　和男
文化財保護主事　　佐守　　学

平成３年度（1991年度）

岡山県教育委員会文化課

課　　長　　鬼澤　佳弘
課長代理　　大橋　義則
課長補佐（埋蔵文化財係長）　　柳瀬　昭彦
主　　査　　時長　　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　横山　常實
次　　長　　河本　　清

総務課

課　　長　　藤本　信康
課長補佐（係長事務取扱）　　小西　親男
主　　査　　平松　郁男
主　　任　　坂本　英幸

調査第一課

課　　長　　葛原　克人

調査第二課

課　　長　　正岡　睦夫
文化財保護主幹　　高畑　知功
係　　長（第二係）　　浅倉　秀昭
文化財保護主査　　中野　雅美
文化財保護主事　　亀山　行雄
主　　事　　古市　秀治

調査第三課

課　　長　　伊藤　　晃

平瀬古墳群

凡　　例

1．この報文は、山陽自動車道建設のうち、笠井山隧道工事に先だって実施した平瀬古墳群の発掘調査の内容を収めたものである。

2．平瀬古墳群は、旭川の右岸、岡山市平瀬に所在するが、うち3基の横穴式石室をもつ小古墳が調査対象となった。

3．発掘調査および報告書の作成にあたっては、例言にも記したように、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の各位から有益な指導・助言をいただいた。重ねて、深甚の謝意を表したい。

鎌木義昌・水内昌康・西川宏・間壁葭子・高見周夫
根木修・西岡憲一郎・新納泉・稲田孝司・土井基司

4．また自然遺物および副葬品の一部については下記の諸氏に鑑定・同定を依頼し、ご教授を得、鉄塊については付載としてこの報告書に掲載している。記して感謝の微意を表するしだいである。

石材―三宅寛（岡山理科大学教授）　鉄塊―大沢正己（新日本製鉄株式会社　主任研究員）　陶磁器―大橋康二（九州陶磁文化館資料係長）

5．発掘調査は、日誌抄に記したとおり、平成元（1989）年12月1日から平成2（1990）年3月までの約4ヵ月間を要し、岡山県古代吉備文化財センター職員葛原克人・井上弘・井上篤・大智浩、および藤岡耕一調査補助員があたった。

6．報告書の作成にあたっては、遺構の図面整理・製図には主として葛原があたったが、その間、藤岡耕一・田中淑子・永田知奈美・仙田智美など各氏の助力を得た。

7．遺物の実測は、正岡睦夫調査二課長のもと津寺事務所で行われた。平瀬古墳の遺物については高畑知功課長補佐の指導のもとに近藤明子補助職員があたった。製図については、土器類を川崎康代・鉄器を井上弘・玉類を柴田英樹が担った。

8．遺物写真はすべて、当時、岡山県古代吉備文化財センターに勤務していた政田孝氏の手をわずらわしたが、レントゲン写真については、岡山理科大学浜田穣助教授にお願いしたものである。

9．この小報の執筆ならびに編集は、葛原克人が担当した。

10．出土遺物をはじめ図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

目　　次

1．調査経過 …… 9
2．位置と環境 …… 14
3．古墳各説 …… 19
Ⅰ．平瀬1号墳 …… 19
(1)　墳丘と周堀 …… 19
(2)　横穴式石室 …… 21
(3)　副 葬 品 …… 22
Ⅱ．平瀬2号墳 …… 27
(1)　墳丘と周堀 …… 27
(2)　横穴式石室 …… 28
(3)　副 葬 品 …… 32
Ⅲ．平瀬3号墳 …… 59
(1)　墳丘と周堀 …… 59
(2)　横穴式石室 …… 60
(3)　副 葬 品 …… 62
4．まとめにかえて …… 68

図 目 次

第1図　山陽自動車道内遺跡分布図 …… 10
第2図　平瀬古墳群位置図 …… 14
第3図　御野郡の地勢と遺跡 …… 15
第4図　平瀬古墳群分布図 …… 16
第5図　平瀬古墳群周辺地形測量図 …… 18
第6図　平瀬1号墳墳丘図 …… 19
第7図　平瀬1号墳石室平・断面図 …… 20
第8図　平瀬1号墳遺物出土状態 …… 21
第9図　平瀬1号墳出土須恵器・土師器 …… 23
第10図　平瀬1号墳出土棺釘等 …… 26
第11図　平瀬2号墳墳丘図 …… 27
第12図　平瀬2号墳石室平・断面図 …… 29

第13図　平瀬２号墳第二次埋葬の副葬品 …… 31
第14図　平瀬２号墳第一次埋葬の須恵器 …… 31
第15図　平瀬２号墳第一次埋葬の玉類 …… 31
第16図　鉄鏃部位名称図 …… 35
第17図　平瀬２号墳出土須恵器(1) …… 36
第18図　平瀬２号墳出土須恵器・土師器(2) …… 37
第19図　平瀬２号墳出土須恵器(3) …… 38
第20図　平瀬２号墳出土須恵器(4) …… 39
第21図　平瀬２号墳出土玉類(1) …… 40
第22図　平瀬２号墳出土玉類(2) …… 41
第23図　平瀬２号墳出土玉類(3) …… 42
第24図　平瀬２号墳出土玉類(4)・耳環・刀 …… 43
第25図　平瀬２号墳出土鉄鏃・刀子・棺釘 …… 44
第26図　平瀬２号墳出土棺釘(1) …… 45
第27図　平瀬２号墳出土棺釘(2) …… 46
第28図　平瀬３号墳墳丘図 …… 59
第29図　平瀬３号墳石室平・断面図 …… 61
第30図　平瀬３号墳副葬品出土状態 …… 62
第31図　平瀬３号墳出土遺物 …… 65

表　目　次

表１　平瀬１号墳出土須恵器等観察表 …… 24
表２　平瀬１号墳出土棺釘計測表 …… 25
表３　平瀬２号墳出土須恵器観察表(1) …… 47
表４　平瀬２号墳出土須恵器観察表(2) …… 48
表５　平瀬２号墳出土須恵器観察表(3) …… 49
表６　平瀬２号墳出土須恵器観察表(4) …… 50
表７　平瀬２号墳出土玉類計測表(1) …… 51
表８　平瀬２号墳出土玉類計測表(2) …… 52
表９　平瀬２号墳出土玉類計測表(3) …… 53
表10　平瀬２号墳出土玉類計測表(4) …… 54
表11　平瀬２号墳出土耳環計測表 …… 55

表12　平瀬２号墳出土鉄器計測表(1) …… 56
表13　平瀬２号墳出土鉄器計測表(2) …… 57
表14　平瀬２号墳出土鉄器計測表(3) …… 58
表15　平瀬３号墳出土須恵器等観察表 …… 66
表16　平瀬３号墳出土耳環計測表 …… 67
表17　平瀬３号墳出土棺釘等計測表 …… 67
表18　平瀬古墳比較表 …… 69

図版目次

図版１－１　平瀬１号墳全景 …… 73
１－２　平瀬１号墳北トレンチ …… 73
１－３　平瀬１号墳東トレンチ …… 73
２－１　平瀬１号墳石室（奥から）…… 74
２－２　平瀬１号墳石室（前面から）…… 74
２－３　平瀬１号墳石室（側面から）…… 74
３－１　平瀬１号墳最終床面遺物（西から）…… 75
３－２　平瀬１号墳第１次埋葬床面遺物（北西から）…… 75
３－３　平瀬１号墳第１次埋葬床面遺物（北西から）…… 75
３－４　平瀬１号墳第１次埋葬床面遺物（北西から）…… 75
４－１　平瀬２号墳調査前状況（北西から）…… 76
４－２　平瀬２号墳全景（北西から）…… 76
５－１　平瀬２号墳全景（北東から）…… 77
５－２　平瀬２号墳南トレンチ（南から）…… 77
６－１　平瀬２号墳石室最終床面（南西から）…… 78
６－２　平瀬２号墳石室最終床面（北東から）…… 78
６－３　平瀬２号墳前庭部断面（南から）…… 78
７－１　平瀬２号墳第１次埋葬面（南東から）…… 79
７－２　平瀬２号墳第１次埋葬面（北東から）…… 79
８－１　平瀬２号墳床面の横断面（南西から）…… 80
８－２　平瀬２号墳床面遺物（南西から）…… 80
９－１　平瀬２号墳耳環出土状態 …… 81
10－１　第１次床面の耳環１・２とガラス玉（北東から）…… 82

10—2　第1次床面の耳環3と緑色ガラス玉（南東から）…… 82
11—1　平瀬3号墳調査前状況（南から）…… 83
11—2　平瀬3号墳全景（西から）…… 83
12—1　平瀬3号墳全景（南東から）…… 84
12—2　平瀬3号墳石室（南西から）…… 84
13—1　平瀬3号墳東トレンチ（南東から）…… 85
13—2　平瀬3号墳北トレンチ（西から）…… 85
14—1　平瀬3号墳石室内（南から）…… 86
14—2　平瀬3号墳床面（北東から）…… 86
15—1　平瀬3号墳奥壁付近の遺物（南から）…… 87
15—2　平瀬3号墳石室中央付近の遺物（南から）…… 87
16—1　平瀬1号墳出土須恵器・土師器 …… 88
17—1　平瀬1号墳出土須恵器・棺釘等 …… 89
18—1　平瀬2号墳出土須恵器(1) …… 90
19—1　平瀬2号墳出土須恵器(2) …… 91
20—1　平瀬2号墳出土須恵器(3)・土師器 …… 92
21—1　平瀬2号墳出土須恵器(4)・大刀・小刀 …… 93
22—1　平瀬2号墳出土鉄鏃・刀子等 …… 94
23—1　平瀬2号墳出土倒卵形八窓鍔 …… 95
23—2　平瀬2号墳出土耳環 …… 95
24—1　平瀬2号墳出土玉類 …… 96
25—1　平瀬2号墳出土棺釘等(1) …… 97
26—1　平瀬2号墳出土棺釘等(2) …… 98
27—1　平瀬3号墳出土の副葬品 …… 99
28—1　平瀬3号墳出土棺釘等 ……100
28—2　平瀬3号墳出土の近世陶磁器等 ……100

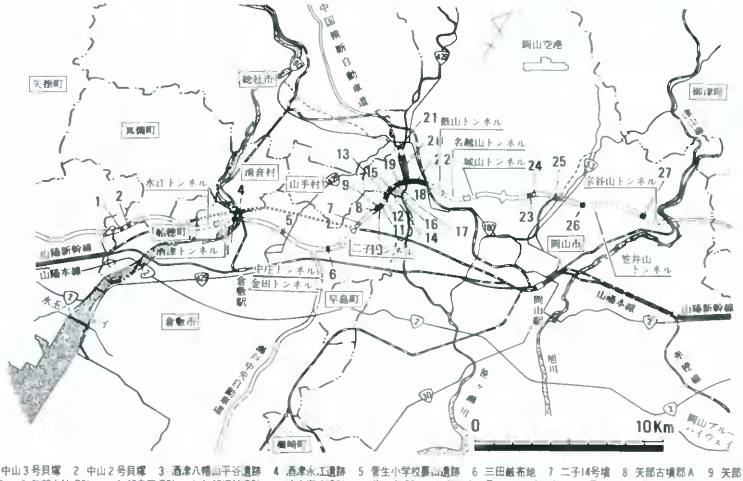
1．調　査　経　過

1989（平成元年）10月末日、岡山市平瀬地区を自からの管轄におく日本道路公団広島建設局岡山工事事務所の当時岡山東工事長であった石井義孝氏は、この地が隧道の坑口に当りしたがって工事着手を急ぐ必要があったため、同僚数名と現地視察を行っていた。その際、竹藪のうっそうと生い茂るなか人工的に積まれたと思われる巨石に気づき、さっそく岡山県教育庁文化課へ古墳の石室であるかどうか確認して欲しい旨の連絡を入れた。これをうけて県文化課伊藤晃課長補佐らが現場へ赴き、指摘のあった物件はほぼ誤りなく横穴式石室の天井石であることを確認した。のち岡山県古代吉備文化財センターの葛原克人調査第二課長および井上弘同課長補佐らも参加して現地踏査を重ねる。この種の古墳は単独墳で存在するよりも数基ないし十数基によって群集する傾向があるので、用地内の分布状態に意を注ぐ必要が生じたのである。はたせるかな、竹藪であったがゆえに大地に根ぶちの張りめぐった表土をバックホーで剝ぎ取ったところ、天井石はむろんのこと側石の大半をも抜き取られた横穴式石室の残痕が新たに2基も確認されるところとなった。さらに用地外の東にももう一基マウンドらしい形状をなした所があり、南方にもかつて横瓶と思われる須恵器を出土した地点がある、と伝えられる。とりあえず、このたび発見された用地内の古墳を小字名にちなみ平瀬古墳群と名づけ、南から北へ順次1号墳、2号墳、3号墳と呼称して、以下、発掘調査の結果を報告することにしたい。

このように、岡山県遺跡台帳にも、岡山市埋蔵文化財分布図にも未登録の物件で、工事関係者の手によって不時に見出された古墳群であるから、いうまでもなく1989（平成元）年度の発掘調査の対象にはあがってはいなかった。当然のことながら発掘を実施する県文化財センターとしては、すでに年度中の発掘計画と人員配置を終えているので、新年度事業のなかにこの古墳群の調査も付け加えるべきだと考え、そのように希望した。ところが、道路公団の立場からすれば、あらゆる工事のなかで隧道工事が最も時間を要するのであって、どうしても本年度中いっぱい坑口部分が凍結されるのであれば以後の工事工程にまったく見通しが立たない、という。議決機関であって契約事項を司どる県文化課は、執行機関である県文化財センターとのはざまにあって解決の途をさぐるが、妙案のあろうはずがない。年度内の既定の発掘調査が工程・人員配置など、どの条件をとりあげてもきわめて厳しいものであったからである。にもかかわらず、県文化課からは県文化財センターに対して、何とかならないかと再三にわたって無理を承知で要請があり、対応せざるをえない状況となった。県文化財センターの専門職員はそれぞれに岡山ジャンクションの予定地内である津寺遺跡において、懸命に発掘調査に取り組んでいる。誰一人として新事業に振り向けるゆとりなどないのである。そこで、平瀬へおもむくとすれば、直接現場をもっていない総括担当の課長自からと、苦しいながらも1班に2名の専門職

員のいるところから出向させるほかなく、とりあえず、葛原調査第二課長、井上弘同課長補佐、井上篤文化財保護主任、それに藤岡耕一補助員でもってことに当ることとした。以下、日誌抄に掲載するとおり、井上課長補佐は日ならずして本来の津寺遺跡のもち場に復帰して業務にたずさわり、途中から中国横断道関係の調査を終えた大智浩文化財保護主事が新たに加わって主に2号墳の調査に専心し、井上篤文化財保護主任は右足半月板損傷をきたし入院加療に入るなどの出来事もあって、文字どおり悪戦苦闘の調査となった。

なお、調査開始時点においては、知事部局から当センターへ出向していた土木部技師の垣内一也、源俊二の両氏によって測量杭の設置作業がなされていたので、調査時での各測点の位置確認にたいそう役立った。深謝いたしたい。また、調査終了まぢかになった1990（平成2）年3月になると、2号墳床面から玉類多数が出土したのを機に、床面の土すべてを土嚢袋につめ、集め、金山谷川から引き込んだ寒中の冷水でもって土砂粒の選別を開始し玉類の採集につとめた。土嚢袋の数は230袋を越え、洗浄後の濁水がもとの川に戻って下流から苦情が入るなど、この作業もまた難渋をきわめたが、どうにか全体の8割ほどの洗い作業を終え、一定の成果をあげ、残る50袋ばかりを文化財センターへ持ち帰ることとなった。その後は埋土の洗浄作業に平井典子さんたち女性職員が寸暇を惜しんで当り、その結果、さらに多数の玉類を採集することができたのである。ここにようやく小報を刊行するはこびとなったことは、ご芳名を列記しえないが、多くの関係者のご理解とご協力の賜である。



1 中山3号貝塚 2 中山2号貝塚 3 酒津八幡山平谷遺跡 4 酒津永江遺跡 5 雲生小学校裏山遺跡 6 三田蔵布地 7 二子14号墳 8 矢部古墳群A 9 矢部古墳群B 10 矢部大坑遺跡 11 矢部奥田遺跡 12 矢部姫越遺跡 13 津寺郷境遺跡 14 前也内遺跡 15 前也内3号墳 16 前也内4～7号墳 17 徒也内古墳 18 鳥住遺跡・雲内遺跡 19 南崎天神遺跡 20 三手・津寺遺跡 21 高塚遺跡 22 政所遺跡 23 富原西奥古墳 24 富原大池奥山遺跡 25 田益遺跡 26 白雪古墳 27 平瀬古墳群

第1図　山陽自動車道内遺跡分布図（S＝1：300,000）

発掘日誌抄

1989（平成1）年

12月1日（金）晴　北端の3号墳の辺からユンボーで表土掘削を開始。

12月2日（土）曇　南端1号墳付近まで表土を剝ぎ取る。葛原立会。

12月4日（月）晴　1号墳・3号墳―石室内の埋土、石の排除。

12月5日（火）晴　1号墳―石室内埋土の除去、奥壁・側壁の検出。3号墳―石室内の埋土と石の除去。

12月6日（水）晴　2号墳―破壊壙の清掃、西壁の一部を検出。3号墳―石室内の石の排除。グリッドの設定。

12月7日（木）曇　2号墳―石室内の排土。3号墳―石室内の排土。グリッド杭の設営。

12月8日（金）晴　2号墳―石室内の排土と西壁の検出。3号墳―石室内の石と土を除去。

12月11日（月）晴　1号墳―周辺の清掃。2号墳―石室内の掘り下げ。3号墳―石室内の掘り下げ。

12月12日（火）晴　1号墳―石室内の掘り下げ。2号墳―石室内の掘り下げ。3号墳―墳丘の石材抜痕をさがす。

12月13日（水）晴　1号墳―石室内の掘り下げ、土器片・小石の散布する面まで進む。2号墳―石室内の掘り下げ、小石の面を検出する。3号墳――墳丘の清掃。

12月14日（木）雨のち晴　2号墳―床面の検出作業。

12月15日（金）晴　1号墳―墳丘トレンチ掘り下げ、石室・床面の検出。2号墳―床面・礫の検出作業。

平瀬古墳群遠景

12月16日（土）晴　1号墳―墳丘トレンチ掘り下げ、石室内の掘り下げ、礫の検出作業。

12月18日（月）晴　1号墳―トレンチ掘り下げ、床面の検出作業。2号墳―床面の礫検出作業。3号墳―トレンチ掘り下げ。

12月19日（火）晴　1号墳―トレンチ掘り下げ、床面礫の検出、須恵器の検出。2号墳―床面礫の検出。3号墳―トレンチ掘り下げ。

12月20日（水）晴のち曇　1号墳―トレンチ掘り下げ、床面の検出作業。2号墳―床面の検出作業。3号墳―トレンチ掘り下げ。

12月21日（木）晴　1号墳―トレンチ掘り下げ、床面の検出、写真撮影。2号墳―床面の検出作業、トレンチ掘り下げ。

12月22日（金）曇　1号墳―石室内の割付、実測。2号墳―床面敷石の検出、トレンチ壁面の清掃。

12月25日（月）晴　1号墳―石室内の実測。2号墳―敷石の検出。3号墳―トレンチの清掃。

12月26日（火）曇　1号墳―石室内の実測。2号墳―床面の検出作業、トレンチ壁面の清掃。

12月27日（水）晴　1号墳―石室内の実測。2号墳―床面の検出作業、トレンチ壁面の清掃。

12月28日（木）晴　仕事納めの式。井上課長補佐の勤務元に復する。

1990（平成2）年

1月4日（木）晴　仕事始めの式。大智浩文化財保護主事が本日より着任。

1月5日（金）晴　所内会議、整理作業。

1月8日（月）晴　1号墳―トレンチ掘り下げ、石室内平面実測。2号墳―トレンチ掘り下げ、割り付け、石室南断面実測。

1月9日（火）曇のち雨　1号墳―石室内平面実測、トレンチ壁面清掃。2号墳―トレンチ掘り下げ及び壁面清掃、石室南断面実測、石室内平面実測。

1月10日（水）雨時々晴　1号墳―石室内平面実測、トレンチ清掃。2号墳―トレンチ掘り下げ、石室北断面実測、石室内平面実測、トレンチ壁面清掃。

1月11日（木）晴　1号墳―石室内平面実測。2号墳―石室内平面実測、石室南断面及び北断面実測、トレンチ掘り下げ。

1月12日（金） 雨のち晴 1号墳 — 石室内平面実測。2号墳 — 石室内平面実測、石室見通し実測、トレンチ掘り下げ。

1月13日（土） 晴 2号墳 — 石室見通し実測、トレンチ掘り下げ。

1月16日（火） 晴 1号墳 — 石室内平面実測、石室見通し実測、サブトレンチ掘り下げ。2号墳 — 石室内平面実測、石室見通し実測、トレンチ掘り下げ。

1月17日（水） 晴 1号墳 — 石室東断面見通し実測、サブトレンチ掘り下げ。2号墳 — 石室内平面実測、トレンチ掘り下げ。

1月18日（木） 曇 1号墳 — トレンチ断面の層位線引、写真撮影、墳丘検出。2号墳 — トレンチ断面の層位線引、写真撮影、実測。3号墳 — 床面掘り下げ。

1月19日（金） 雨 室内整理作業。

1月20日（土） 晴 1号墳 — トレンチ2・3の断面実測、墳丘検出。2号墳 — トレンチ2掘り下げ、トレンチ3断面実測。3号墳 — 床面掘り下げ。

1月22日（月） 晴のち曇 1号墳 — 遺物写真撮影、レベル記入、取り上げ、墳丘検出、西トレンチ断面検討、石室内掘り下げ。2号墳 — トレンチ掘り下げ、墳丘検出、石室内平面実測。3号墳 — 床面掘り下げ。

1月23日（火） 曇 1号墳 — 石室内西半床面検出、墳丘検出、トレンチ断面実測、トレンチ土層名記入。2号墳 — トレンチ掘り下げ、墳丘検出、石室内平面実測。

1月24日（水） 晴時々雪 1号墳 — 石室内全面床面検出、墳丘検出、トレンチ断面実測補足。2号墳 — トレンチ掘り下げ、墳丘検出、石室内平面実測、トレンチ土層線引、写真撮影。

1月25日（木） 晴 1号墳 — 石室内床面検出、墳丘検出。2号墳 — 墳丘検出、石室内平面実測、トレンチ写真撮影、断面実測。

1月26日（金） 晴 1号墳 — 石室内床面検出、石室全景撮影、墳丘検出。2号墳 — 墳丘検出、石室内平面実測、遺物写真撮影。

1月27日（土） 晴 室内整理作業。

1月29日（月） 雨のち曇 整理作業。井上篤文化財保護主任本日から通院、休暇に入る。

1月30日（火） 晴のち曇 1号墳 — 石室内出土遺物実測、墳丘検出。2号墳 — 石室床面実測、墳丘サブトレンチ掘り下げ。

1月31日（水） 雪 所内会議。

2月1日（木） 曇 1～3号墳 — 雪かき。1号墳 — 墳丘検出、遺物実測。2号墳 — 床面実測、サブトレンチ掘り下げ。

2月2日（金） 晴 1号墳 — 墳丘検出、遺物実測。2号墳 — 床面実測、サブトレンチ掘り下げ。

2月3日（土） 雨 整理作業。

2月5日（月） 晴 1号墳 — 遺物実測、墳丘検出。2号墳 — 礫床とりはずし、墳丘検出。

2月6日（火） 曇のち晴 1号墳 — 遺物実測、遺物写真撮影。2号墳 — 石室内サブトレンチの掘り下げ、セクション実測、墳丘検出。

2月7日（水） 晴 1号墳 — 遺物実測、墳丘写真撮影。2号墳 — 床面礫床検出、墳丘検出。

2月8日（木） 曇 1号墳 — 墳丘測量。2号墳 — 墳丘検出、床面礫床検出。

2月9日（金） 晴 1号墳 — 割り付け。2号墳 — 床面礫床検出、墳丘検出、床面掘り下げ。

2月10日（土） 曇 2号墳 — 礫床実測、床面掘り下げ、墳丘検出。

2月13日（火） 晴 2号墳 — 床面清掃、写真撮影、墳丘検出。3号墳 — トレンチ掘り下げ。

2月14日（水） 曇時々雨 2号墳 — 床面礫床実測、床面の掘り下げ、墳丘検出。3号墳 — トレンチ掘り下げ。

2月15日（木） 曇 2号墳 — 床面礫床実測、床面掘り下げ、墳丘検出。3号墳 — トレンチ掘り下げ、トレンチ壁面写真撮影。

2月16日（金） 晴のち曇 2号墳 — 床面掘り下げ。3号墳 — トレンチ掘り下げ、トレンチ壁面写真撮影。

平瀬3号墳

2月17日（土） 晴 1号墳 — 上面プラン実測。2号墳 — 出土遺物実測、床面掘り下げ、墳丘検出。3

号墳 ― トレンチ壁面清掃、セクション実測。

2月19日（月）　雨　1号墳 ― 重機による盛土の掘り下げ。

2月20日（火）　晴　1号墳 ― 掘り方の検出。2号墳 ― 床面掘り下げ、墳丘検出。

2月21日（水）　晴　1号墳 ― 掘り方の検出。2号墳 ― 床面掘り下げ、墳丘検出、墳丘写真撮影。

2月22日（木）　曇　1号墳 ― 掘り方の検出、掘り方掘り下げ。2号墳 ― 床面掘り下げ、墳丘測量。3号墳 ― サブトレンチ掘り下げ。

2月23日（金）　雨　整理作業。

2月24日（土）　曇　1号墳 ― 上面プラン実測、掘り方掘り下げ。2号墳 ― 床面掘り下げ、遺物実測。3号墳 ― サブトレンチ掘り下げ、墳丘検出。

2月25日（日）　雨　整理作業。

2月26日（月）　曇　1号墳 ― 上面プラン実測、掘り方掘り下げ。2号墳 ― 床面掘り下げ、セクション実測。3号墳 ― サブトレンチ掘り下げ、墳丘検出。

2月27日（火）　曇のち晴　1号墳 ― 掘り方掘り下げ。2号墳 ― 重機による盛土の掘り下げ。3号墳 ― サブトレンチ掘り下げ、墳丘検出、墳丘セクション実測・掘り下げ。

2月28日（水）　晴のち曇　1号墳 ― 石室上面写真撮影。2号墳 ― 重機による盛土の掘り下げ。3号墳 ― 墳丘の検出。

3月1日（木）　雨　整理作業。

3月2日（金）　雨のち曇　1号墳 ― 補測。2号墳 ― 掘り方掘り下げ。

3月3日（土）　曇時々雨　1号墳 ― 補測。2号墳 ― 掘り方掘り下げ。

3月5日（月）　晴　1号墳 ― 補測。2号墳 ― 掘り方掘り下げ、セクション除去。

3月6日（火）　晴時々曇　1号墳 ― 補測を加え調査終了。2号墳 ― 掘り方掘り下げ。3号墳 ― 石室割り付け、墳丘検出。

3月7日（水）　曇時々雨　2号墳 ― 掘り方掘り下げ。3号墳 ― 石室内の割り付け、墳丘検出。

3月8日（木）　晴　3号墳 ― 石室割り付け、墳丘検出、石室実測。

3月9日（金）　晴　3号墳 ― 墳丘検出、墳丘実測、墳丘写真撮影。

3月10日（土）　晴　2号墳 ― 床面（遺物出土状況）写真撮影。3号墳 ― 石室実測、掘り方検出。

3月11日（日）　晴時々曇　整理作業。

3月12日（月）　晴時々曇　2号墳 ― 出土遺物実測、遺物取り上げ。3号墳 ― 石室実測、掘り方検出。

3月13日（火）　晴　2号墳 ― 遺物出土状況実測、遺物取り上げ。3号墳 ― 石室実測、掘り方検出。

3月14日（水）　晴のち曇　2号墳 ― 閉塞石実測、掘り下げ、上面プラン実測。3号墳 ― 石室実測、掘り方検出。石室内排土水洗。

3月15日（木）　晴　2号墳 ― 遺物出土状況実測、上面プラン実測。3号墳 ― 石室実測。石室内排土水洗。

3月16日（金）　晴　2号墳 ― 遺物出土状況実測、上面プラン実測、遺物取り上げ。3号墳 ― 石室実測、床面掘り下げ。石室内排土水洗。

3月17日（土）　晴　2号墳 ― 遺物出土状況実測、上面プラン実測、写真撮影遺物取り上げ。3号墳 ― 石室実測、写真撮影、床面掘り下げ。

3月19日（月）　晴　2号墳 ― 遺物出土状況実測、上面プラン実測、写真撮影、石室補測。3号墳 ― 石室実測。

3月20日（火）　晴　2号墳 ― 上面プラン実測、掘り方実測。3号墳 ― 石室実測、床面プラン実測。

3月22日（木）　晴　2号墳 ― 掘り方実測、調査終了。3号墳 ― 上面プラン割り付け。

3月23日（金）　晴　3号墳 ― 上面プラン実測。実績報告作成。

3月24日（土）　曇時々雨　3号墳 ― 上面プラン実測。

3月26日（月）　晴　3号墳 ― 上面プラン実測、石室セクション実測。

3月27日（火）　晴　3号墳 ― 上面プラン実測、重機による盛土の掘り下げ。

3月28日（水）　雨　整理作業。

3月29日（木）　曇　整理作業、撤収作業。

3月30日（金）　晴　整理作業。

3月31日（土）　曇時々雨　所内会議。

石鏃（2号墳埋土から）

2．位置と環境

ここに報告する、横穴式石室を内部主体とした３基の後期古墳は、岡山市平瀬地内の山裾に所在する。いま平瀬の漢字を当て、ヒラセと呼ぶが、律令制下においては比良之（ヒラシ）と呼称された枚石郷から変化した字名である点をあらかじめ注意しておきたい。

まず周辺の自然地理的な環境から述べれば、位置する場所は、中国山地に源を発して南流する大河旭川が東西両脇の高い山並を離れ、狭義にいうところの岡山平野に突入するあたりにほど近い西岸にあたる。『和名抄』に従うと、律令制下には牧石、廣世、出石、御野、伊福、津嶋などの諸郷をふくむ備前国御野郡に属していたこととなり『旧事紀』の國造本紀に見えるいわゆる吉備10国造のうちの、三野國造の本貫地の一角と考えられる。

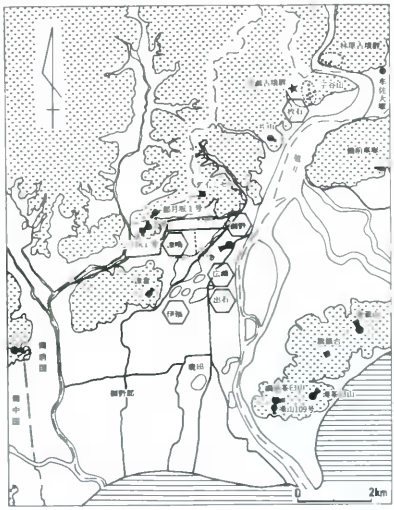
御野郡の地勢は、東が旭川で限られ、北は東から西へ宗谷山、金山、笠井山など標高300～400m前後の山々が連なり、さらにその西にも半田山、ダイミ山、烏山など各主峰から派生した標高100数10mの尾根状山塊が延び連なって全体として領域の北辺を遮る。西は南流する笹ヶ瀬川によって画され、南は瀬戸内に面する。とくに南の平野は広大かつ肥沃で早くから開け、一般には三野平野と呼ばれる。この地は対岸東の上道平野とともに吉備領域のなかでも最も重要な農耕生産の場であって、したがって著名な遺跡が密集する。

すでに縄文時代の後期前半およそ紀元前1500年ごろには、南の沖積地へ伸び出た舌状台地の先端を活用して住居を構えていたようで、津島東の朝寝鼻貝塚からは中津式に似た磨消縄文土器や彦崎ＫＩ式ないしＫII式にちかい土器片がかなり多量に採集されている。このころには、ほとんど同時に山間部にとどまらず沖積平地への定住生活が開始される。津島岡大遺跡第３次調査によって、縄文時代後・晩期の幅約25mを測る河道が検出され、その縁辺では堅果類を貯蔵した土壙数10基が掘り出されて彦崎ＫII式の完形深鉢や西日本においては初例の朱漆塗り竪櫛が見つかっているばかりか、河道からも装身具である耳栓が出土し、柱穴と思われる小孔約600個と赤化

第２図　平瀬古墳群位置図（S＝1：1,500,000）

した地床炉2基なども検出されている。これらは当該期の集落の存在と工芸技術水準がしだいに高まりつつあったことをうかがわせるものである。この遺跡から南へ約4.5km隔たった岡山大学医学部の鹿田キャンパスにおいても歯学部建設に伴う事前発掘によって、縄文時代後期前半の土器片が微量ながらも採集されており、少なくとも鹿田地域までは間違いなくすでに陸化し、この地域では沖積平野へむかって定住化をめざす動きが縄文時代後期にまでさかのぼることを推察させる。沖積平野が新たな生活の舞台になりつつあったことは間違いないであろう。

縄文時代晩期、突帯文が主流となるおよそ紀元前400年を相前後するころには、水稲耕作が始まる。江道遺跡で見つかった水田跡は現在のところ岡山県下最古のものであって、のち稲づくりは急速にひろまり、ひき続いて弥生時代前期前半の水田跡が津島遺跡で検出されている。微高地上には竪穴住居が営まれ、その縁辺を水田として開田したことが判明している。その後もこの集落は一貫して母村としての位置を占めていたことが、弥生時代中期・後期の遺構や遺物の出土によって、確認されている。その他、弥生時代前期から始まる集落遺跡としては南方蓮田遺跡が知られているが、この集落はむしろ中期初めごろに盛期をむかえたようで、おびただしい数の土壙墓が検出され、すさまじい人口増加のあとをうかがわせ、農耕生産の高まりを裏づけている。しかしまだ、いずれも同じ程度の土壙墓であって卓越した単独墓はみられない。そして中期の後半、およそ紀元前後のころに入ると、鹿田遺跡や上伊福九坪遺跡で検出されたように、注目に値するガラス滓が伴う。農耕生産の高まりを基礎として、農耕生産からわかれはじめた分業生産がこの分野で一定度の進展を遂げつつあったのである。弥生時代後期にいたると、当時の海岸線ちかくに営まれた市民病院遺跡であきらかになったように、土器製塩が盛んにおこなわれる。塩づくりもまた、前代にひきつづいて着実に量産化の方向をたどりつつあったのであって廃棄された製塩土器の脚台の量はおびただしい。



第3図　御野郡の地勢と遺跡（S＝1：150,000）

およそ3世紀後半から4世紀初めには、前方後円墳時代をむかえる。旭川西岸のこの地域の北辺ないし西縁の山頂には、成立期の前方後円墳・後方墳が4基も存在し、首長層の台頭いちじるしい地帯と理解できるもののいずれも比較的に小規模なもので

ある。前方後円墳の原片山古墳は墳長約55mをはかり、前方後方墳である都月坂1号墳が墳長33m、同じ形の七ツ坑1号墳は墳長45.1mで、前方後方墳の津倉古墳も墳長35mの計測値をもち、なお首長間相互の格差は小さく、政治的・社会的関係が等質的なものであったことを示している。のち、これらの首長層を統一した姿としてあらわれたのが沖積地に築成をみた大形の前方後円墳、神宮寺山古墳である。墳長約150mをはかるこの大形前方後円墳は、前方後円墳の変遷を10期区分にした場合の、2期ないし3期に築かれたもので、周濠を伴わず、造出も無く、多数の鉄製農具や武器だけをおさめた副葬品埋納用の副室の存在することが判明している。伴う円筒埴輪は2次調整タテハケのものが多く赤色顔料の塗布された例もおびただしい量にのぼるらしい。旭川西岸における各農業共同体を統一した支配者の墳墓したがって部族共同体の統治的首長墳にふさわしい規模と内容をもつ、という位置づけに異論をさしはさむ余地はない。この御野の地域圏では、この古墳を最後としてその後はずば抜けて勢威を示すほどの前方後円墳は見られず、わずかにその西縁に所属年代の定かでない墳長約50mばかりの青陵古墳が存在するのみである。少くとも4期から5期およそ5世紀の初葉から前半にわたっては前方後円墳の築造が途絶え、6期も終りちかくになって、眉庇付冑を副葬していた墳長約65mの一本松古墳や、7期に属する墳長約30mの帆立貝式、おつか様古墳が築かれたていどである。このように5世紀後半にいたっても、権勢の高揚を物語る古墳はみられないのがむしろこの地域の特色といえる。

第4図　平瀬古墳群分布図（S＝1：3,000）

8期から9期に入り、ひろく全土的に横穴式石室が採集されはじめてもなお、劣勢さをかこっていたものか、今日までこの圏域に大形の横穴式石室墳は知られていない。学史的には国造制が促進される6世紀においてである。そうした動向のなかで、このたび新たに発見されて、ここに報告することになった平瀬古墳群の内容は空白ともいうべき6世紀史をうめる手がかりを

与えるものとして一定の意義をもつであろう。

しかしその後も、古代寺院を創建することなく律令社会へとむかう、隆盛・衰微の激しい地域圏であった。

岡山市平瀬は先にも記したとおり、もと牧石郷に属していたものと思われるが、耕地はそれほど広くない土地柄である。東の標高241.2mの宗谷山と西の標高334.8mの笠井山との間に、平均的にいって幅100mほどの小さな谷地形が形成されてそこに金山谷川という細谷川が流下し、谷の出口が扇状地形をなす。その南まじかに旭川の右岸堤防が走り、築堤をみなかった古代においては、しばしば氾濫原と化したものと想定されるので、耕地は猫額ほどのものであったろう。しかし両主峰の南山裾にはほぼ東西を指して旧山陽道が走り東に進めば牟佐の渡に着く、巨視的には交通の要路に面するといってよい。旧山陽道と直交する平瀬の谷筋は、東西両主峰に遮られて日照時間は極端に少く、古墳の占地する立地条件としてはけっして良好な場所とはいいがたい。とはいえ、この谷が聖地金山寺へとむかう登頂道にあたっている点を見逃すことはできないであろう。備前屈指の寺院である金山寺の開基は奈良時代にさかのぼり報恩太子によってなされた、と伝承される。開山の時期はともかく、その前身が山嶽信仰の対象となっていた可能性が強いとすれば、この古墳群が築かれた土地はゆえなきことではなく聖地への道に面して築くという、確かな目的に沿っていたこととなろう。

3基の古墳は宗谷山西斜面の山裾、標高25mないし33m付近に隣接して築かれ南端の1号墳と中間の2号墳の距離はごく接近しており5mも離れていない。2号墳と北端の3号墳とはやや距離をおいてその間約30mばかりである。その他、このたびは建設の用地外になったものの1号墳の東に隣接して、小規模な円丘がみられる。まず間違いなく後期古墳のひとつと判断してさしつかえないもので仮にこれを4号墳と名づけることとした。また3号墳の北の用地外にも開口した横穴式石室1基が確認でき、これを5号墳と呼ぶこととした。さらに地元では、少し南へ隔った平瀬池の池尻付近でも横瓶などの須恵器片多数を出したとの言い伝えがあり、あるいはこれまた横穴式石室であった可能性がある。すると、今日までまったく知られていなかったこの狭い範囲に5～6基からなる後期群集墳の一支群が存在したこととなる。そうして、この古墳群の東、宗谷山の山頂から南へ下る尾根の稜線上や少し低い谷状地形の所に合計10基の後期古墳が存在することも周知されており、一般に宗谷山古墳群といわれる。御野郡内に築かれた後期古墳が、他の郷域においてはきわめて希薄なのに比して、牧石郷に意外と多く集中することに改めて気付くとともに、旭川を挟んだ対岸にある巨石墳の牟佐大塚や耕地の無い場所に築かれた林原古墳群などとの関連もまた、注視すべき課題になってくる。

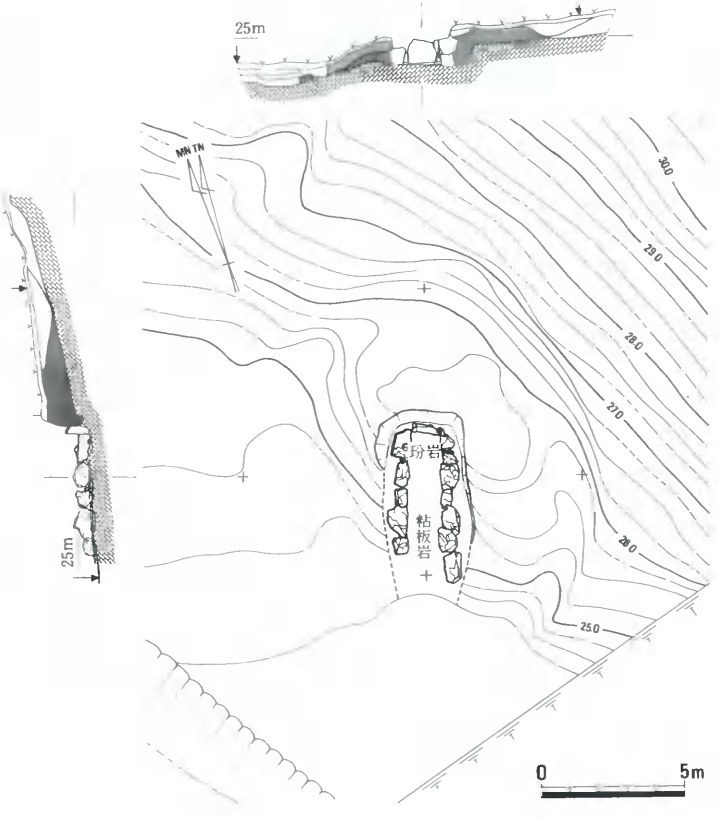
第 5 図　平瀬古墳群周辺地形測量図（S＝1：500）

3．古　墳　各　説

Ⅰ　平瀬１号墳

(1)　墳丘と周堀

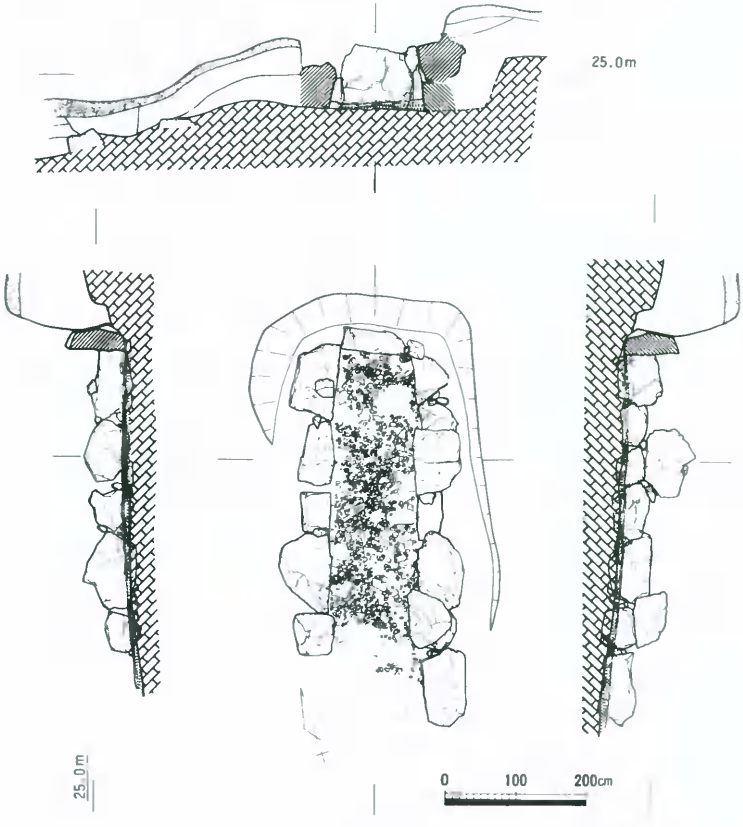
ほぼ南に開口する横穴式石室を内部主体にもち、古墳群中で最南に位置する１号墳は、もっとも規模が小さく保存状態も劣悪であった。墳丘南端の標高は24.25m、北端で25mをはかり、山裾に接して築かれている。本来、小規模であったため調査前には、盛上の高さを認めること



第６図　平瀬１号墳墳丘図（Ｓ＝１：200）

はできず、むしろ石室内に土砂がうまって周辺より低い状態にあり、しかも南と西は後世つくられた古道によって墳端がはなはだしく損なわれていた。

石室の長軸に対して、直交または平行する試掘溝を入れて土壌観察した結果によれば、礫混りの地山層を一定度整地して、石室の石材を据え置くための長方形掘方が一段低くうがたれる。奥壁ちかくでの上幅は2.9m、下幅2.2mである。掘方の肩部は段を形づくり、試掘溝の東と北において認められる。地山の上に盛られた墳丘の土層は、東と北では黄灰色粘質土一層のみで、西側では二層に分かれ、上層に拳大の礫を混入した微砂質土が載るものの基本的には他の試掘溝と変わらない。いく層も丁寧にたたきしめた構造とはいいがたく礫を混入しつつ一挽に盛り



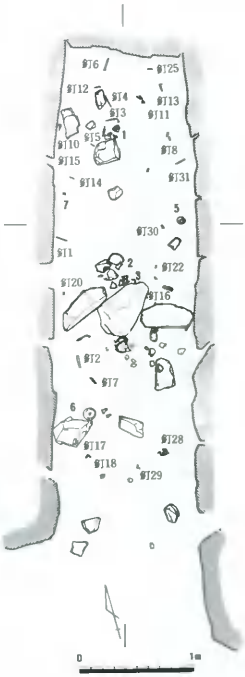
第7図　平瀬1号墳石室平・断面図（S＝1：80）

上げた感が強い。この盛土は最も厚い所で100cm、ほとんど55cm未満をはかるにすぎない。なお、墳丘西端の山途部分では、路面下から造成土が水平に堆積していた。

墳端には周堀がめぐり、その幅は東で2.5m強、北で3.5m強を計測でき、深さは0.4～0.6mである。埋土は墳丘土と相違した黄褐色粘質土で礫を含まない。周堀を完掘した結果、墳裾じたいは北が高く南が低い、径9～10mの正円でない小円墳であることが判明した。

(2) 横穴式石室

ほぼ南に開口する横穴式石室は玄・羨の区別のない無裾式で、中央部がやや胴ぶくれした形状を呈する。奥壁には幅1m、高さ0.9mの玢岩一枚を据え立てる。側壁の方が高い残存状態からしておそらくもとはもう一石を載せて構築されていたのではないかと推察されるが、すでに失われている。東の側壁は、現状で最下段に7石をみとめ、高さ40～60cmをはかり、2段目の石材2個を残す。そこでの残存高は1.1mであり、普遍的な横穴式石室の側壁は3段積みであるから、この点を考慮に入れても、本来の石室高は1.5m程度の低いものであったと思われる。西側壁は最下段のみ合計5石を残すにすぎず、前端部は欠失している。これら側壁の材質は奥壁と異なりすべて粘板岩である。石室の残存長約5m、幅は奥で1m、中央部に最大幅があって1.25mの計測値を示す。



第8図　平瀬1号墳遺物出土状態（S＝1：50）

床面には、やや散漫でありながらほぼ全面に拳大とそれよりやや小さめの礫が敷かれ、最終床面が礫床であったことを物語る。その直上には中世瓦質土器が散在するところから、2次的な祭祀がおこなわれたことも確実である。須恵器片はこの礫床に密着してあるいは直下からも検出されたし、棺台と思われる25cm×30cm大の角礫が、東側壁にそって4個、中央付近に4個、奥壁ちかくに数個みとめられたが、どれとどれが組み合うのか、そうした関係はいまひとつ判然としない。ただ、石室中央部を遮断するかのように据え置かれた3個の石は特に大きく、少なくとも長さ40cm以上、うち2つは50cmを越え、このラインで木棺の短辺を支えていた可能性が強い。これら棺台から奥壁までの距離は2.5m、奥壁付近の棺台と対をなし、西側壁に沿って一棺が存在したことは、点々と遺存する棺釘の出土状態と照らしあわせ、ほとんど疑いの余地がない。また石室の空間

とやはり棺釘のあり方からして、上記の木棺の東に並置された別の一棺を予測してよさそうである。さらに、石室の手前にも2棺以上の入る空間があり、棺台がある。小墳のわりに後にふれるとおり鉄釘が多量にみられるのは、追葬の数が意外に多かったことを反映しているのかもしれない。

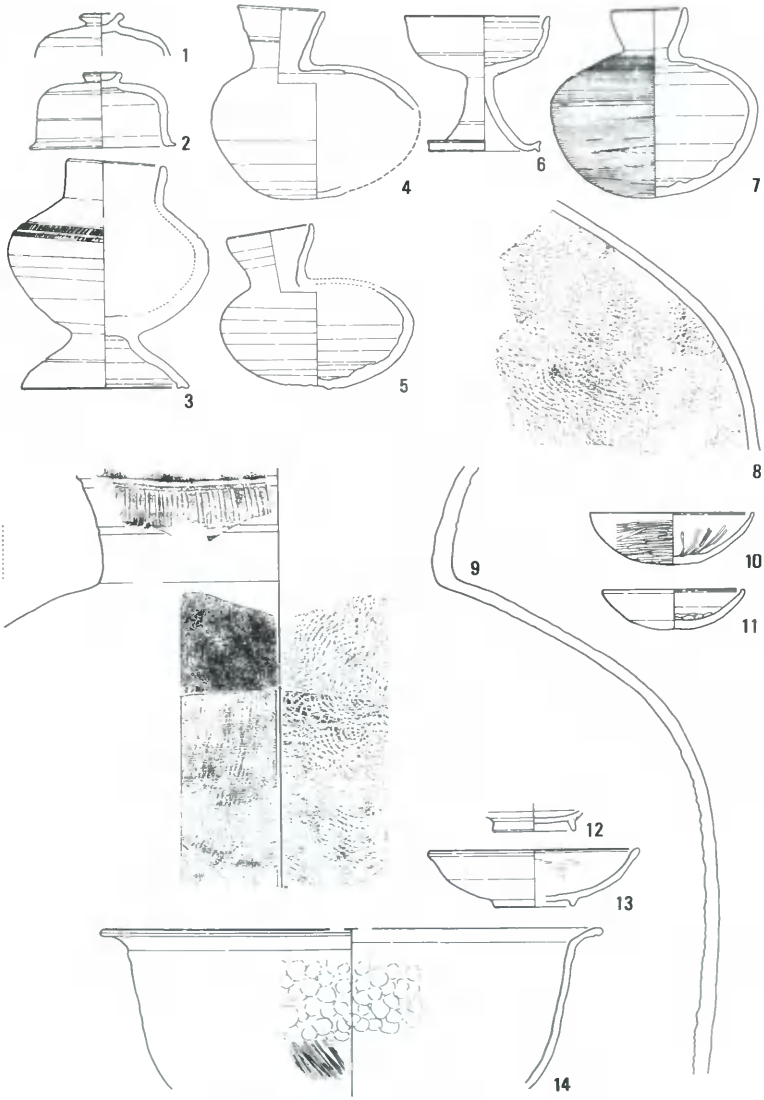
(3) 副 葬 品

須恵器・土師器（第9図、表1、図版16・17上段）

須恵器は合計9点を数え、器種は有蓋壺の蓋2・短脚付有蓋壺身1・平瓶2・高杯1・短頸壺1・大形甕2であり、平瓶**4**が石室内埋土中から出土したほかはすべて、最終床面である礫床を取り除いた第1次埋葬の際の土床に接した状態で検出されたものである。もっとも、羨門ちかくから出土した大型甕**8**と墳丘南西の埋土中で見つかった大型甕**9**とは、副葬品というよりもとは石室入口の両脇に据えられた、葬祭供献用の水または酒を貯えた大甕と思われるから、これまた1次埋葬に伴うものと見て間違いないであろう。そこで、石室内の埋土中から出土した平瓶**4**の帰属のみが問題となる。平瓶**4**は、同じ器種の平瓶**5**とくらべた場合、全体としてひと回り大きく、頸部に沈線をとどめるなどむしろ型式学的には先行型式と理解できしたがって追葬の際に遊離したものと考えられる。すると、これまで礫床下の埋葬を一括して第一次埋葬と表現してきたが、実はそこにも新古の関係がありそうである。壺**7**は短頸とよぶほど極端に頸が短くなく、胴径もこの種の中では大きくやや古い要素をのこす。また甕**9**の内面にみられる当て道具原体には小さな同心円が看取できるのに対し、甕**8**のそれは大ぶりで粗く、甕9の方が古相を示す。これら3器種は田辺昭三の提唱した陶邑編年によればT・K43型式に属するであろう。他の6点は器形が相対的に小形化しているばかりでなく、すべて自然釉が付着するという共通した焼成上の特徴によって結ばれ、T・K209型式の併行期と見られる。およそ6世紀第4四半期から7世紀第1四半期にかけて順次追葬がなされた様相を物語る。

のち、土床は礫床によって覆われる。礫床上に密着して検出されたのは早島式土器**12**・**13**および土鍋**14**である。早島式椀の高台の高さの差によって若干の時期差をみとめえるが、これらはおおむね鎌倉時代初期およそ12世紀後半ごろのものであり、その頃、礫床敷きの石室内が再利用された事実は確実である。だからといって、礫床として整えられたのがその時期であるとは断定しがたい。

そこで注目されるのが土師器杯**10**・**11**の存在である。両者は口径に差があり、胎土も精粗の違いがあるにもかかわらず、口唇部を丸くおさめる特徴的な共通項がみられ、飛鳥II期およそ7世紀第2四半期のころのものと思われる。すでに新たに横穴式石室をつくることなく、追葬をする慣習も途絶えはじめたこの頃、礫床を施したのではなかったか、類例の増加を期待したい。



第９図　平瀬１号墳出土須恵器・土師器（Ｓ＝１／４）

表1　平瀬1号墳出土須恵器等観察表

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器	有蓋壺の蓋	残存 9.4		残存 3.2	天井部外面ヘラ削り順回り、内面ヨコナデ	(内)灰白色、(外)背灰色	微粒子の砂粒(長石)少	石室左奥棺台付近(古)、4片を接合、端部欠
2	〃	〃	9.1		5.3	天井部外面ヘラ削り順回り、のちヨコナデ、自然釉付着	内・外面とも灰白色	1㎜前後の砂粒(長石)多い	石室右奥出土(古)、完存
3	〃	短脚有蓋壺	6.83	11.83	16.2	胴上半ヨコナデ、下半ヘラ削り(左)、脚部ヨコナデ	(内)背灰色、(外)明背灰色	1㎜前後の砂粒(長石)多い、2㎜以上3㎜以下の礫(長石)多い	2と対をなす(古)、完存
4	〃	平瓶	6.1	胴径 14.8	13.6	胴上半ヨコナデ、下半ヘラ削り(左)、胴上面に小突起がつく	内・外面とも明緑灰色	微粒子の砂粒(長石)	石室内埋土中、つくり丁寧、1/3欠失
5	〃	〃	5.8	胴径 13.6	残存 7.2	胴上半ヨコナデ、下半ヘラ削り、内面ヨコナデ、自然釉あり	(内)明背灰色、(外)暗緑灰色	外面に2㎜以上の砂礫が多く目立つ	第1次床面(古)、肩部欠損
6	〃	高杯	10.08	7.75	9.6	杯部上半ヨコナデ、下半ヘラ削り、脚部ヨコナデ、脚部はりつけ接合	(内)暗背灰色、(外)背灰色	1～1.5㎜の砂粒(長石)多い	第1次床面(古)、脚裾一部欠落
7	〃	短頸壺	5.44	胴径 14.6	13.4	口縁部内外面ともヨコナデ、胴部外面カキ目、底部のみ一部ヘラ削り	(内)背灰色、(外)灰白色	1～1.5㎜の砂粒(石英・長石)やや多い、まれに2㎜強の砂礫(石英・長石)	第1次床面(古)、口縁・肩部わずか欠落
8	〃	大形甕	不明	胴径 67.2	残存 26.1	外面のカキ目は自然釉によって手拓不能、内面当て道具原体鮮明	(内)背灰色	1㎜前後の砂粒(長石・石英)少	羨門付近、胴部ごく一部
9	〃	〃	頸部中央 27.8	胴径 62.0	不明	頸部に、横2本の沈線をめぐらし、その間をヘラ書き垂線でうめる、内・外面ともヨコナデ、外面に自然釉	(内)背灰色	砂粒きわめて少ない	南西墳丘埋土中
10	土師器	杯	11.2		3.7	口縁の内外ヨコナデ、外は円滑なヘラミガキ、内面に暗紋、口唇部は丸く玉縁状	内・外面とも橙色	微粒子の砂粒(長石)ごく少	1/4欠損
11	〃	〃	9.8		2.8	内側底部に指圧痕、口唇部は上と同じく玉縁状	(内)橙色、(外)明黄褐色	微粒子の砂粒(長石・石英)少、黒雲母・金雲母を含む、ザラメ	風化いちじるしい、体部1/2、口縁1/5残存
12	早島式土器	椀	不明	5.80	残存 1.4	はりつけ高台はなお一定の高さを保つ	内・外とも淡黄色	ごくまれに1㎜前後の砂粒(長石)	石室内埋土中、高台つき底のみ
13	〃	〃	16.2		4.05	外面ヨコナデ、内面わずかにミガキあと、高台低い	内・外とも灰白色	やや大きめ(2㎜前後)の石英がややめだつ	石室内埋土中、礫床上(新)、体部・高台1/2残存
14	土師質	なべ	34.9		残存 11.3	口縁部内外ともヨコナデ、胴部指オサエ、外の底部若干ヘラミガキ、外スス付着	内・外ともにぶい黄橙色	1～2㎜の砂粒(長石・石英)中量	礫床上(新)、ひどく摩耗

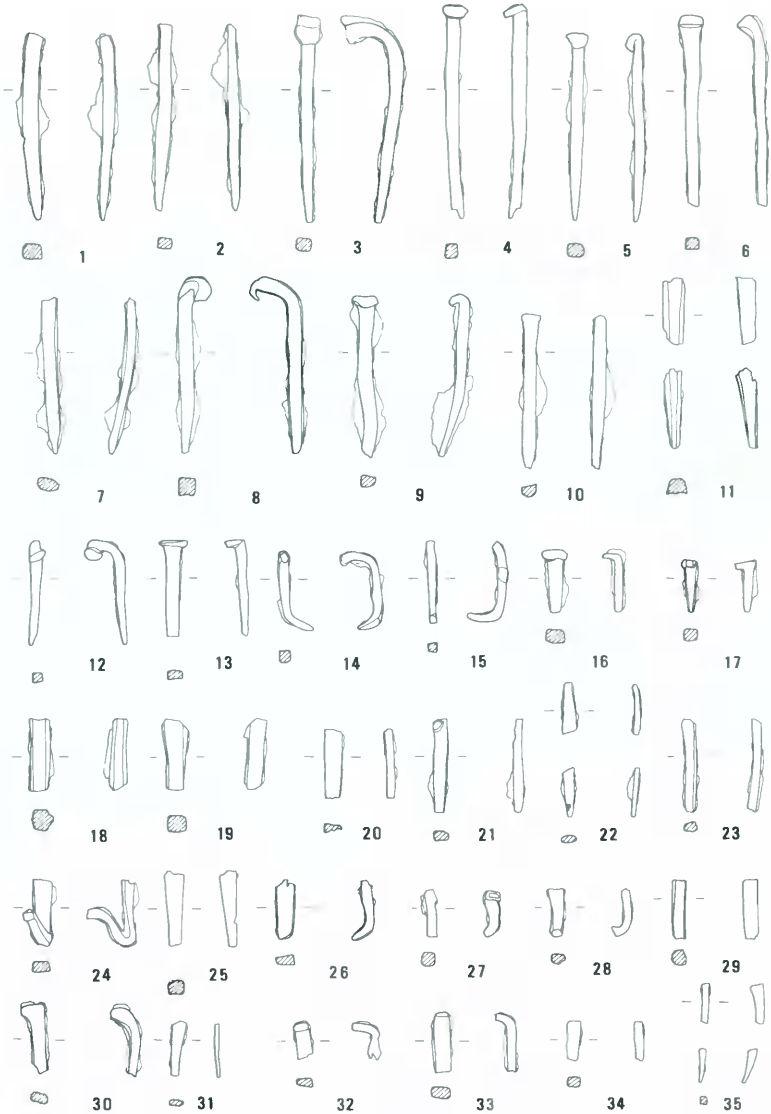
棺釘（第10図、表２、図版17下段）

土床から検出しえた小鉄片多数はすべて棺釘であり、総数35本を数える。断面は方形ないし長方形で頭端部を直角に短く屈折させ、先端を尖らせた形状である。長大なものから極小のものまで４種類に分類でき、長さを示せば大は12cm、中が10cm、小が７cm、極小が４cm。幅と厚さはそれぞれの大きさに準じてさまざまである。これらは出土状態が散在的で一棺に所用した総数と見るよりも、消失したいくつかを考慮に入れて複数棺のものが残存した数と考えた方がよいかもしれない。

棺材としては、薄い板状のものではなく角材のごとく分厚い材を用いたことが判る。棺釘８には、長軸に対して直交する方位に幾筋もの木目がのこされ、頭部から下約2.6～5.4cmの間に顕著である。むろん釘の先端は木材を貫通していたに違いないから、欠損した釘先端部を考慮して、逆に木目の上端までを計測すると８cmていどとなる。棺材は厚い角材であった。

表２　平瀬１号墳出土棺釘計測表

番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	9.89	0.96	0.91	15.5
2	9.92	0.75	0.93	15.6
3	11.0	0.78	0.67	14.8
4	11.36	0.67	0.75	13.0
5	9.97	0.90	0.70	11.3
6	10.12	0.70	0.72	14.6
7	8.38	0.78	0.77	13.2
8	9.34	0.79	0.90	22.2
9	8.60	0.88	0.78	22.0
10	8.22	0.72	0.71	11.7
11	7.89	0.60	0.85	13.7
12	5.58	0.53	0.55	4.2
13	5.11	0.79	0.53	4.2
14	4.21	0.61	0.77	4.0
15	4.42	0.42	0.53	2.7
16	3.32	1.02	0.76	4.8
17	2.81	0.69	0.81	2.7
18	3.83	0.80	1.11	10.9
19	3.77	0.99	0.91	9.4
20	3.69	0.92	0.50	3.2
21	5.01	0.78	0.51	5.5
22	5.36	0.78	0.36	2.9
23	4.95	0.53	0.51	5.1
24	3.57	0.92	0.58	7.4
25	4.0	0.81	0.75	5.7
26	3.16	0.93	0.54	3.5
27	2.52	0.71	0.75	2.2
28	2.55	0.74	0.58	2.5
29	3.18	0.79	0.77	4.2
30	3.84	0.90	0.62	5.1
31	2.96	0.74	0.31	0.9
32	2.01	0.87	0.44	2.4
33	3.15	0.98	0.61	3.3
34	2.12	0.68	0.52	1.5
35	3.92	0.36	0.48	1.5



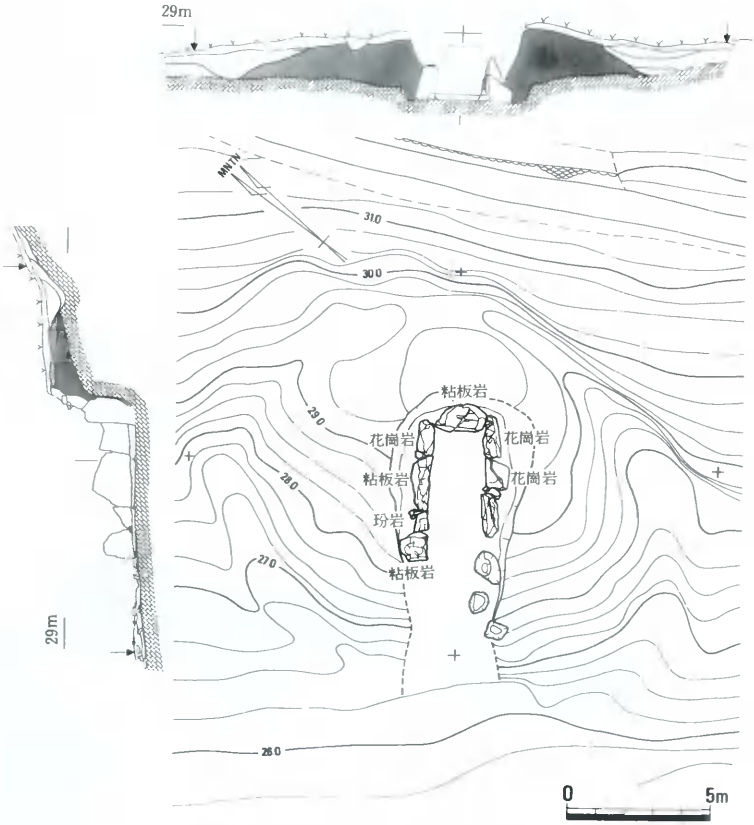
第10図　平瀬１号墳出土棺釘等（Ｓ＝１：３）

II　平瀬２号墳

(1)　墳丘と周堀

１号墳の北に接して築かれた２号墳は、ほぼ南西に開口部のある横穴式石室を内部主体とする楕円形墳で、この支群中ではもっとも大きい。にもかかわらず、外表施設としての葺石も埴輪も見られない。

墳丘の盛土は原則的には一層、礫を含有した濃黄灰色粘土を積みあげている。背面で二層に分層できたのは色調の明るさにおいて若干の違いが認められたからにすぎず、礫を多量に包含



第11図　平瀬２号墳墳丘図（S＝1：200）

する点では上・下層ともほとんど差異はない。最小の1号墳も最大の2号墳も、他の古墳の墳丘断面にしばしばあらわれる版築状の層序関係は看取できず等しく一挙に盛土がなされた様相をとどめる。現状でもっとも高く残された盛土高は、地山から約1.95mである。

周堀は2.0～2.5mの肩幅をもって全周するが、背後の山際において幅狭く地山面を深くえぐり、両脇にゆくにしたがい徐々に深さを減じつつ幅が広がり、石室入口付近で途切れる。ちなみに周堀底の幅は0.6～1.0mほどで前面と背面との周堀底の比高差は約2.5mである。周堀内には、まず黄灰色粘土がたまりその土は礫を含まないか少量混じる程度であり、部分的にはその上層に礫混じりの黄灰色粘土が堆積している。これらを除去したところ、南北約14m、東西約11m強に復原できる、正面観の広いわりに奥行の詰まった楕円形を呈することが判明した。奥壁の位置は、一般的なそれと異なり墳丘の中心になく、奥寄を占めることも特徴的である。1号墳と2号墳の周堀間は4mを隔てるにすぎないほど近接している。

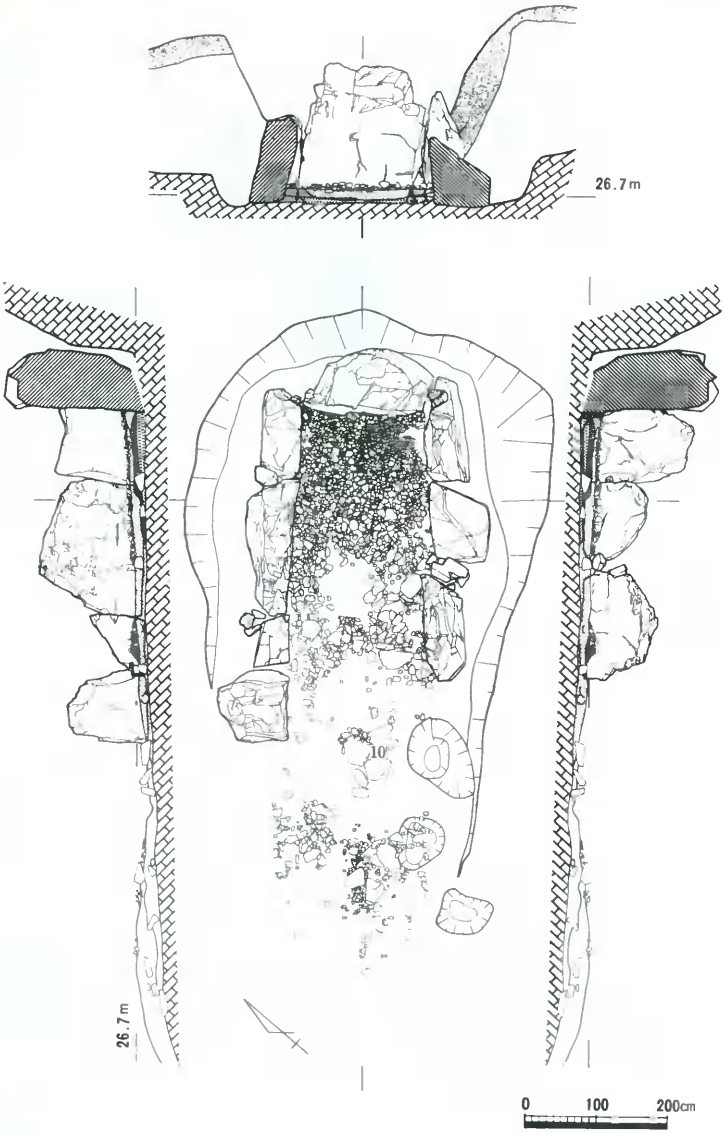
(2) 横穴式石室

地山を切り込んであらかじめ堀方が成形される。その平面形は長方形を意図しているが、奥壁あたりの短辺は外にむかい弧状を呈し、掘削高約2mに及ぶ。前面入口に近づくにつれしだいに高さは低くなり5～7mで平坦面に接する。最奥での肩幅5m弱、底幅約3.5mである。

石室の石材は大半が抜き取られ、現状では奥壁一枚と両側の最下段のみがかろうじて残され、一方に3個、他方に4個をとどめる程度まで破壊が及び、入口の形状もしたがって石室全長も知るてがかりはない。奥に据え立てられた石材は幅1.7mで高さ1.9m、厚さ0.9mほどの巨石であり、各側石の幅は大は1.9m小は0.7mで高さはさまざまで必ずしも上端をそろえるような構築ではなかったらしい。

石室の内法の幅は奥壁付近で1.7m、およそ中央ちかくと思われるあたりで1.9m強をはかり、やはり胴ぶくれの無袖の構造ではなかったかと推察される。前端部は不明というほかないが、側壁の一方の延長線上に浅く窪んだ穴3個があり、これが側壁を据えた跡を示すものと捉え、奥壁から手前へ8mほどのところにやや乱雑な在り方ではあるが礫床のそれよりも大きい人頭大の礫がほぼ軸線に直交するように残されている。わずかな盛り上がりもあってあるいは閉塞施設の最下部が遺存する可能性を示す。こうした状態に加えて墳丘の等高線の走り具合を考えあわせると、およその石室全長は7m以上9m以内の範囲でとらえてよいのではないか、と思われる。

床面は礫床。とりわけ奥壁ちかくには拳大ないしやや小ぶりの円礫がぎっしり敷かれ、手前ほど薄くあるいは攪乱されて消滅した状態であらわれた。床面として整えたに違いないこの礫床の上にはしかし、なんらの副葬品もみとめることができず、後世、鉄釘1本さえ残さないほどきれいに取り去られたか、廃棄されたか、そんな状態を示した。この礫床は実は最終床面で



第12図　平瀬２号墳石室平・断面図（S＝1：80）

あることに気づくまでには、それほど時間を要しなかった。おそらく乱掘者も知るよしもなかったのであろう、礫床に被覆されて下層の床面と副葬品は、奥壁付近に限定的であったとはいえ、きわめて保存良好なまま残されていたのである。奥壁ちかくでの床の層位を上から順に記すと、こうである。礫床をつくるため全面にあるいは部分的に暗褐色土（Ⅰ層）をわずかに敷いたらしい。その下層には若干の砂粒を含む黄灰色粘質土（Ⅱ層）が認められ、さらに灰褐色砂質土層（Ⅲ層）を間層として挟んだ最下層には灰色粘質土（Ⅳ層）が見られる。

こうした層序にもとづいて、埋葬順にしたがって記すと、以下のように理解することが可能であろう。

まず第１次埋葬は、Ⅳ層の灰色粘質土におおわれてその中から出土した副葬品の一群によって、うかがい知ることができる。床面に密着して数個の角張った人頭大とそれよりやや大きめの石が残されていた。ちなみに奥壁右奥の１石は30cm×30cm大をはかる。奥壁の手前約50～90cmのところには、大小４個の石があたかも仕切石の役をになうかのように石室幅をさえぎって横一線に並び置かれ、仕切石の手前中央にも30cm×20cm大の石２個と左にやや小さな別の１石がある。これらの石はがんらい棺台として使われたものかもしれない。仕切石と奥壁との空間部には、杯身・蓋杯・高杯・平瓶・碗など合計20点の完形または準完形の須恵器が残され、仕切石の１石に接して小刀一口が見つかったのに加え、仕切石の手前でも平瓶１・高杯１・杯身１・蓋杯１などの完形品が検出されたほか多量の玉類と耳環が遺存していた。

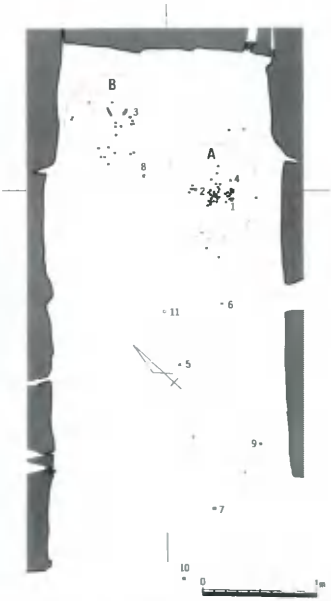
装身具である耳環**1**・**2**は断面八角形の特異なもので明らかに一対をなす。両者の出土位置は25cmしか隔たっていないばかりか、そこにはまた、首飾りであった夥しい量のガラス小玉が残されており、被葬者一体分の頭部および頸部の位置を想定させる。これらガラス小玉は紫黒色の大ぶりのもので仮に玉Ａ群と捉えるならば、いっぽう左奥に偏在する小粒で明度の高い緑色の小玉群をＢ群とみなすことができる。Ｂ群には耳環**3**が伴うように見えるが、これと対をなすもう一個は特定できない。

次いで第二次埋葬の副葬品は、第Ⅱ層の黄褐色粘質土にパックされており、いいかえれば最終床面である直上の礫層を取りはずした直下層に覆われていたのである。この層の出土品中とくに注目に値するのは、鍔付きの大刀１口と断面円形の耳環多数である。須恵器の圧倒的多数もこの層に含まれていた。

最後に、礫敷き床面が形成される。しかし、この床に埋葬された施設および副葬品は後世の乱掘によってなにひとつ残されていなかったのである。

第13図　平瀬２号墳第二次埋葬の副葬品
（S＝1：50）

第14図　平瀬２号墳第一次埋葬の須恵器



第15図　平瀬２号墳第一次埋葬の玉類

(3) 副　葬　品

須恵器・土師器

蓋杯（第17図、表３、図版18）

蓋杯は19点を数え、うち**1**～**10**は第一次埋葬に伴うものである。平均的にいって口径は13cm強、器高４cm前後で、体部ヘラ削りは天井部のごく狭い範囲に限られ、総じて田辺編年のT・K43型式に属する。**8**だけは口径・器高とも小さく新型式のものが混入した可能性があり、また**9**は、天井部中央に碁石状のつまみを有する壺の蓋と思われるが、壺じたいはすでに消失して未発見である。**11**～**19**は第二次埋葬面から出土している。しかし、前者の一群とそれほど大きな差異はみとめられない。**16**のみ口径が小さく天井部も平坦で、やや新相の感をいだかせT・K209型式に入るかもしれない。

杯身（第17・18図、表４、図版18・19）

17点のうち**22**～**24**・**26**～**29**の７点が第一次埋葬の最下層から出土している。他の10点は第二次埋葬に伴う。いずれも口径12cmていど、器高４cm内外で、受部の立ち上りは低い。口径器高とも短小な**34**をのぞけばT・K43型式の範囲で捉えてよい。

高杯（第18図、表５、図版19）

須恵質のもの６点と土師質のもの２点、合計８点である。**41**は第一次埋葬に伴った唯一のもので、長脚二段透しの典形かつ代表的な形状をとどめる無蓋高杯であり、T・K43型式の古段階ないしM・T85型式までさかのぼる蓋然性がつよい。本墳の初葬の時期をものがたる注目すべき資料である。残るすべては第二次埋葬に共伴したものである。**37**・**38**は長脚二段透しの有蓋高杯。特に注目に値するのが**42**の短脚二方透しの高杯である。おそらく岡山県南では初めての出土品であろう。外来品であることは間違いない。杯部の外表の一部や脚部の裏面には漆黒色に発色したあとが認められ、あるいは朝鮮半島から将来されたものではないかとの疑いさえいだかせたが、彼の地のものは脚部の段のあたりに明瞭な突帯をもち、どうもこれとは異なる。列島内に目を移すと、鳥取県・陰田遺跡の出土品中に、長脚二段透しに混じえて短脚のものがあり、県下にあっても鏡野町・半峪第８号墳、津山市・寺山A号墳などに近似した出土例がみられる。むろん県北のものは共伴遺物によって若干古相を示すとはいえ横穴式石室導入後も依然として短脚高杯の系譜がたどれるという点に、留意しておく必要があろう。したがって本例の二方透し短脚高杯は、６世紀後半ごろに県北ないし山陰あたりから持ち込まれたか、その影響のもとにつくられた可能性を想定してよいと思う。**43**・**44**は全体的に小形化し、脚部に透かし孔をもたない。その編年的位置はT・K209型式の併行期と考えられる。**39**と**40**は土師質高杯であり、特に**40**は大ぶりのもので、これは倒置した状態で検出されたが、杯部の背面に載っかるようにしてのち触れる大刀一口が発見されたことによって、両者が不可分の関係にあったこと

をうかがわせる。

提瓶（第19図、表５、図版21）

48と**50**は第一次埋葬に、**49**と**51**が第二次埋葬に伴ったものである。**48**は口縁部をやや被厚させているが、他は単調に丸くおさめるか、あるいは**50**のように口唇に端面をつくり出している。耳は**48**・**49**のものが環状から退化しつつも短く取り付いているのに比し、**50**・**51**ではその名残りとして突起状に貼付されているにすぎない。上限がT・K10型式にとどくものはなく、**48**がM・T85型式に入る可能性があるとしてもT・K43型式の中での新古の関係を示すものであろう。

壺（第20図、表５・６、図版20）

壺は**52**～**57**の５点。**57**の台付鶴首壺のほかは、胴の張り具合に差があるもののほぼ成形の似た長頸壺である。**52**の肩には円形突起が貼付されている。

平瓶（第20図、表６、図版20）

58の一点のみ。やや小型化した平瓶でT・K109型式に属するようである。

醂（第20図、表６、図版20）

２点のうち**59**は第一次埋葬に、**60**は第二次埋葬に伴ったもので、大ぶりの**59**はT・K43型式、小ぶりの**60**はT・K209型式に帰属するであろう。

台付椀（第20図、表６、図版20）

61はジョッキ用の体部に脚台の付いた器種で、このような供膳用の器種が現れるのはT・K43型式からである。

甕（第20図、表６）

62・**63**は胴部破片、**64**は口縁部である。**63**の内面に観察できる当て道具は粘土紐の接合部に合致して規則正しく動いているのにくらべ、**62**のものは粗い。**64**の口縁下には波状文がほどこされ、伝統的な手法をなおとどめる。

土師器皿（第18図、表５）

46はじゅうぶんな器高を保ち、口唇に弱いながら段を有し内に暗紋をとどめる。飛鳥II期およそ７世紀第２四半期のものである。**45**はこれより口径が小さく、口唇の仕上げも単調ではあるが一定の高さもあって、時代を下げる要素はなく、**46**とほぼ同じころかあるいは若干新しいものと見てさしつかえあるまい。**47**は鎌倉期ごろの灯明皿である。

装　身　具

玉類（第21・22・23・24図、表７・８・９・10、図版24）

玉類は合計168点を図示したが、その他、細片と化した数点が含まれている。ガラス玉の出土状態については先にのべたとおりであるが、形状および色調によって２分類でき、さらに土玉がこれに加わって、３種類となる。A類は紫黒色を呈し、俗に群青色とよばれる色調を帯び粒

が比較的大きい。これにくらべB類は一般にブルーと表現する、明緑色ともいうべき色調で小粒である。A類は**1**～**66**、他に3点の破片がある。**67**～**159**がB類に入る。ただし**116**は小粒ながら紫黒色を呈しておりA類の仲間であるかもしれない。**118**もやや濃い青緑色を呈するがB類に含めることとした。なお、図示していない破片7点もこの類に加わる。C類は土製の玉で黒色、**160**～**168**がそれであり、他に3個体分の破片が見られ、合計12点の土製黒玉は粒が大きく、視覚的にはA類とよく似た効果を与えたであろう。

耳環（第24図、表11、図版23）

総数12点である。**1**と**2**は断面八角形という共通性をもち、出土状態もごく接近しており、2個1対とみなしてよい。この資料も比較的古い特徴を有するものであって、初葬の年代を把握するうえで注目すべきものである。**3**は最下層面から出土し玉B群に近い位置を占めるとはいえこれと組合う耳環は不明。**4**は外径（上下×左右）と断面径（上下×左右）がほぼ等しい**6**とセットになる可能性が高く、両者の出土地点は約1mを隔てるにすぎない。**5**は最小の耳環でこれと形状の似たものは存在しない。**7**は地金の銅が最も太くしたがって重量も最大であるがこれと対をなすものは見当たらない。**8**は中等位の大きさ、地金断面が長楕円を呈したものでこの他に類似例はない。**9**と**10**は外径が近似するうえ、太く丸い地金の形状もよく似ておりあるいは対をなすかもしれない。**11**は極細の純銀製耳環で断面が方形にちかい楕円、まったく錆は見られない。**12**は排土中から見つかったもので出土地点が不明。銅芯金張りでありながらほとんど地金が露出している。

以上、耳環12個中で、確実に対となるものあるいはその可能性のあるものは、**1**・**2**と**4**・**6**と**9**・**10**の3組である。したがって耳環を手がかりにした被葬者数は、最低9名という数字を導き出すことができよう。

武　　器

大刀（第24図、図版21・23）

1・**2**は一振の大刀の刀身とその鍔である。鍔**1**は下端のせばまる楕円形で上下長9.81cm、左右の幅8.67cmをはかる。中央には中子の入る小楕円を刳り、表面に8つの方形ないし台形の透し穴をうがった倒卵形八窓の型式に属し、縁に銀象嵌をほどこした優品である。縁の両側に二条一対の溝を切り、その間にC字型文様を刻み、溝と文様に銀線をはめ込んだ造りである。銀象嵌のある鍔の出土例は県下では本例をふくめ3例が知られるのみである。**2**は刀身。全長の計測値97.52cmのいわゆる平造り内反刀で鎬はなく、中子は片関造りである。両側から研ぎ出された刀区の長さは78.5cm、中子の長さ17cm強で目釘孔二つをみとめる。

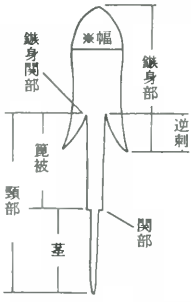
短刀（第24図、図版21）

3・**4**・**5**は短刀一口分の各部位を表現したもので、短刀**5**の全長は32.45cm、刀区22.85cm、

中子の長さ9.6cmをはかる。**3**は中子をおおう柄の木目と、柄巻き金具の残存状態を示し、**4**として柄端断面をあらわした。

鉄鏃（第25図、表12、図版22上・中段）

類銅鏃の柳葉式のもの**7**・**8**・**9**・**13**・**14**と、長頸鏃の細身式のもの**6**・**12**・**16**のほか、無茎広身式のもの**10**・**11**があり、残る**15**・**17**～**24**などは先端を欠くものの細身式の茎部と判断しうる。柳葉式のうち**7**・**8**は鏃身部、箆被部ともに長く、**8**は箆被が短く棘をもち茎に木目を残すので2型式にわかれる。細身式の鏃もまた、**6**のように方頭式に属するものと、**9**や**16**のごとく圭頭式に入るものとに区分できるばかりか、箆被に長短の差がある。**19**・**20**・**23**・**24**などは箆被が長く関に棘をつくりだし茎に木目をとどめるなど、それぞれに細身式の特徴を有している。



第16図　鉄鏃部位名称図（『効家平古墳発掘調査報告書』より）

刀子（第25図、表12、図版22下段）

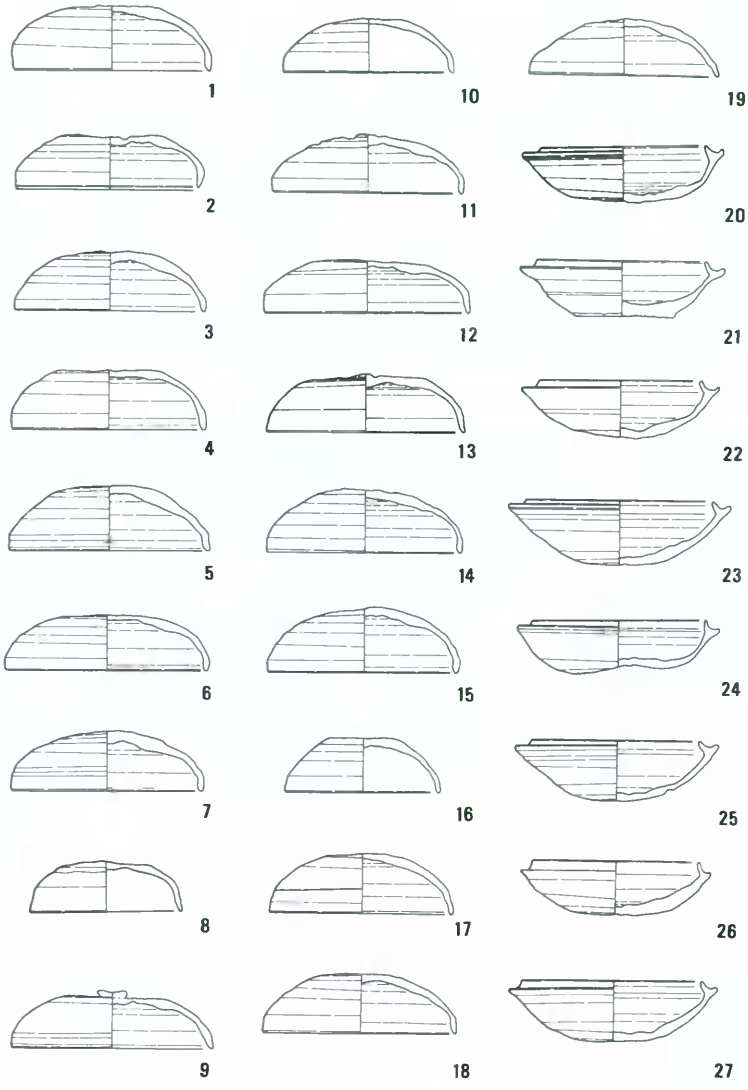
25～**33**を掲げているが、**27**は断面長方形の形状からして短刀の可能性もあり、**28**と**33**は鏃の一部かもしれない。完存する**25**は全長12.78cm、刀部長7.5cm、その幅1.48cmをはかる切り出しナイフ用の工具と思われる。**26**・**30**・**31**には鞘の木質が付着・遺存している。

棺　　釘（第25下段・26・27図、表12・13・14、図版25・26）

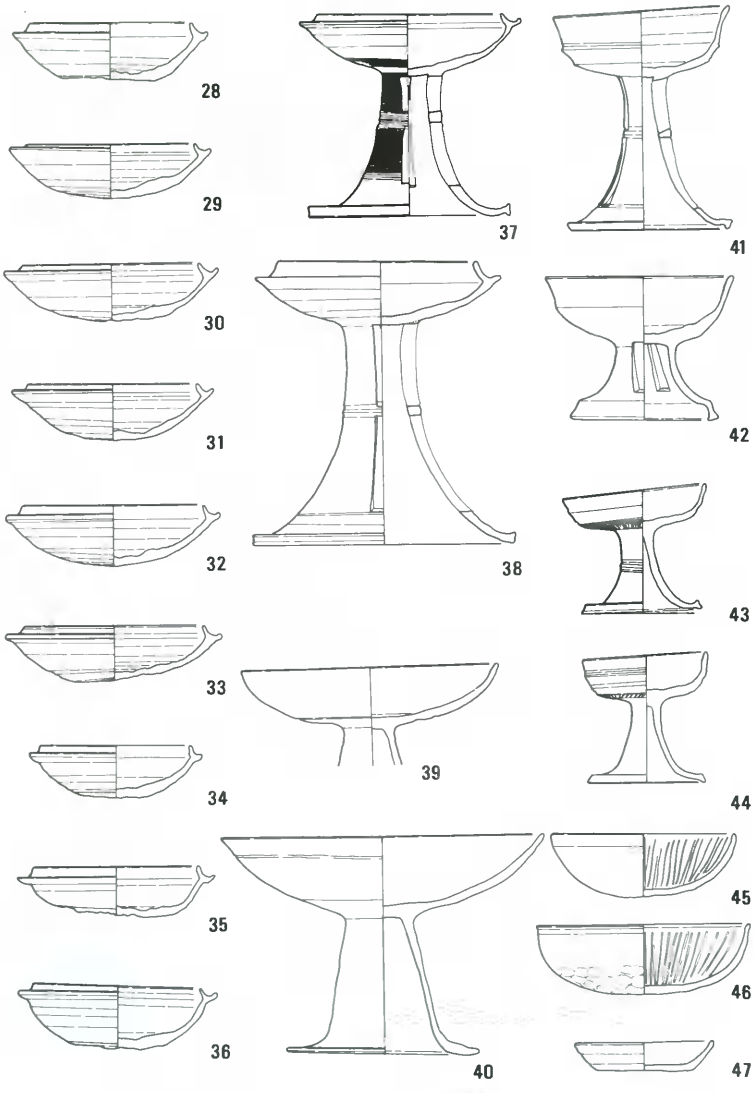
一応**34**～**144**までを一括して棺釘として取り扱ったが、多くは断片のために必ずしももとの形が判明せず、あるいは鏃または刀子の中子などがふくまれている疑いがある。また著しく屈曲したものは鎹の可能性もあるが、そうした点を諒とされたい。

この古墳の棺釘のうち最大のものは**47**で、長さ16.2cmをはかり断面は長方形、その中程の計測値は1.57cm×0.96cmである。重さ44.3g。二番目の大きさのものは長さ10cm前後から12cmぐらいで量的には最も多く**48**～**62**などがこの部類に入る。次いで**63**～**73**など長さ8cm前後のものが目立つが、先端の折れを復原して考えると上記のものと変わらないかもしれない。**62**・**63**に残る木目の幅は6～7.5cmでこれらは釘自体の先端を欠損しているので、角材の厚さは1号墳で見たように8cm以上10cmに及ぶものであったろう。もとから明らかに頭端を折り曲げた、あるいは両側に張り出した頭部のある、小形の釘も若干存在する。**109**は残存長3.65cm、復原長4.5cm。**110**も残存長3.22cmで復原長が4.5cmとなる。

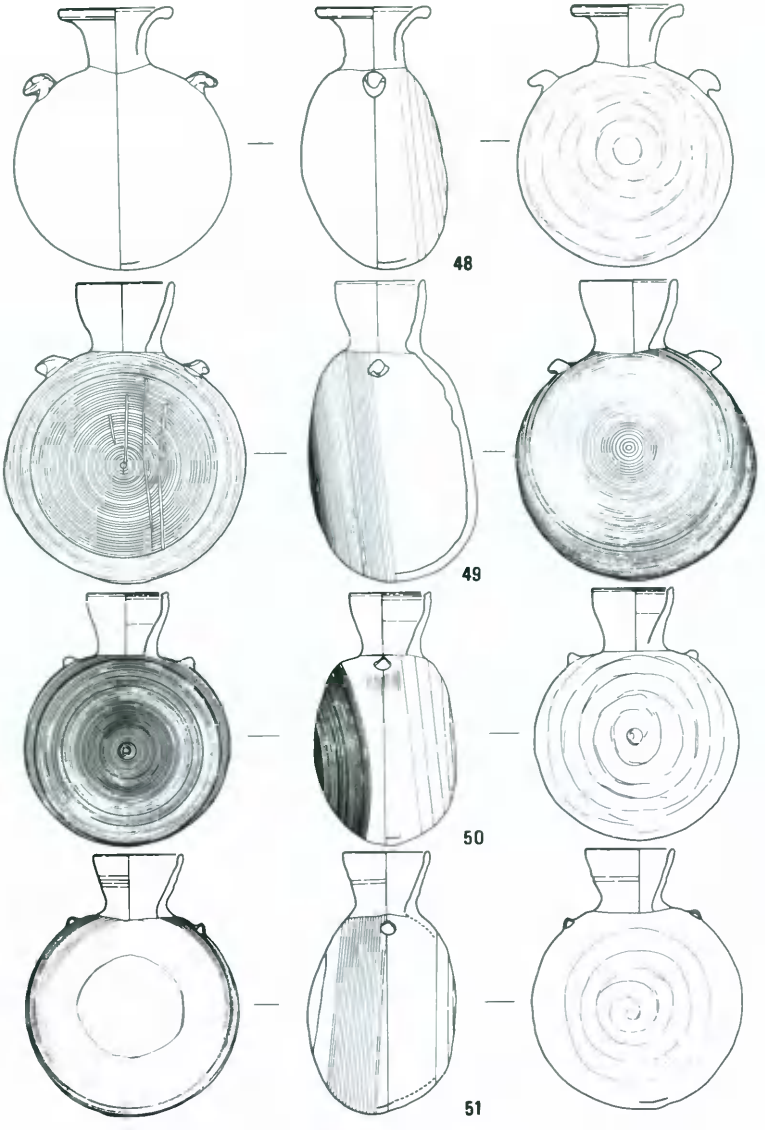
ほぼ90度に折れ曲がったものを仮に鎹として捉えると、少なくとも大小の二種類に分かれそうである。大は**72**・**78**・**130**、小は**103**・**105**・**108**などである。木棺は、機能分化を遂げた数種の棺釘とともに大小の鎹などによってつくられたに違いない。



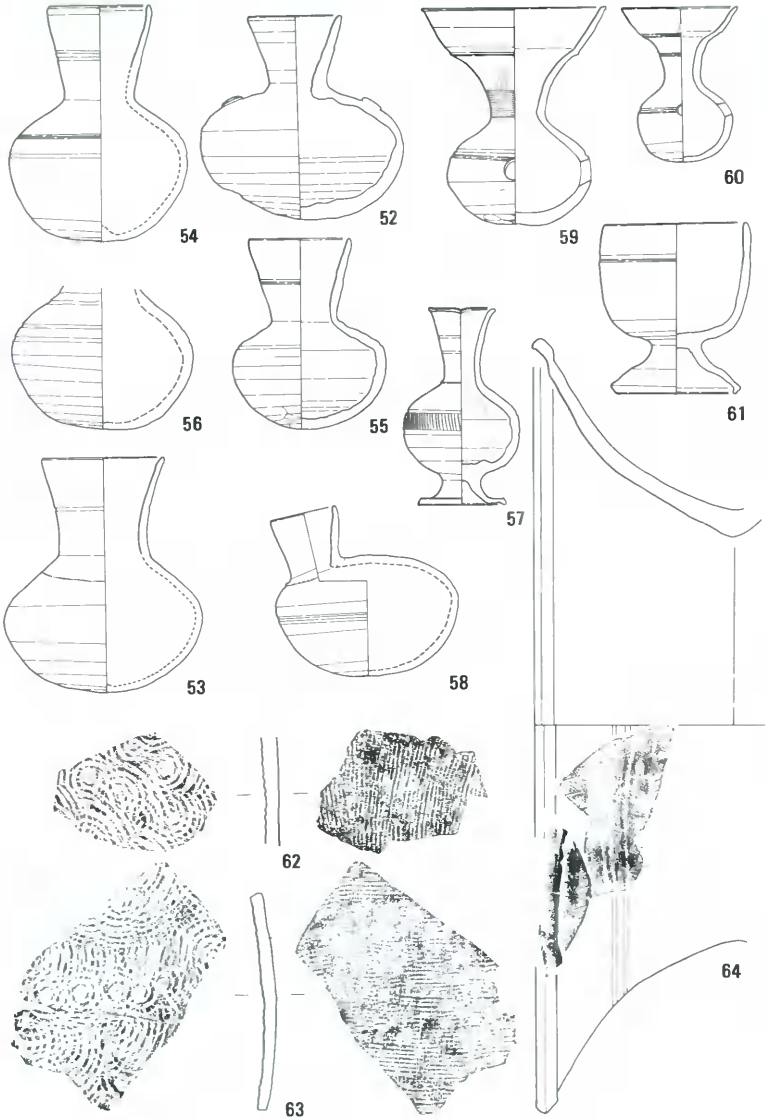
第17図　平瀬２号墳出土須恵器(1)（Ｓ＝１：４）



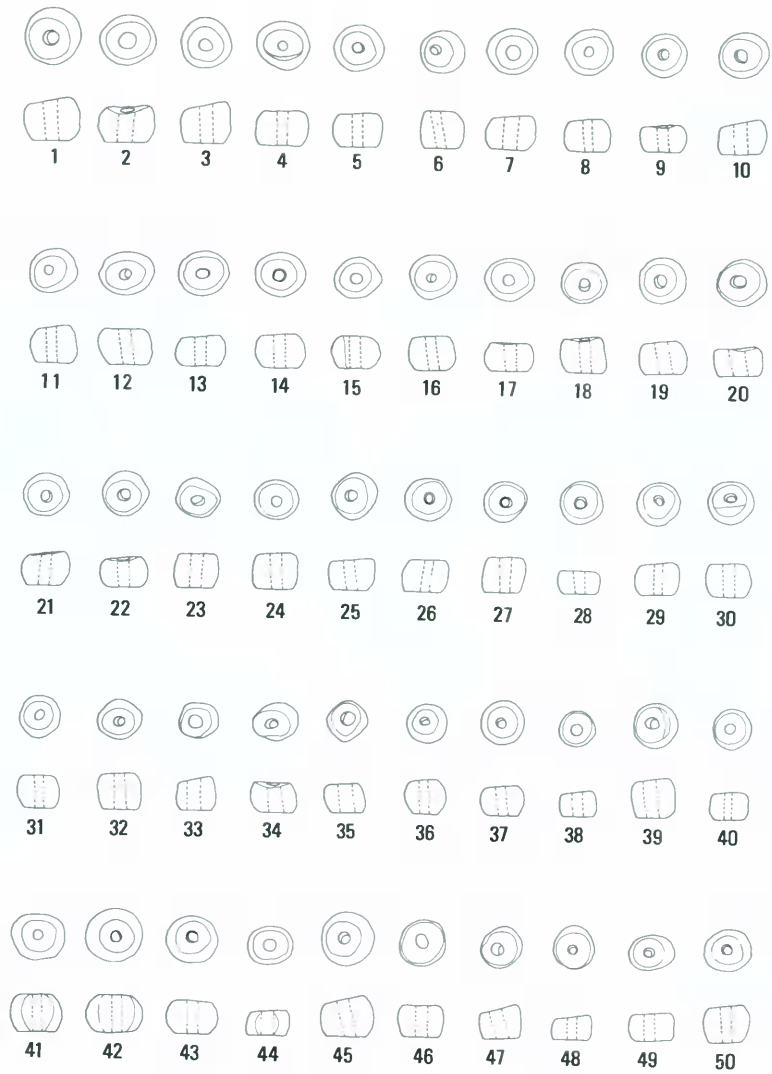
第18図　平瀬２号墳出土須恵器・土師器(2)（S＝1：4）



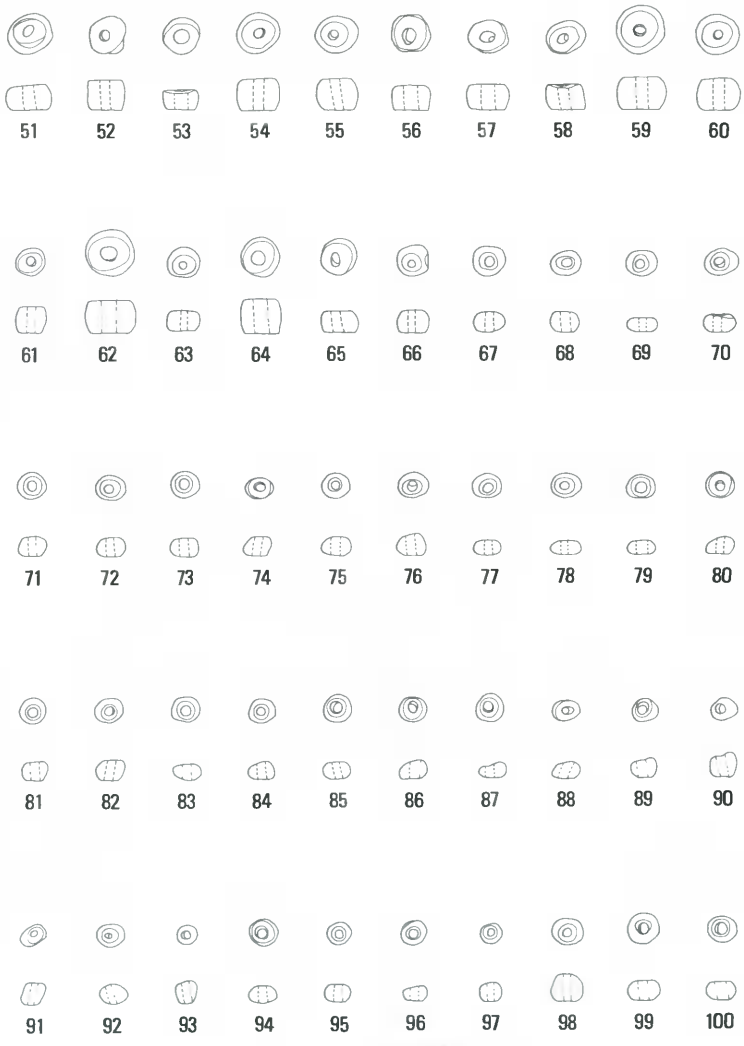
第19図　平瀬２号墳出土須恵器③（S＝１：４）



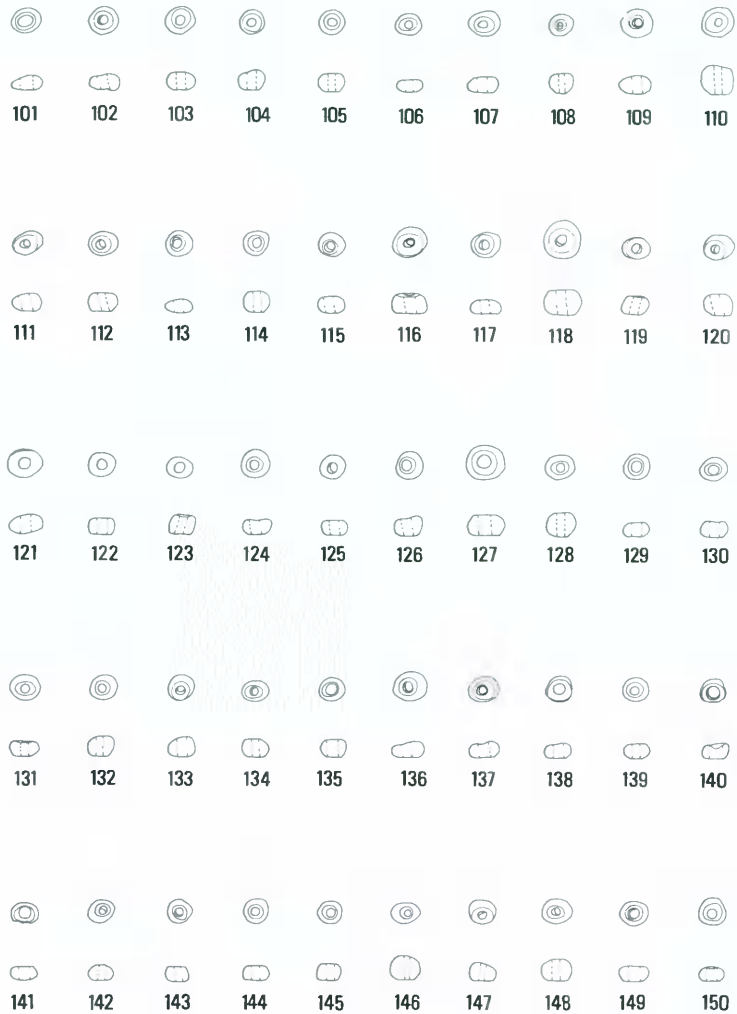
第20図　平瀬２号墳出土須恵器(4)（Ｓ＝１：４）



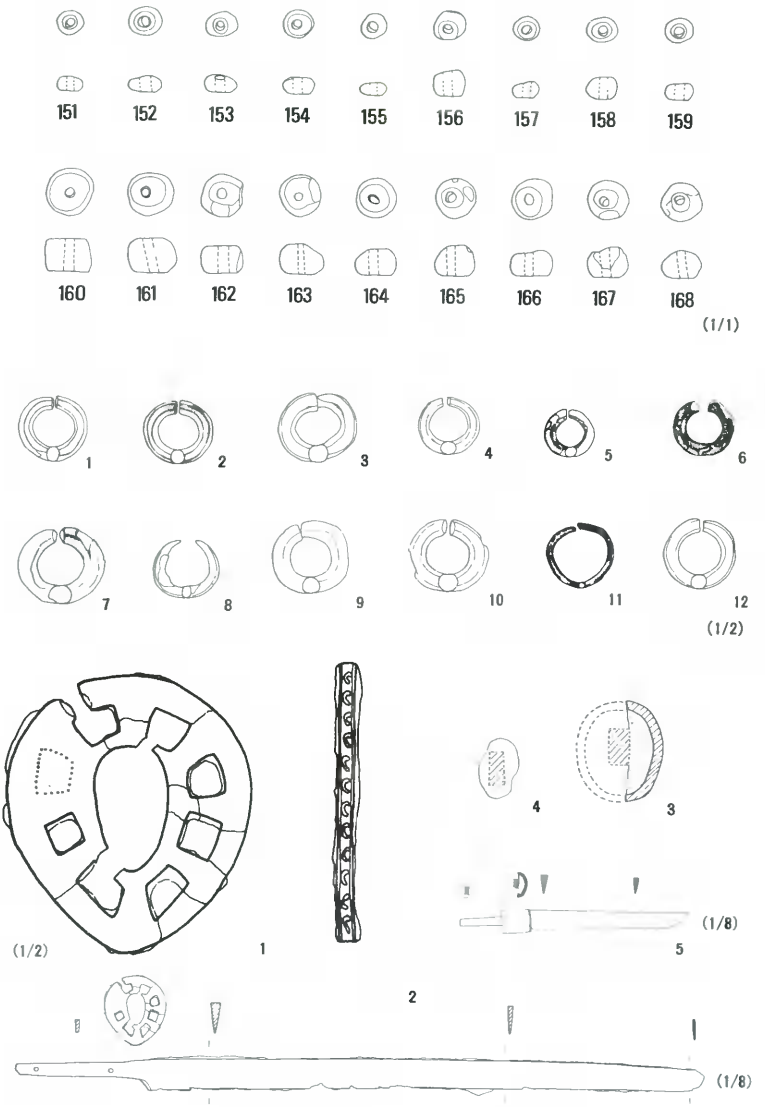
第21図　平瀬２号墳出土玉類1)（S＝1：1）



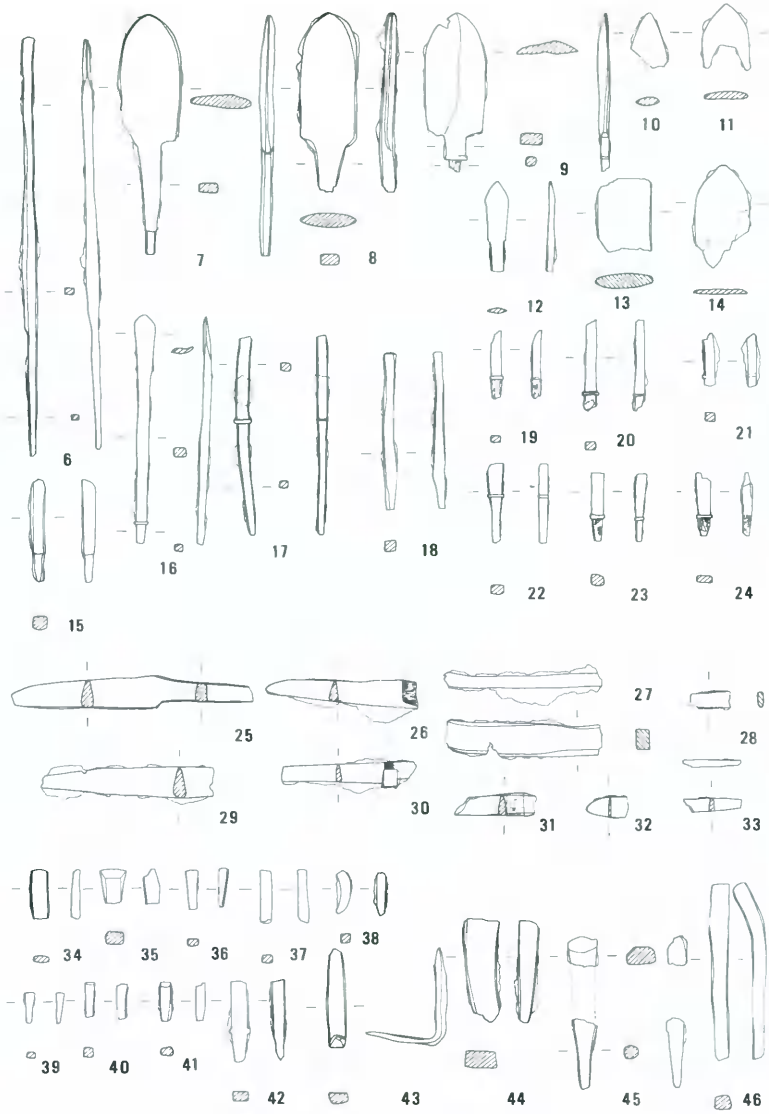
第22図　平瀬２号墳出土玉類(2)（Ｓ＝１：１）



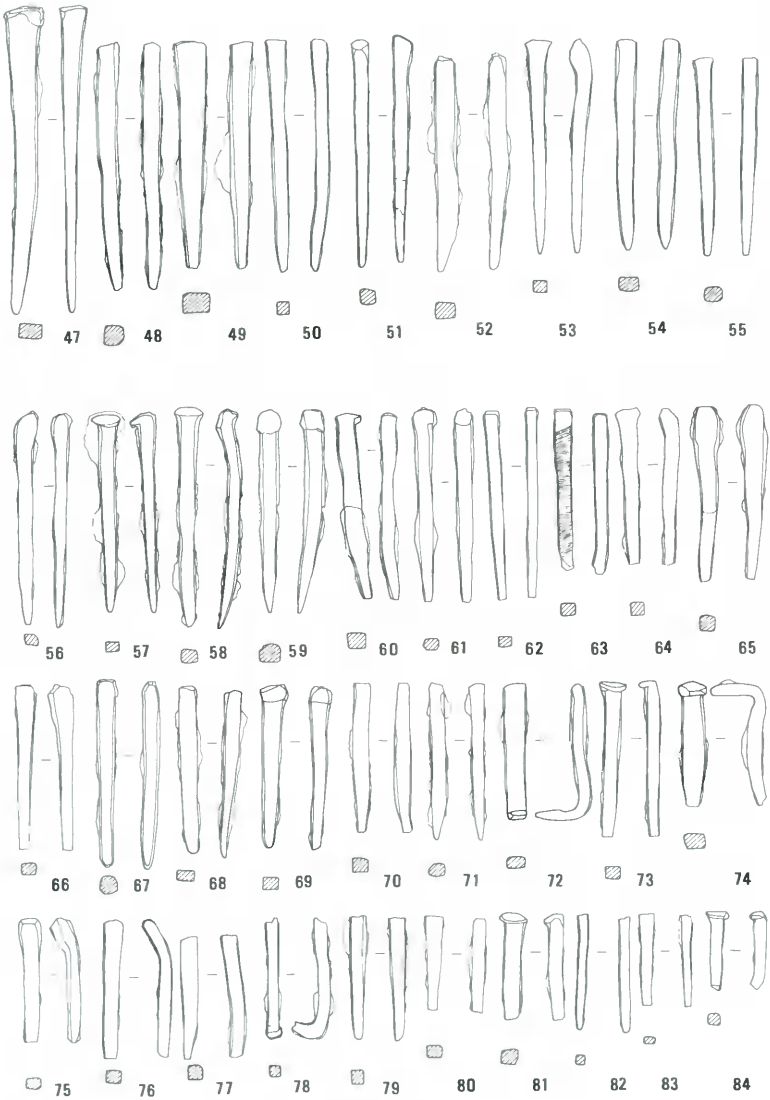
第23図　平瀬２号墳出土玉類(3)（S＝1：1）



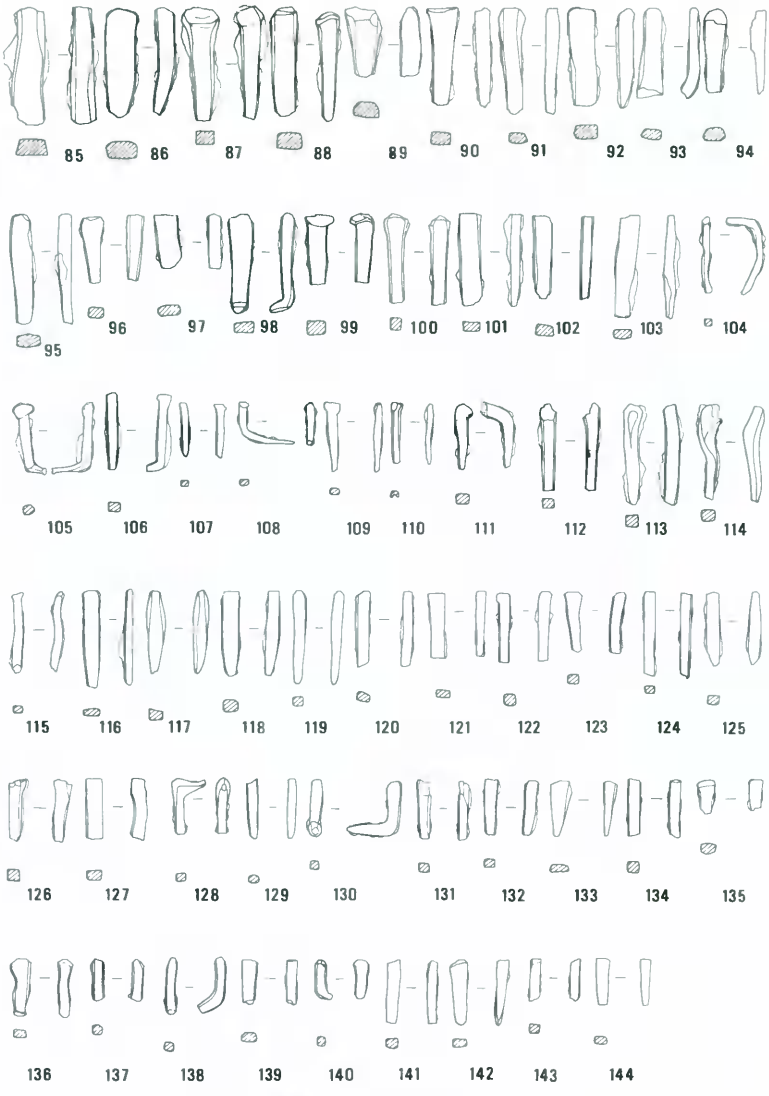
第24図　平瀬２号墳出土玉類(4)・耳環・刀



第25図　平瀬２号墳出土鉄鏃・刀子・棺釘（Ｓ＝１：３）



第26図　平瀬２号墳出土棺釘(1)（Ｓ＝１：３）



第27図　平瀬２号墳出土棺釘(2)（Ｓ＝１：３）

表3　平瀬2号墳出土須恵器等観察表(1)

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1	須恵器	杯蓋	13.57		4.55	天井部外面のヘラ削りの方向は逆まわり、内面ヨコナデ	(内)明青灰色、(外)灰色	1㎜以下の砂粒(多)、2㎜以上の砂礫(やや多)	歪あり、完品
2	〃	〃	12.76		3.85	天井部外面のヘラ削りは順まわり、内面ヨコナデ	内外面とも青灰色	外面に2㎜位の砂礫が目立つ、まれに5㎜前後の礫	ゆがみ著るしい、完品
3	〃	〃	13.2		4.2	天井部外面ヘラ削り順まわり、削り範囲狭い、内面ヨコナデ	内外面とも青灰色	1㎜前後の砂粒(長石)、まれに3㎜前後の砂礫	完品
4	〃	〃	13.3		4.2	天井部外面ヘラ削り順まわり、削り範囲は極狭、外面体部と内面ヨコナデ	(内)緑灰色、(外)暗オリーブ灰色	微粒子の砂粒(長石)少、ごくまれに1～2㎜の砂粒(長石)	焼成良好、完品
5	〃	〃	13.85		4.6	天井部外面ヘラ削り逆まわり、体部外面・内面ともヨコナデ	(内)灰白色、(外)明オリーブ灰色	1㎜以下の砂粒(長石・石英)少	焼成やや良、完品
6	〃	〃	14		3.9	天井部外面ヘラ削り逆まわり、体部外面・内面ともヨコナデ	内外面とも灰白色	1㎜前後の砂粒(長石・石英)少、まれに2～3㎜の砂礫(長石・石英)	焼成良好、完品
7	〃	〃	13.3		4.4	天井部外面ヘラ削り逆まわり、体部外面・内面ともヨコナデ	内外面とも青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少、3～5㎜の大きめな礫(長石・石英)混入	完品
8	〃	〃	10.24～10.62		3.55	天井部外面ヘラ削り逆まわり、全体として小ぶり	内外面とも灰白色	石英・長石、茶色0.25㎝、1㎝の茶色砂	やや軟質、完品
9	〃	〃	14.05		4.0	天井部外面ヘラ削り順まわり、碁石状つまみの径2.1㎝	内外面とも緑灰色	1㎜前後の砂粒(長石・石英)まれに2㎜の礫(長石・石英)炭のような黒色土混入	完品
10	〃	〃	11.9		3.8	天井部にヘラオコシ痕あり、ヘラ削り逆まわり	内外面とも灰白色	1㎜以下の砂粒(長石・石英)少	完品
11	〃	〃	13.25		4.35	ヘラオコシ痕顕著、ヘラ削り方向は逆まわり	内外面とも灰色	1～1.5㎜の砂粒(長石)少	歪あり、完品
12	〃	〃	14.44		3.8	天井部外面のヘラ削りは順まわり	内外面とも灰色	1㎜前後の砂粒(長石)少	重ね焼き痕、完品
13	〃	〃	13.82		4.1	天井部外面のヘラ削りは順まわり 体部は丸味をもちヨコナデ	内外面ともに灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少	焼成良好、完品
14	〃	〃	13.55		4.5	天井部にヘラオコシ痕、削りは逆まわり、体部外面・内面ヨコナデ	(内)明青灰色、(外)青灰色	0.5～1㎜の砂粒(長石)少	焼成良好、完品
15	〃	〃	13.2		4.65	ヘラオコシのち逆まわりの削り、内面ヨコナデ、自然釉あり	(内)灰白色、(外)暗オリーブ灰色(半分)、灰白色(半分)	1～2㎜の砂粒(長石)中	焼成良好、口縁部欠く
16	〃	〃	10.8		4.0	天井部ヘラオコシのち逆まわり削り 内面、体部ヨコナデ、自然釉少量	内外面とも明青灰色	微粒子の砂粒ごくわずか	焼成良好、完品
17	〃	〃	12.8		4.3	天井部ヘラ削りの方向不明、狭い範囲に限定、内面ヨコナデ	内外面とも青灰色	0.5～2㎜の砂粒(長石)多	焼成良好、口縁部若干欠
18	〃	〃	13.47		4.3	天井部ヘラ削り逆まわり、体部外面内面ともヨコナデ	内外面とも青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少、ごくまれに2㎜前後の砂礫	焼成良好、口縁と体部わずか欠

表 4　平瀬 2 号墳出土須恵器等観察表(2)

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
19	須恵器	杯蓋	13.3		4.1	天井部ヘラオコシ、削りは順まわり、内面ヨコナデ	内外面とも青灰色	砂粒きわめて少	歪著しい、口縁部欠損
20	〃	杯身	11.6		4.05	たちあがりは短く、底部のヘラ削りの範囲は狭い、削りの方向は逆まわり	(内)青灰色、(外)暗緑灰色(半分)、青灰色(半分)	1㎜以下の砂粒(長石)極少、2～3㎜の砂礫(長石・石英)少	焼成良好、完品
21	〃	〃	11.74	6.96	4.1	たちあがり矮小化、受部やや上向き、底部平坦、ヘラ削りは逆まわり	内外面とも灰白色	白色小砂粒	焼成良好
22	〃	〃	11.4		4.2	たちあがり内傾、底部は凸凹、底部ヘラ削りは逆まわり	内外面とも灰白色	微粒子の砂粒(長石)少、まれに1㎜前後の砂粒(長石)	焼成良好、受部若干欠損
23	〃	〃	13.2		4.6	たちあがり、受部ともに短小、底部ヘラ削りの方向は逆まわり	内外面とも灰白色	1㎜以下の砂粒(長石・石英)少、1～1.5㎜の砂粒(石英が多い)やや多め、まれに5㎜の砂礫(長石・石英)	焼成不良軟質、完形
24	〃	〃	12.25		3.85	たちあがり短く、受部は水平に出て短小、底部ヘラ削り逆まわり	内外面とも緑灰色	1㎜以下の砂粒(長石)中(外面に多い)、3～5㎜の砂礫(長石)少々(外面に多い)	底部歪あり、ほぼ完形
25	〃	〃	11.9		4.3	たちあがりは低く、受部外縁は丸くおさめる、底部ヘラ削り順まわり	内外面とも青灰色	1㎜以下の砂粒ごく少量、1～2㎜の砂粒やや多、3～5㎜の礫少々	焼成良好、完形
26	〃	〃	11.58～11.66		3.85	受部短小、底部ヘラ削りは逆まわり	(内)灰白色、(外)灰色	石英・長石(2㎜)多い	器壁が厚い、完形
27	〃	〃	12.7		4.3	たちあがり内傾、受部短小、底部ヘラ削り逆まわりで狭い	(内)灰白色、(外)灰色(半分)、オリーブ灰色(半分)	1㎜以下の砂粒(長石)少、ごくまれに2～3㎜の砂礫	焼成良好、完形、隋円
28	〃	〃	11.58	6.16	4.05	受部ごく短小、底部は平坦化、底部ヘラ削りの方向は逆まわり	内外面とも灰色	石英・長石0.3cmまで	完形
29	〃	〃	11.9		3.8	底部壁厚く、たちあがり短小、底部ヘラ削り逆まわり	内外面とも灰白色	1～2㎜の砂粒(長石)中、まれに5㎜前後の礫(長石・石英)	焼成良好、完形(接合)
30	〃	〃	12.45		4.0	受部は体部から自然に伸び、たちあがりは内傾、底部ヘラ削りは順まわり	内外面とも青灰色	1㎜以下の砂粒(長石・石英)少	
31	〃	〃	11.85		3.95	器壁薄く丁寧なつくり、底部ヘラ削りは逆まわり	内外面とも青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少、2㎜前後の砂礫(長石・石英)少	焼成良好、完形
32	〃	〃	12.6		4.3	受部外縁を丸くおさめるのが特徴、底部ヘラ削り順まわり	(内)灰白色、(外)灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少	焼成良好、完形
33	〃	〃	12.55		3.9	受部は水平に外へ短かく突出、底部ヘラ削り順まわり	内外面とも青灰色	1～1.5㎜の砂粒(長石)少	焼成良好、完形
34	〃		10.45～10.57	5.93	3.65	器体が小ぶり、受部水平、ヘラ削りの方向は逆まわり	内外面とも灰白色	石英・長石小砂粒	焼成良好
35	〃	〃	11.6		3.6	受部は水平に外方へ引き出され、短いたちあがりが付く、底部ヘラ削りは順まわり	内外面とも暗青灰色	砂粒少ない(目だたない)、まれに1～2㎜の砂礫(長石・石英)	焼成良好、完形
36	〃	〃	11.75		4.55	受部は外方へ強く引き出すため体部外面にクセが生じる、ヘラ削り逆まわり、釉あり	(内)灰色、(外)青灰色	1㎜前後の砂粒(長石)少	焼成良好、ほぼ完形

表5　平瀬2号墳出土須恵器等観察表(3)

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
37	須恵器	高杯	13.08	14.17	14.45	受部は水平に外方へ引き出され、内外ともヨコナデ、脚部は長脚二段の二方透し、内面にシボクメ、外面にカキメが顕著	(内)灰色、(外)暗青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少、まれに2㎜前後の砂礫	焼成良好、完形(接合復原)
38	〃	〃	13.8	18.35	20.25	受部は自然に上方へ向き、内傾したたちあがりをもつ、底部ヘラ削りは順まわりで広い範囲に及ぶ、脚部は長脚二段の三方透し、ヨコナデ仕上げ	(内)緑灰色、(外)暗緑灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少、杯部に2～3㎜の砂礫	焼成良好、ほぼ完形、杯部欠損
39	土師器	〃	18.07		残存6.95	口唇部は丸くおさめ外面ヨコナデ、杯部の内面はヘラミガキ、脚部の外面は一見、面取のよう	内外面とも橙色	砂粒はほとんど見えない、0.5～2㎜の赤色土粒多い	焼成良好、脚下半欠落
40	〃	〃	22.9	13.6	15.45	口縁下に一凹線、部分的にヨコナデをとどめるが、摩耗著しく調整観察不能、赤色顔料か	内外面とも橙色	1～2㎜の砂粒(長石)やや目立つ、まれに3㎜前後の砂礫	焼成良好、有黒斑、ほぼ完形
41	須恵器	〃	12.25	10.9	15.7	無蓋高杯の杯部は深く、長脚二段の二方透し、透しの位置は対称でない	内外面とも青灰色	1㎜前後の砂粒(長石)少	焼成良好、口縁・脚端欠
42	〃	〃	13.1	9.2	10.3	短脚一段透し、透し孔は二方のみ、脚端は明瞭な段をもつが突帯はない	(内)青灰色、(外)暗青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少	焼成良好、接合復原
43	〃	〃	10.8	8.15	9.15	杯部の底部に刻目を施す、脚部中央に2条の凹線を入れるが、透し孔はない、小ぶり	(内)褐灰色、(外)灰褐色	0.5㎜前後の砂粒(長石)中	焼成良、釉著しい、口縁・脚端欠損
44	〃	〃	8.6	8.03	9.2	杯底部にヘラで刻目を施文、体部に2凹線、脚部は無段・無文でヨコナデ、胡麻と釉付着	(内)緑灰色、(外)灰オリーブ色	1㎜以下の砂粒(長石)やや多め	焼成良好、歪あり、ほぼ完形
45	土師器	椀	12.62	丸底	4.5	外面調整不明、ミガキ？　内面細い暗文、幅はやや不規則	内外面とも黄橙色	0.2cm石英・長石赤色シャモット	残存率8割
46	〃	〃	14.9	丸底	5.9	底部外面に指圧痕、内面はヨコナデのち暗文、さらに口唇部のみナデ	内外面とも橙色	0.3cmまで石英・長石粒多	ほぼ完形
47	〃	〃	9.6	6.5	2.1	底部平滑で浅く、内外ともヨコナデ	内外面とも浅黄橙色	精製粘土	石室内出土、残存率5割
48	〃	提瓶	7.66	胴径15.2	18.1	円形の体部に外反する口頸をもち、退化した耳が付く、体部右側の削りは逆まわり	(内)青灰色、(外)暗青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)中、2～5㎜の砂礫(長石・石英)多	焼成良好、完形
49	〃	〃	6.65	胴径16.9	21.3	円形の体部に漏斗状の口頸部が付き、ふたつの退化した耳をもつ、体部外面は同心円状のカキメ	内外面とも灰色	1㎜前後の砂粒(長石)少、2～5㎜の砂礫(長石)少	焼成良好、ほぼ完形
50	〃	〃	5.65	胴径14.4	17.9	体部左外面はカキメ、右は逆まわりのヘラ削り、口頸部は漏斗状で耳は小さな突起状	内外面とも暗青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)中、2～3㎜の砂礫(長石)かなり目立つ	焼成良好、完形
51	〃	〃	6.08	胴径14.9	18.5	体部左外面はカキメ、右は逆まわりのヘラ削り、漏斗状の口頸部を有し、耳ふたつは極小	内外面とも青灰色	0.5～以下の砂粒、2～3㎜の砂礫(長石・石英)かなり目立つ	焼成良好、完形
52	〃	壺	6.4	胴径14.3	14.45	扁球体部に漏斗状の口頸部をもち、肩につまみ状小円盤貼付、ヘラ削り順まわり	内外面ともオリーブ灰色	1㎜前後の砂粒(長石)少	焼成良好、口縁部欠損
53	〃	直口壺	8.6	胴径14.0	16.6	扁球体部に外反する口頸がつき、頸部中央に一凹線を施す、ヘラ削り逆まわり	(内)灰色、(外)青灰色	1㎜前後の砂粒(長石・石英)中量	焼成良好、口縁部若干欠
54	〃	〃	7.0	胴径12.5	16.7	ほぼ球形の体部の胴上半に2凹線を入れ、漏斗状の口頸部にも2凹線を施す、ヘラ削り逆	(内)暗青灰色、(外)紫灰色(半分)、暗青灰色(半分)	0.5～1㎜の砂粒(長石・石英)やや多め	口縁に歪、完形

表6　平瀬2号墳出土須恵器等観察表(4)

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
55	須恵器	瓶	7.1		13.4	扁球胴部に漏斗状口頸部を有し、それぞれに一本の凹線を施す、底部ヘラ削りは逆まわり	内外面とも青灰色	1～2㎜の砂粒(長石)やや多め、底部に4～5㎜の礫(長石)3ヶ	焼成良好、胴1/2、口縁1/4残
56	〃	直口壺		胴径14.75	残存10.15	54の体部と似る、胴下半にヘラ削り顕著、削りの方向は逆時計まわり	(内)見えない、(外)青灰色	砂粒、砂礫(長石)ともやや目立つ	焼成良好、口頸部欠落
57	〃	脚付長頸瓶	4.5	胴径8.15 6.0	13.95	球形の胴部に2本の凹線を入れ、その間を垂線で加飾、短い脚部は外に張り、端を折りまげる	内外面とも灰白色	0.5㎜前後の砂粒(長石)少	焼成不良、脚部のみ3/4欠
58	〃	平瓶	4.6	胴径12.95	12.1	器体は全体として丸味をもち、漏斗状の口頸部が付く、ヘラ削りは逆まわり	(外)明青灰色	1㎜以下の砂粒(長石)多、2～3㎜の礫(長石)やや多	焼成良好、完形
59	〃	瓶	12.85		15.4	球形の体部中央に2凹線を入れ、接して一孔をうがつ、底部のヘラ削りは粗く不規則	内外面とも青灰色	砂粒少ない、2～3㎜の礫(長石)がやや目立つ(最大5㎜)	焼成良好、完形、重量552g
60	〃	〃	7.9		10.9	総じて小ぶり、球形の胴部中央やや上よりに一凹線を施し、これを切って一孔がある	(内)青灰色、(外)灰白色	1㎜前後の砂粒(長石・石英)を含む、まれに2㎜の砂礫(長石・石英)	体部下半の焼成不良、完形、重量170.4g
61	〃	盌	9.85	胴径15	12.2	体部は深いジョッキ形、著しくいびつで凹線の始点と終点が合致しない、やや高い脚部は強く外に張る	内外面ともオリーブ灰色	1㎜前後の砂粒(長石)少	焼成良好、口縁1/3欠
62	〃	甕				内面の当て道具による青海波文は大きな弧状、外面の原体は粗い櫛状	内外面とも緑灰色	1㎜以下の砂粒(長石)少、(3㎜の礫1ヶ、5㎜の礫1ヶ)長石	焼成良好、7.5×11.5cm
63	〃	〃				内面には小ぶりの重圏文と大ぶりの青海波文をとどめ、外面に櫛状文をのこす	(内)灰オリーブ色、(外)緑灰色	砂状1㎜前後(長石・石英)少、まれに2～3㎜の礫(長石・石英)	焼成良好、11×16cm
64	〃	〃	53.8		残存14.5	口頸部は短かく、外反度は大きい。口唇部の断面は方形、3段にやや粗い波状文を施す	(内)灰色、(外)オリーブ灰色	1㎜前後の砂粒(長石)中、まれに2㎜位の礫(長石)含む	焼成良好、小片複数接合

表7　平瀬2号墳出土玉類計測表(1)

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
1	0.79	0.995	1.1	紫黒
2	0.67	0.99	0.9	〃
3	0.68	0.89	0.9	〃
4	0.61	0.94	0.8	〃
5	0.61	0.91	0.7	〃
6	0.68	0.80	0.7	〃
7	0.63	0.93	0.7	〃
8	0.60	0.85	0.5	〃
9	0.51	0.84	0.5	〃
10	0.63	0.88	0.7	〃
11	0.71	0.86	0.7	〃
12	0.64	0.98	0.8	〃
13	0.57	0.90	0.7	〃
14	0.61	0.89	0.7	〃
15	0.58	0.855	0.6	〃
16	0.61	0.86	0.7	〃
17	0.49	0.905	0.6	〃
18	0.73	0.83	0.6	〃
19	0.61	0.855	0.6	〃
20	0.52	0.905	0.6	〃
21	0.61	0.84	0.5	〃
22	0.55	0.83	0.6	〃
23	0.61	0.79	0.5	〃
24	0.64	0.80	0.5	〃

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
25	0.59	0.83	0.4	紫黒
26	0.58	0.87	0.6	〃
27	0.65	0.80	0.6	〃
28	0.42	0.78	0.4	〃
29	0.60	0.82	0.5	〃
30	0.60	0.84	0.5	〃
31	0.58	0.74	0.6	〃
32	0.66	0.79	0.5	〃
33	0.63	0.69	0.4	〃
34	0.55	0.81	0.5	〃
35	0.54	0.73	0.4	〃
36	0.61	0.73	0.5	〃
37	0.53	0.77	0.5	〃
38	0.46	0.65	0.3	〃
39	0.72	0.80	0.6	〃
40	0.48	0.67	0.4	〃
41	0.66	0.96	0.6	〃
42	0.66	0.99	0.9	〃
43	0.59	0.92	0.6	〃
44	0.46	0.76	0.4	〃
45	0.73	0.95	0.6	〃
46	0.55	0.82	0.6	〃
47	0.64	0.745	0.5	〃
48	0.47	0.73	0.4	〃

表 8　平瀬 2 号墳出土玉類計測表(2)

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
49	0.53	0.815	0.5	紫黒
50	0.69	0.845	0.8	〃
51	0.465	0.81	0.4	〃
52	0.52	0.64	0.3	〃
53	0.34	0.63	0.2	〃
54	0.54	0.76	0.5	〃
55	0.55	0.75	0.5	〃
56	0.42	0.70	0.3	〃
57	0.46	0.73	0.3	〃
58	0.46	0.70	0.3	〃
59	0.58	0.88	0.7	〃
60	0.55	0.76	0.4	〃
61	0.48	0.54	0.2	〃
62	0.58	0.88	0.6	〃
63	0.36	0.58	0.2	〃
64	0.62	0.70	0.5	〃
65	0.38	0.65	0.3	〃
66	0.40	0.57	0.2	〃
67	0.33	0.57	0.1	ブルー
68	0.36	0.53	0.1	〃
69	0.24	0.54	0.2	〃
70	0.31	0.59	0.2	〃
71	0.35	0.51	0.1	〃
72	0.32	0.53	0.1	〃

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
73	0.31	0.52	0.1	ブルー
74	0.33	0.50	0.1	〃
75	0.34	0.50	0.1	〃
76	0.38	0.55	0.1	〃
77	0.26	0.50	0.1	〃
78	0.26	0.53	0.1	〃
79	0.23	0.50	0.1	〃
80	0.30	0.51	0.1	〃
81	0.33	0.46	0.1	〃
82	0.35	0.50	0.1	〃
83	0.27	0.50	0.1	〃
84	0.31	0.47	0.1	〃
85	0.30	0.50	0.1	〃
86	0.31	0.50	0.1	〃
87	0.29	0.50	0.1	〃
88	0.30	0.52	0.1	〃
89	0.33	0.46	0.1	〃
90	0.43	0.47	0.1	〃
91	0.39	0.46	0.1	〃
92	0.33	0.50	0.1	〃
93	0.41	0.38	0.1	〃
94	0.30	0.49	0.1	〃
95	0.30	0.45	0.1	〃
96	0.27	0.47	0.1	〃

表9　平瀬2号墳出土玉類計測表(3)

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
97	0.33	0.40	0.1	ブルー
98	0.46	0.58	0.2	〃
99	0.33	0.56	0.2	〃
100	0.31	0.54	0.1	〃
101	0.25	0.53	0.2	〃
102	0.30	0.53	0.1	〃
103	0.31	0.525	0.1	〃
104	0.37	0.47	0.1	〃
105	0.31	0.47	0.1	〃
106	0.22	0.47	0.1	〃
107	0.27	0.53	0.1	〃
108	0.36	0.44	0.1	〃
109	0.32	0.57	0.2	〃
110	0.52	0.59	0.2	〃
111	0.31	0.53	0.1	〃
112	0.32	0.52	0.1	〃
113	0.25	0.48	0.1	〃
114	0.37	0.47	0.1	〃
115	0.29	0.46	0.1	〃
116	0.36	0.61	0.2	紫黒
117	0.24	0.54	0.1	ブルー
118	0.43	0.67	0.3	紫黒
119	0.33	0.48	0.1	ブルー
120	0.38	0.53	0.1	〃

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
121	0.30	0.60		ブルー
122	0.29	0.48	0.1	〃
123	0.36	0.47	0.1	〃
124	0.28	0.51	0.2	〃
125	0.28	0.46	0.1	〃
126	0.37	0.49	0.2	〃
127	0.37	0.66	0.2	〃
128	0.41	0.55	0.1	〃
129	0.23	0.49	0.1	〃
130	0.29	0.51	0.1	〃
131	0.28	0.53	0.1	〃
132	0.35	0.48	0.1	〃
133	0.36	0.49	0.1	〃
134	0.32	0.50	0.1	〃
135	0.31	0.46	0.1	〃
136	0.29	0.60	0.2	〃
137	0.30	0.54	0.1	〃
138	0.27	0.48	0.1	〃
139	0.26	0.49	0.1	〃
140	0.28	0.47	0.1	〃
141	0.25	0.48	0.1	〃
142	0.28	0.48	0.1	〃
143	0.27	0.45	0.1	〃
144	0.25	0.46	0.1	〃

表10　平瀬２号墳出土玉類計測表(4)

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
145	0.30	0.43	0.1	ブルー
146	0.44	0.53	0.1	〃
147	0.32	0.50	0.1	〃
148	0.39	0.54	0.1	〃
149	0.27	0.55	0.1	〃
150	0.23	0.48	0.1	〃
151	0.27	0.47	0.1	〃
152	0.30	0.60	0.1	〃
153	0.31	0.55	0.1	〃
154	0.31	0.57	0.1	〃
155	0.23	0.46	0.1	〃
156	0.46	0.55	0.2	〃
157	0.30	0.47	0.1	〃
158	0.39	0.56	0.1	〃
159	0.30	0.51	0.1	〃
160	0.59	0.82	0.5	黒
161	0.60	0.83	0.4	〃
162	0.48	0.74	0.3	〃

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	色　調
163	0.53	0.77	0.3	黒
164	0.47	0.74	0.3	〃
165	0.54	0.72	0.4	〃
166	0.46	0.74	0.3	〃
167	0.55	0.74	0.3	〃
168	0.50	0.70	0.2	〃
169				紫黒
170				〃
171				〃
172				ブルー
173				〃
174				〃
175				〃
176				〃
177				〃
178				〃
179				土玉黒

表11　平瀬２号墳出土耳環計測表

番号	外径(cm) (上下×左右)	断面径(cm) (上下×左右)	重量(g)	備　　考
1	2.28×2.42	5.0×4.5	8.0	８つの面を持つ２と１対。ごく１部に腐食があるが保存状態は良好。かなりの光沢がある。
2	2.21×2.42	4.5×4.6	8.7	８つの面を持つ１と１対。黒ずんだ所はあるがかなり光沢があり腐食はない。
3	2.41×2.77	6.0×6.8	5.4	金箔がはがれてかなり地金が出ている。ごくわずかに光沢の残る所がある。
4	2.03×2.14	4.0×5.5	4.3	光沢の残る部分はごくわずか。６と１対か。
5	1.68×1.73	3.4×4.0	3.3	金箔の剥離50%。金箔の残る所にはかなり光沢がある。
6	1.99×2.13	4.0×5.5	4.6	上になっていた部分にはかなり光沢が残る。４と１対になるかもしれない。
7	2.67×2.98	6.0×8.0	16.5	環の内側にわずかに光沢が残る。
8	1.99×2.35	4.0×3.0	3.4	ほとんど地金だけ。光沢は全くなし。
9	2.47×2.74	5.4×6.0	10.6	光沢なし。
10	2.51×2.8	6.0×6.5	13.2	背の部分にわずかに光沢が残る。
11	2.24×2.34	2.0×2.0	2.2	さびなし。
12	2.40×2.51	5.0×6.3	8.3	ほとんど地金が出ている。光沢なし。

表12　平瀬２号墳出土鉄器計測表(1)

番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	9.81	8.67	0.80	64.8
2	97.52	4.57	2.01	1,171.6
3	3.50	3.0		
4	2.10	1.50		
5	22.85	2.30	1.0	229.8
6	22.17	0.36 ～0.9	0.3 ～0.75	16.3
7	12.75	3.17 ～1.01	0.73 ～0.56	30.5
8	9.47	2.94 ～1.33	0.80 ～0.90	3.74
9	8.38	3.23 ～0.57	0.72 ～0.5	29.2
10	2.92	1.32	0.76	4.5
11	3.48	2.32	0.47	4.7
12	4.75	1.05	0.37	4.6
13	3.90	2.97	0.80	15.2
14	5.43	2.84	0.49	10.1
15	5.46	0.79	0.76	6.1
16	12.14	1.07 ～0.40	0.37 ～0.54	9.6
17	10.55	0.66 ～0.48	0.5 ～0.46	8.5
18	8.33	0.85	0.69	7.5
19	3.65	0.52	0.46	2.1
20	4.82	0.65	0.50	3.5
21	2.86	0.83	0.82	2.8
22	4.26	0.77	0.56	4.2
23	3.65	0.69	0.57	3.3
24	3.34	0.80	0.63	2.6
25	12.78	1.48 ～1.0	0.68 ～0.71	26.6
26	8.10	1.41	0.56	16.6
27	8.32	1.61	1.33	28.5
28	2.12	0.92	0.52	1.7
29	9.08	1.55	0.73	17.5
30	7.10	1.13	0.60	11.9
31	4.38	1.10	0.41	5.4
32	2.24	1.15	0.34	1.4
33	3.08	0.76	0.47	1.7
34	2.62	0.87	0.40	2.2
35	1.83	1.03	0.81	3.2
36	2.10	0.49	0.46	1.1
37	2.84	0.59	0.53	2.3
38	2.30	0.77	0.74	1.6
39	1.65	0.48	0.34	0.5
40	1.90	0.51	0.55	0.8
41	2.06	0.66	0.48	1.6
42	4.22	0.93	0.83	7.7
43	5.16	1.0	0.58	7.4
44	5.50	1.74	1.08	35.3
45	1.59 ～3.65	1.62 ～0.8	1.05 ～0.72	8.7
46	9.32	0.90	0.76	16.5
47	16.2	1.57	0.96	44.3
48	13.7	1.10	1.07	30.1

表13　平瀬２号墳出土鉄器計測表(2)

番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
49	11.95	1.48	1.24	56.7
50	12.23	0.71	0.72	19.2
51	11.93	0.83	0.84	15.7
52	11.40	1.46	1.15	27.2
53	11.27	0.80	0.82	16.5
54	10.07	1.04	1.05	26.7
55	10.41	0.91	0.77	14.5
56	11.31	0.72	0.62	15.0
57	10.62	0.87	0.74	22.3
58	11.60	0.90	0.76	21.1
59	10.73	1.10	1.01	20.0
60	9.88	1.07	0.87	17.9
61	10.24	0.82	0.77	16.3
62	10.03	0.79	0.77	10.4
63	8.52	0.81	0.70	13.9
64	8.25	0.83	0.71	11.0
65	9.21	1.02	1.07	24.9
66	8.76	0.82	0.66	14.1
67	9.91	1.0	0.98	15.7
68	8.86	1.22	0.99	18.0
69	8.65	0.93	0.80	17.3
70	7.94	1.0	0.72	13.0
71	8.25	0.88	0.70	11.4
72	7.18	1.24	0.96	16.1

番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
73	8.19	0.85	0.70	13.2
74	6.64	1.31	1.03	20.6
75	6.56	0.85	0.65	11.9
76	7.30	0.82	0.77	11.1
77	6.50	0.96	0.77	10.6
78	6.37	0.55	0.73	8.7
79	6.55	1.08	0.96	10.5
80	5.0	0.90	0.95	6.4
81	5.68	0.90	0.83	9.7
82	6.14	0.525	0.52	4.9
83	4.85	0.59	0.45	4.0
84	4.15	0.64	0.65	4.0
85	6.24	2.32	1.50	27.5
86	5.75	1.65	0.95	23.6
87	6.06	1.40	1.10	22.0
88	5.92	1.34	1.02	24.2
89	3.76	1.53	1.05	10.0
90	5.27	1.16	1.01	20.8
91	5.64	1.08	0.68	10.0
92	5.24	1.29	0.96	16.2
93	4.80	1.08	0.59	8.8
94	4.45	1.19	0.76	7.1
95	5.87	1.22	0.69	10.4
96	3.52	0.88	0.85	5.3

表14　平瀬２号墳出土鉄器計測表(3)

番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
97	2.90	1.39	0.78	5.5
98	5.30	1.09	0.78	8.4
99	3.73	1.06	0.86	8.4
100	4.78	0.79	0.95	8.7
101	4.96	1.15	0.80	8.2
102	4.44	0.95	0.60	5.9
103	5.48	1.13	0.86	7.2
104	4.10	0.48	0.68	1.7
105	3.75	0.61	0.51	3.0
106	4.12	0.83	0.72	3.4
107	2.90	0.50	0.44	0.9
108	2.27	0.50	0.47	1.2
109	3.65	0.54	0.40	2.0
110	3.22	0.49	0.38	1.0
111	3.49	0.70	0.65	3.1
112	4.66	0.85	0.75	5.4
113	5.35	0.745	0.86	9.0
114	5.09	0.94	0.97	5.8
115	4.30	0.45	0.47	1.6
116	5.15	0.85	0.41	4.6
117	4.41	0.98	0.85	4.7
118	4.52	0.89	0.77	6.2
119	5.0	0.60	0.56	3.6
120	4.08	0.74	0.64	4.1

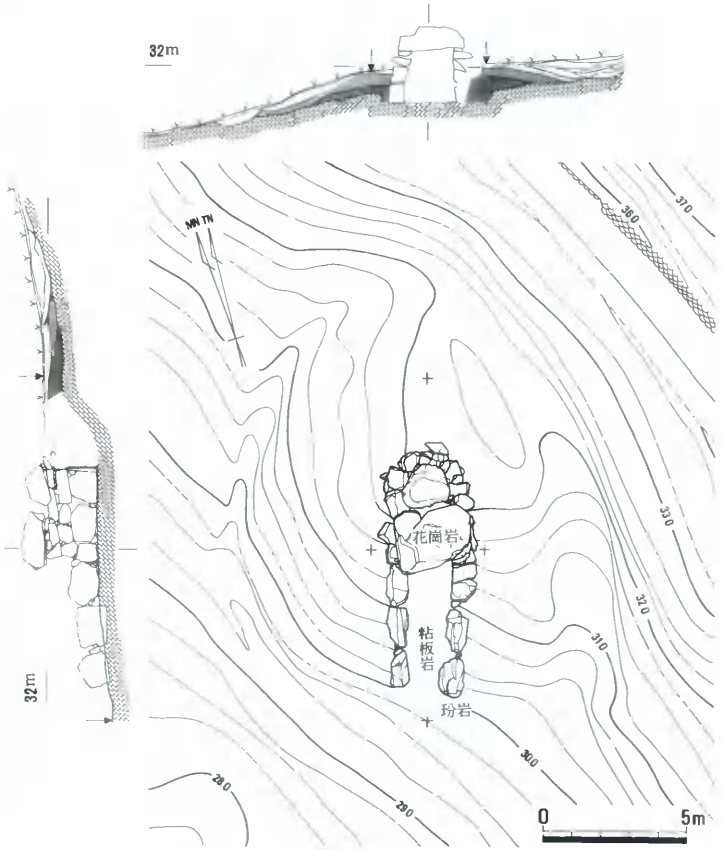
番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
121	3.45	0.82	0.46	4.4
122	3.70	0.73	0.69	2.8
123	3.25	0.71	0.68	2.6
124	4.45	0.64	0.67	4.6
125	3.92	0.72	0.58	5.2
126	3.34	0.83	0.74	4.2
127	3.24	0.87	0.66	5.9
128	2.96	0.57	0.60	2.3
129	3.16	0.54	0.45	1.6
130	3.0	0.63	0.63	4.0
131	3.17	0.62	0.56	2.9
132	3.0	0.61	0.81	3.1
133	2.92	1.05	0.56	2.8
134	3.04	0.77	0.75	2.7
135	1.72	0.82	0.64	1.8
136	3.04	0.77	0.56	2.1
137	2.21	0.53	0.57	1.3
138	2.97	0.48	0.51	2.0
139	2.40	0.77	0.62	2.6
140	2.10	0.53	0.52	1.5
141	3.36	0.63	0.56	2.9
142	3.47	0.78	0.44	4.0
143	2.27	0.60	0.52	1.9
144	2.44	0.75	0.46	1.7

Ⅲ　平瀬３号墳

(1)　墳丘と周堀

３号墳は、２号墳の北方およそ30mに位置し、ほぼ南に開口する横穴式石室を築いたもので奥の天井石２枚が残されていて、本古墳群の発見の契機となった古墳である。

地山面を切り込んだ堀方がまずもって略方形に穿たれ、石室石材を据え立て、のち墳丘盛土がおこなわれたようである。本墳では石室に直交して入れた試掘溝において３層程度の層序が



第28図　平瀬３号墳墳丘図（Ｓ＝１：200）

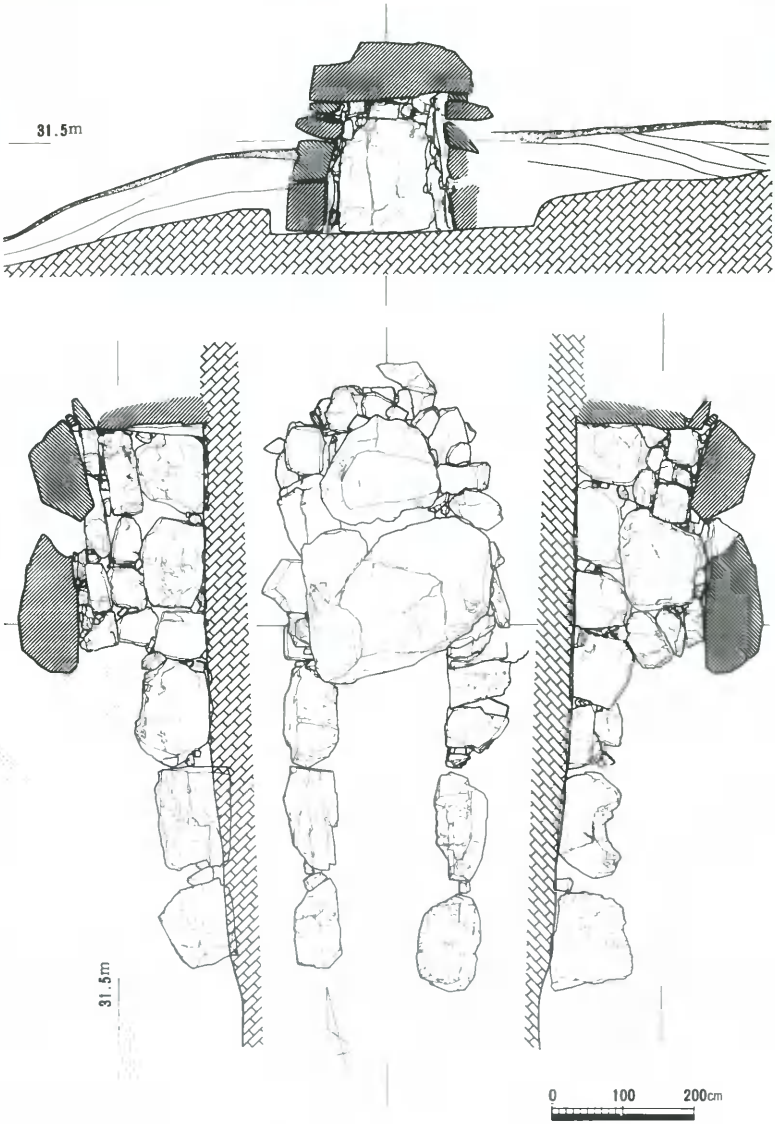
認められた。東側のトレンチでは、地山の直上に黄褐色粘質土を盛りつけ、その上にやや暗い黄灰色粘質土をのせ、ふたたび黄灰色粘質土を重ねおく。地山からの高さは現状で80cm強、石室高の約半分ていど残存する。

外の周堀には暗褐色礫混入土が堆積し、順次うまっていった流土層が3層ほどみとめられる。西側トレンチにおいては、地山の上に多量の礫を含む淡黄褐色粘質土を積み、さらにその上にこれまた多量に礫を包含した黄灰色褐色粘質土を盛る。この層は明度の点で分層でき、墳端部において下層がやや暗いものの石室に近づくにつれ不鮮明になる。西側の周堀の肩幅は1.8m、深さ30cmで暗茶褐色粘質土によって充塡されている。北トレンチにおける墳丘の土壌構造および周堀の観察結果も、大きく異なることはないが、背面の周堀底は、石室奥壁の上端とほぼ等しい高さにあり、山寄りの東背面にまで伸び連なっていたかどうかは、はなはだ疑わしく本来完周してなかったように看取できる。したがって、墳丘の平面形状は西角の取れた方墳とも、東隅の張り出した円墳とも形容しがたい形をとる。強いていえば正面が広く背面の狭い楕円形と表現するほかない、いびつな墳形で、東西長11.5m、南北長12m強をはかる規模である。

(2) 横穴式石室

内部の構造は1号墳・2号墳と同様、無袖の横穴式石室。奥壁として、幅1.3m、高さ1.6mの巨石を据え立て、その上に長さ40cm、高さ25cmほどの石材数個を、横一列に積んで上端をそろえる。側壁のうち西側は基本的には三段積みで最下に大きめの石をもちい上にいくほど小ぶりの長石を使い、石材間を拳大の礫で充塡しかつ粘土で目張りした様子が所々に残されている。一方の東側壁は巨石2個で、あるいは4個で天井石を支える部位もあるが、主たる石材の隙間には人頭大または拳大の礫をかみあわせつつ粘土を詰めて補強している。

天井石は2枚現存するが、奥壁の上に載るものは若干ずれ動いている。横幅1.7m、奥行1.5m、厚さ0.7mの暗緑色硬質粘板岩で、3号墳のみならずこの古墳群中もっとも多用された石材と同一である。これに対し、奥に接してその手前に残るもう一枚の天井石は、巨岩であるうえここでは珍しい花崗岩で、その幅2.6m、奥行2.1m、厚さ0.85mをはかり、この石材先端の位置は奥壁から3.45m。これから先は側壁の大部分を失い最下一段のみが遺存する。床面から天井石下面までの計測値すなわち石室の高さは1.8mである。やや胴ぶくれした石室平面のもっとも幅広い部位も手前の奥壁直下にあり、石室幅1.6mを計測できる。石材についていえば、東側壁のもっとも手前のもの一石だけが、堆積層によってできる特有の節理顕著な、黒色の玢岩である。床面は、1号墳や2号墳で見られた礫床ではなく、単なる土床である。奥壁から残存する両側壁の前端までの総長は7.6～7.7mである。しかし入口から1.5m奥の床面に55cm×20cmの石が軸線に直交して据え置かれているのが注目される。これが入口と内部を分ける仕切石または閉塞施設の一部とすれば石室内部の埋葬できる空間は長さ6mばかりであったと思われる。



第29図　平瀬３号墳石室平・断面図（S＝1：80）

仕切石より手前の入口付近の床には棺釘１本認められなかったことと合わせ、手前２枚の側壁が極端に低く据えられていることもこのことと無関係ではなさそうである。

天井石をとどめるほど比較的残りがよい石室の状態から推して、床面の保存も良好であろうとの当初の予想に反し、遺物の出土状態は劣悪であった。乱掘によって副葬品の大半は持ち去られ、40本ちかい棺釘のほかはおそらく副次的埋葬のさい奥壁付近にかたよせたと思われる須恵器数点と、盗難をまぬかれた耳環２個および２、３の須恵器・土師器にとどまった。

のち、近世期に乱掘の手が入ったものか、そのころの土製羽釜や陶磁器類が数点残されていたにすぎない。

(3) 副　葬　品

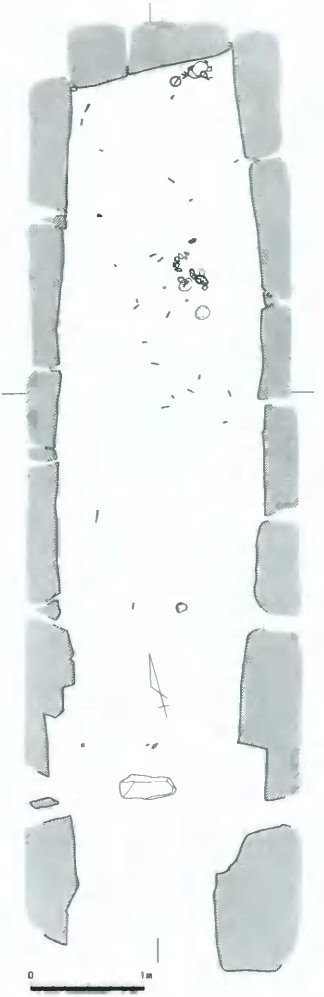
須恵器・土師器

蓋杯（第31図、表15、図版27）

口径9.4cm、器高3.18cmをはかる完形品で、奥壁ちかくにかた寄せられた状態で出土したものの一つである。ヘラ削りの方向は時計の針とは逆まわり。器形は全体としてやや小ぶりでT・K209型式に入ると思われる。あるいは壺の蓋の可能性もある。

瓶（第31図、表15、図版27）

石室中央のわずか手前から一点だけ検出された、すでに胴部上半から頸部を欠損した品である。胴部はほぼ球形で底部器壁はきわめて厚く、胴部径8.9cmをはかり、通常そこに、横位に刻まれる凹線一本の下端部が辛うじて看取できるが円孔をみとめることはできない。頸部の太さや長さが不明であるため確かな編年的位置を求めることはむずかしいが、おそらくT・K43型式の範囲で捉えてよいであろう。



第30図　平瀬３号墳副葬品出土状態（S＝1：50）

平瓶（第31図、表15、図版27）

3、**4**、**6**の3点がある。**3**と**6**は奥壁から手前へ2mほどの両者ちかい所で出土したが、**3**はすでに土圧によってくだけ10数点の破片となっていたのに対し、**6**は口縁部をわずかに欠くていどのほぼ完形のままで検出された。**4**は奥壁付近にかたずけられた一括品のうちの一点である。**3**は胴部径が3点のうちでもっとも大きく16.6cmをはかり、肩部に一本の凹線を入れるなどこの中では古く、T・K43型式に属すると見られる。**4**は焼成やや不良で軟質、外面は青灰色でいっぽう内面は灰白色を呈する。保存は良く口縁部から頸部にかけてわずかに欠落しているていどである。器高14.9cm、胴部最大径15.0cm、頸部高4.5cm、口径4.6cmで口唇部を丸くおさめる。全体としてやや小型化しておりどちらかといえばT・K209型式に属するのではあるまいか。**6**はさらに小ぶりになった平瓶で頸部のつくりに特徴がある。その形状はT・K217型式など新しい型式にみられる漏斗状、体部上面はやや扁平である。しかし底部はまだ尖り気味でなく、T・K217型式にちかいT・K209型式におさめてよいものである。

甕（第31図、表15、図版27）

7は浮遊層出土の甕腹部片。外面は平行叩きののちカキ目状工具で横位にナデて調整。内面の同心円文はあらくいわゆる青海波文をよぎる条線が目立ちT・K217型式の特徴をもつ。

土師器皿（第31図、表15、図版27）

平瓶**6**の手前から出土した完形品である。胎土は精良でほぼ正円にちかい丁寧なつくりであるが、表面が剝脱しておりヘラミガキを観察することはできない。口径12cm、器高3.6cmと浅く、口唇部は段をなさず丸い仕上げで、飛鳥Ⅳ期およそ7世紀第4四半期ごろのものである。

耳環（第31図、表16、図版27）

耳環は**14**、**15**の2点。**14**は石室入口付近、**15**は石室中央奥寄りの平瓶**6**の近辺から出土した。ともに銅環を金薄板でつつんだもので、金薄板の残存率は**14**が約20％、**15**は約80％である。環の断面は**14**が円形で**15**は楕円形であり、耳朶を前後からはさむ環の切れ目は**14**が広く**15**が狭い。両者は径3cm弱とほぼ等しいが、上記のような差異があるので同巧同大とはいえず、とても対をなすものとは考えられない。

棺釘（第31図、表17、図版28上段）

総数39点を数えるが、うち**8**は他と異なり頭部が耳掻き状を呈し断面が0.37cm×0.38cmと細く、同じく細い断面をもつ**37**と接合できそうである。すると、総長は11cmをこえるので、編物用の鉄針の可能性が生まれる。また断面扁平で比較的大きい、頭部と先端部を欠く**11**、**17**、**28**、**32**、**35**などはあるいは鎹とみなした方がよいかもしれない。また**18**は鉄鏃の茎の形状に似る。折れを持つあきらかな頭部を有し、先端まで完存するもの、またはわずかに先端を欠損しながらもほぼ誤りなく長さの復原可能なものを選びだして、大小に分類すると次のようになろう。

最大の釘は**1**に代表されるように長さ10cmをこえ11cmにちかい。**3**もその断面の大きさからすればこの部類に入るであろう。ついで長さ約8cmに復原できるのが**6**、**7**、**9**などである。これよりやや短いのは**10**、**15**で長さ6.5～7.5cmをはかり、稀に**26**のような長さ4.5cmの準完形品を混じえる。

砥石（第31図、表15、図版27）

8はすべての面に研ぎ跡をとどめる砥石である。床面に密着せず、床面にちかい浮遊層から出土したので、本来の副葬品に加えるべきか、後世の混入品か断定しがたい。

近世陶磁器類

磁器椀（第31図、表15、図版28下段）

肥前系の特徴である白地に、少し黒みがかった青色で松を描いた、細高台付きの椀。俗にいう青伊万里手の典型。

京焼椀（第31図、表15、図版28下段）

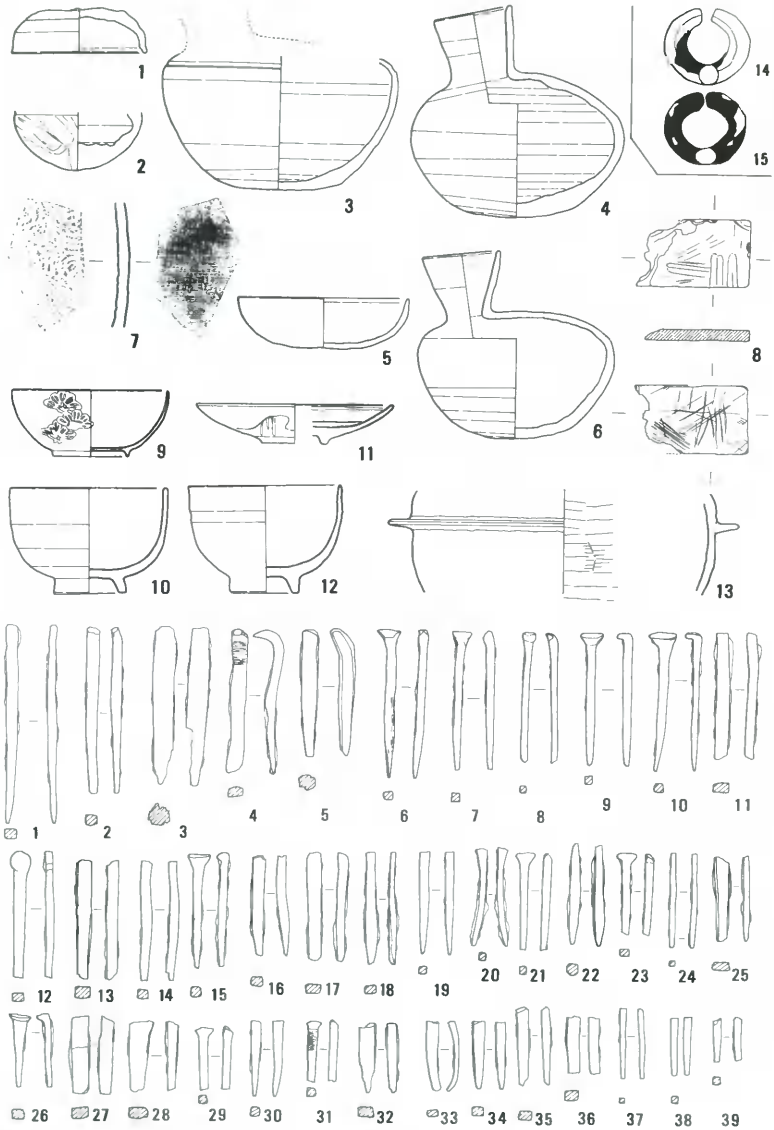
10と**12**は、口唇部や高台のつくり、釉薬の艶などに若干の違いがあるものの、大きく捉えれば良く似た作品といってよい。**10**の高台の底には砂目積みの痕跡が見られる。

唐津皿（第31図、表15、図版28下段）

ほとんど砂粒を含まない焼成良好な唐津皿で外面上半から内面にかけて釉薬をほどこし、内面の底に砂目の痕跡がある。重ね焼きの方法が砂目積みによったことを示しており、製作年代が16世紀後半の慶長年間から17世紀前半の寛永年間のころであったことが判る。

土製羽釜（第31図、表15、図版28下段）

13は鍔付きの土製羽釜で、口径、胴部径とも20cmていどの大きさに復元できる。内面はハケ状のナデ仕上げ、外面には全面に煤が付着している。



第31図　平瀬３号墳出土遺物（土器等Ｓ＝１：４・耳環１：２・棺釘１：３）

表15　平瀬3号墳出土須恵器等観察表

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1	須恵器	蓋	9.4		3.18	天井部ヘラオコシのちナデ、ヘラ削りの方向逆まわり		0.5～1㎜の砂粒(長石)少ない、5㎜の礫1ヶ、3㎜の礫2ヶ	奥壁付近出土、完形
2	〃	蓋		胴径8.9	残存4.2	外面ヘラ削り、胴中央に横位凹線一本、ヘラ削りの方向逆まわり	(内)青灰色、(外)オリーブ灰色	0.5㎜位の砂粒(長石)少量	石室中央の手前付近、胴下半残存
3	〃	平瓶		胴径16.6	9.5	胴部外面ヨコナデ、底部ヘラ削り、ヘラ削りの方向逆まわり	(内)灰色、(外)灰色	1.5～2㎜の砂粒(長石・石英)かやや多い、1.5㎜以下の砂粒も含む	奥壁から前1.7m、破片15点を接合、胴部2分1残
4	〃	〃	4.6	胴径15.0	14.9	胴部内外ともヨコナデ、底部ヘラ削り、ヘラ削りの方向逆まわり	(内)灰白色、(外)明青灰色	1～2㎜の砂粒(長石・石英)やや多い	奥壁付近の一括品、焼成やや軟質
5	土師器	杯身	12.0		3.6	ヘラミガキがあったと思われるが表面剝離、正円にちかい丁寧なつくり	(内)にぶい橙色、(外)淡橙色	微粒子の砂粒(長石)極少量	奥壁から2.2m手前、焼成良好、ほぼ完形
6	須恵器	平瓶	5.6	胴径13.8	12.2	胴部ヨコナデ、底部ヘラ削り逆まわり、胴上部円板充塡、頸から肩に自然釉あり	(内)灰色、(外)灰色	2㎜以下の砂粒(長石)めだつ、2㎜以上の礫(長石・石英)も多い	奥壁から1.9m手前、口縁部若干欠
7	〃	甕片				当て道具原体はやや粗、同心円叩き文の刻み幅太い	(内)灰白色、(外)明青灰色	ほとんど砂粒なし	浮遊層出土、9×6cm大、厚さ8㎜
8	石	砥石	残存長7.9	幅4.8	厚さ0.8	表裏とも刀先を研いだような条痕あり、5面とも使用	灰白色		床面ちかくの浮遊層、重量53.39g
9	磁器	椀	10.8	5.2	4.7	肥前系陶磁器の特徴を有す、伊万里手の松文様を入れる	白地、松は青色	精良	浮遊層出土、部分欠損
10	京焼	椀	10.8	5.0	7.5	釉薬の下に細い貫入あり、高台に砂目積み痕跡	淡黄色	半磁器	浮遊層出土、体部2分の1残
11	唐津	皿	13.9	4.6	2.75	口縁部から体部にかけ釉薬、内面下方に砂目を残す		ほとんど砂粒なし	浮遊層出土、口縁幅3cmほど残
12	京焼	椀	10.7	内4.21 外4.72	7.6	ケズリ出し高台、釉薬の艶あり	淡黄色	半磁器	浮遊層出土
13	土鍋	羽釜	約20	胴径21.2	残存7.1	つば付(1.6cm)、外面にすす付着、内面ハケ状のなで	内・外ともにぶい黄橙色	砂粒はほとんど見えない	浮遊層出土、ほかにも破片若干

表16　平瀬3号墳出土耳環計測表

番号	外径(cm) (上下×左右)	断面径(cm) (上下×左右)	重量(g)	備　　考
14	2.67×3.06	0.68×0.72	18.0	銅地金薄板張り、地金断面円形、切れ目幅3～5㎜、金残存率約20%
15	2.62×2.99	0.64×0.77	15.1	銅地金薄板張り、地金断面隋円形、切れ目幅1～1.5㎜、金残存率約80%

表17　平瀬3号墳出土棺釘等計測表

番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	番号	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	10.51	0.68	0.51	6.6	21	5.16	0.36	0.42	2.4
2	8.82	0.60	0.59	6.2	22	5.35	0.60	0.63	4.2
3	8.38	1.13	1.11	19.1	23	4.27	0.48	0.38	2.4
4	7.59	0.80	0.59	8.4	24	5.02	0.35	0.28	1.0
5	6.72	0.92	0.83	10.6	25	4.48	0.94	0.41	3.4
6	7.82	0.49	0.44	4.9	26	3.82	0.70	0.58	2.9
7	7.32	0.47	0.45	4.7	27	4.11	0.85	0.60	6.4
8	6.90	0.37	0.38	2.3	28	3.76	1.31	0.61	4.6
9	6.99	0.41	0.43	4.3	29	3.30	0.46	0.43	1.8
10	7.31	0.49	0.47	5.4	30	3.95	0.50	0.47	2.2
11	6.68	0.79	0.51	6.7	31	3.23	0.48	0.49	1.8
12	6.69	0.64	0.50	6.0	32	3.68	0.88	0.53	5.2
13	6.35	0.95	0.62	9.4	33	3.70	0.58	0.30	1.7
14	6.30	0.57	0.49	4.1	34	3.56	0.60	0.48	2.4
15	6.05	0.57	0.53	4.4	35	4.10	0.70	0.52	3.6
16	5.30	0.63	0.47	3.8	36	3.03	0.71	0.51	2.7
17	5.72	0.78	0.49	5.2	37	3.67	0.27	0.31	0.7
18	5.93	0.60	0.43	3.8	38	3.06	0.37	0.38	1.2
19	5.40	0.42	0.42	2.4	39	2.32	0.45	0.38	0.9
20	5.05	0.49	0.46	2.2					

4．まとめにかえて

以上の報告を簡約にまとめて結びにかえようと思う。岡山市平瀬に所在する平瀬古墳群は、このたび山陽自動車道の建設に伴い新たに発見され、発掘調査の対象となった3基の円墳のほか周辺の2～3基の同程度の小墳とともに一支群を形成するいわゆる後期古墳である[1]。

この地は第3図に示したとおり律令制下においては、旭川の西岸にあって、6郷から成る御野郡のうちの牧石（比良之＝ヒラシ）郷に属していたこととなる[2]。いま平瀬の字を当てるのは実は古代の郷名の呼称に由来するわけである。平瀬は御野郡内の北東端にあたり他の諸郷にくらべ恵まれた耕地はそれほど広くなくむしろ山深い。したがって農業生産の飛躍的な増産を背景として、古墳づくりが容認されたとはとうてい考えられないのである。旭川をへだて東に築かれた林原古墳群もまた、耕地の広狭を問題としたばあい平瀬とよく似た環境にあり、あちらはさらに耕地皆無といってもよい。どうして、こうした条件のもとに古墳の築成が可能になったのか。岡山県下の後期古墳の分布構成について、自然地理的条件によって、中国山地からはじめて瀬戸内沿岸の山地と島までを5大別して、各地の分布密度を統計処理した西川宏の所見によると「後期古墳の圧倒的多数は農業集団の所産である。」[3]という結論に達するのであって耕地の狭小な、あるいは皆無に等しい地での古墳の存在に関しては、その築成を可能にした特殊具体的な要因が求められなければならない。後期古墳時代といえども、やはり古墳秩序の社会の枠組のなかにおいて、大和政権から古墳づくりを許容されたのであるから、そこにはそれ相応の背景があるはずである。林原古墳群の築成については、一説によれば、瀬戸内海から引き続いて旭川をゆきかう船舶に対して強い渡航権を掌握し、これを契機としてその「古代家族」[4]に、古墳づくりが認められたのではないか、との考えが示されている。「その特殊で孤立的な、しかも旭川との関係以外には考えられない立地は、舟運に従事した世帯共同体規模の集団の墓地であろう。」[5]と。傾聴に値する意見である。そのような想定が当をえたものであれば、平瀬古墳群の築成も同じく旭川の渡航権を制した台頭いちじるしい「古代家族」によってなされたものであるかもしれない。平瀬古墳群の築成を可能とした要件の一つにこうした考えを挙げることができるであろう。ついで平瀬2号墳から出土した県内初の小鉄塊に注目する必要がある。早くから横穴式石室を内部にもつ後期古墳とくに美作地方のそれらのいくつかには、副葬品中に鉄滓または炉壁を含む事例のあることが知られていたが、ここ数年来、南部においても同様の風習例がおびただしく増加し、総社市備中こうもり塚古墳[6]や緑山17号墳[7]や千引古墳群[8]その他でも検出されて、注目を集めるようになった。光永真一は「この新技術が伝わり、広まっていく6世紀後半から7世紀にかけては、古墳から出土する鉄滓に製錬滓が多く見られ、また精錬炉の炉壁片を石室内に副葬する例も見られるようになる。これらにより、この時期に

製鉄専業集団の自立がなったものともいえよう。」[9] と指摘している。確かに県内各地において今日まで検出された方形の製鉄炉および製炭炉の所属時期は、一様に横穴式石室の築かれた6世紀後半頃とりわけ末葉の時期と相前後するものばかりであり、総社市西工業団地遺跡で見られたように後期古墳の築成が製鉄集団そのものによった、と考えるほかない事例もある[10]。平瀬古墳群の造墓主体もまた製鉄集団と無縁ではなく、深いかかわりを示していると見なければならない。おそらく、製鉄にとってかけがえのない道具類はすでに共同体的所有から私的所有へと移り変わり、生産手段の所有形態の変化をきっかけとして、製鉄の過程で生じた小鉄塊などを象徴的に埋納する慣習が定着していったのであろう。

それでは次に、平瀬古墳の被葬者たちがどのような階層に属していたかを、墳丘と石室との形状および規模その他の特徴から推し量ってみよう。表18を参照されたい。まず墳丘から概括していえることは、いずれも正円形をなさないで正面観の広いわりに奥行のつまった楕円ないし隅丸方形であって、すでに埴輪も葺石も伴うことなく墳丘の盛り方についても版築状の丁寧な手法を欠き、築造年代が全体として群集墳の盛行期から遅れる衰退期に近づいていることを思わせる。墳丘規模には大小の格差があるにしろ、長径をとっても10mを切るものと、10mを若干うわまわる程度のものである。これらを、『佐良山古墳群の研究』に依拠して直径を指標に、①25m以上、②16～20m、③11～15m、④6～10m、⑤5m以下と5段階に分別した西川宏[11]による墳丘規模比較表に照らせば、平瀬2号墳と3号墳とがともに第3ランクに、1号墳が第4ランクに位することとなる。ちなみに佐良山古墳群では、第3ランクの規模のものが総数101基のうち41%を、第4ランクのものが42%を占めているので、平瀬古墳群の規模は極めて普遍的なものといえる。

つぎに内部の石室についていえば、いずれも無袖の横穴式で、最大幅が奥壁付近になくほぼ中央にある、いわゆる胴張の形状を呈する。用いられた石材も粘板岩、玢岩、花崗岩とさまざまであり奥壁として巨岩を用いる手法はとどめているが、比較的に良く残された3号墳の側壁

表18　平瀬古墳比較表

特徴／古墳名	墳形（径）m	埴輪・葺石	横穴式石室(長×幅) m	須恵器型式
平瀬1号墳	楕円（8～9）	無	無袖（5×1.25）	T·K43、T·K209
平瀬2号墳	楕円（11～14）	無	無袖（9×1.9）	T·K43(古)、T·K209
平瀬3号墳	楕円（11.5～12）	無	無袖（7.7×1.6）	T·K43、T·K209(新)、T·K217

の積み方からすればやや粗雑感をぬぐいきれない。ここでも奥壁幅によって①2.6～3m、②2.1～2.5m、③1.6～2.0m、④1.1～1.5m、⑤0.5～1.0mと石室の大小を5段階に分けた西川宏[12]のランク表に対応させるならば平瀬2号墳と3号墳が第3ランクに、一号墳が第4ランクに属することとなり、墳丘規模での比較とまったく同一であって、造墓主体の占める社会的位置がほぼ中等位にあったことを指し示している。

ところで石室幅が2mを超える横穴式石室については、現地で目のあたりにすると優れて大きく実感するものである。一例を岡山市操山古墳群[13]にとって点検すると、総数94基のうちで幅2mをふくめそれ以上のものは9基を数えるにすぎず全体のわずかに9.5%、1割にも満たないのである。やはり統計的にも幅2m以上の石室は巨大な部類に入る、といってよい。幅1.9mをはかる平瀬2号墳の石室はこれに迫る規模である点、じゅうぶん注意を要するであろう。

では、この2号墳に葬られた員数はどの程度であったのか。この石室からは幸にも12個の耳環が検出されている。耳環は同巧同大のもの2個が一対となって、各個人の耳朶に取り付いていたと考えられるから、被葬者数を割り出す最適の資料といえる。したがって、まず出土の位置関係を重視するとともに、材質および微細な形状の差異を見極めることによって、セットになるかどうかを検討しなければならない。すると、断面八角形のもの2個、外径および断面形のほぼ等しい2個、外径と太い地金の形がよく似た2個、これらが対をなすほか残る6個は、純銀製であったり、地金が異常に太かったり各々個性的で、組み合う相手を見つけることができない。このように、耳環から得られる被葬者数の推定は9名ということとなる。いうまでもなく、被葬者のすべてが耳環を有していたわけではなく、この9名という数字は最低の埋葬数をあらわしているのである。他の一般的な横穴式石室からの耳環の出土例が2～6個である事実を念頭におき、仮に耳環をもつ者が被葬者総数の半分程度とすると、この2号墳には20名ちかい被葬者があったとみなければならず、のちの郷戸にちかい内容を示すものと想定されよう。

しかし、金色や銀色に輝く耳環を身につけることができた人物にしても、他の副葬品をみな同じように、伴うわけではない。全長97.52cmで刃区の長さ78.5cmの刀身に、銀象嵌をほどこした倒卵形八窓の鍔つき大刀は、出土位置がやや高く後次的な埋葬に伴うと考えられるので、鉄鏃・刀子などを伴っていた可能性はあるにしても、他に装身具をまとっていたかどうかは判らない。耳環**8**がもっとも近い位置にある。これに対して最下層の同一平面で検出された耳環**1**と**2**は25cmしか離れておらず、ともに断面八角形で遺体の耳朶の左右に付いていたものと見るほかはなく、そこには玉A類とした紫黒色で大ぶりのガラス小玉が多数見つかり、同一人物が60余個からなる首飾りをも付けていたと思われる。全長32.45cmの短刀もまたこの被葬者に伴う可能性が強い。また中央の奥寄りで検出された耳環**3**は組み合うもう片方のものを特定できないのが惜しまれるものの、そこにはB類として捉えることのできるブルーのガラス小玉がおび

ただしく群在しており、青く発色する別の首飾り一連を付けた被葬者が埋置されていたと考えられる。しかしこの被葬者は武器類をたずさえることがなかったようである。残りの耳環については組み合いの関係が不明であるほか、原位置をとどめているか否かも判断しにくい。したがって各種須恵器など他の副葬品とのセット関係をにわかに把握できないとはいえ、多種多様の棺釘および棺台と思われる角礫の並び方から推して、少なくとも5～6棺以上の木棺が納められていたと推察される。このように被葬者間にあっても副葬品の多寡優劣など少なからず格差が認められるのであるが、挂甲の小札一片さえ見あたらず、また鞍金具の残片すら未検出であるところからすれば、甲冑も馬具類もいっさい保持できなかった階層であった[14]、という点も見逃すことができないであろう。

さて、発掘した3基の築造時代について触れて終わりたい。各墳から出土した須恵器は、いずれも乱掘によって残念ながら本来の姿をとどめていないという条件下にあるものの、前章において紹介したとおり、およその傾向をつかむことは可能である。墳径10m未満の1号墳も、径12mの3号墳も、あるいは最大で径14mをはかる2号墳も、副葬されたそれぞれの最古の須恵器は田辺編年[15]のT・K43型式のなかにあってこれを遡るものはなく、いずれもT・K209型式をふくみ、3号墳のみT・K217型式までみとめられる。少なくともこの3基はおよそ6世紀末葉の頃ほとんど同時につくられ、その後7世紀初頭にかけての約6～70年間にわたり、次つぎと追葬がおこなわれたものと考えられ、前半期古墳のように、一世代一墳ずつ系譜的に順次つくられたのではけっしてない。

その間、山陰地方または美作地方でつくられたに違いない二方透し短脚高杯が入手できるほど交易をひろげ、武威の象徴である飾大刀を下賜されるなど、権勢を高揚させた一時が介在したのであろう。

註

1）近藤義郎『佐良山古墳群の研究』津山市　1952年　戦後いち早く後期群集墳の歴史的評価を下し、造墓主体に言及。
2）池邊　彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館　1981年
3）西川　宏「小形古墳と横穴式石室の普及」『岡山県史』原始・古代Ⅰ　岡山県　1991年
4）近藤義郎『蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）』岡山県八束村　1992年
5）西川　宏『吉備の国』学生社　1975年　165頁
6）葛原克人『備中こうもり塚古墳』岡山県教育委員会　1979年
7）村上幸雄「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1　総社市教育委員会　1984年
8）総社市教育委員会により調査　近刊予定
9）光永真一「製鉄と鉄鍛冶」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社　1992年11月発刊予定
10）村上幸雄ほか『西団地内遺跡群』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9　総社市教育委員会　1991年

11) 注５）に同じ　133頁
12) 注５）に同じ　134頁
13) 岡山操山高等学校歴史研究部「概略操山古墳群横穴式石室実測図」『操山史学』14　1965年
14) 楢崎彰一「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』1959年
15) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園　1966年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

図版 1

1．平瀬1号墳全景（北から）

2．平瀬1号墳北トレンチ（南東から）

3．平瀬1号墳東トレンチ（南から）

図版 2

1．平瀬 1 号墳石室（奥から）

2．平瀬 1 号墳石室（前面から）

3．平瀬 1 号墳石室（側面から）

1．平瀬1号墳最終床面遺物（西から）

2．平瀬1号墳第1次埋葬床面遺物（北西から）

3．平瀬1号墳第1次埋葬床面遺物（北西から）

4．平瀬1号墳第1次埋葬床面遺物（北西から）

図版 4

1．平瀬２号墳調査前状況（北西から）

2．平瀬２号墳全景（北西から）

1．平瀬２号墳全景（北東から）

2．平瀬２号墳南トレンチ（南から）

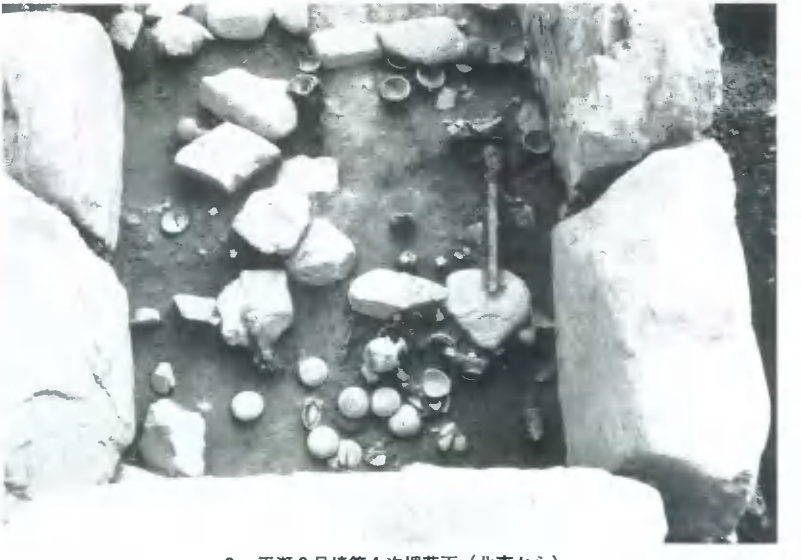
図版 6

1．平瀬２号墳石室最終床面（南西から）

2．平瀬２号墳石室最終床面（北東から）

3．平瀬２号墳前庭部断面（南から）

1．平瀬２号墳第１次埋葬面（南東から）

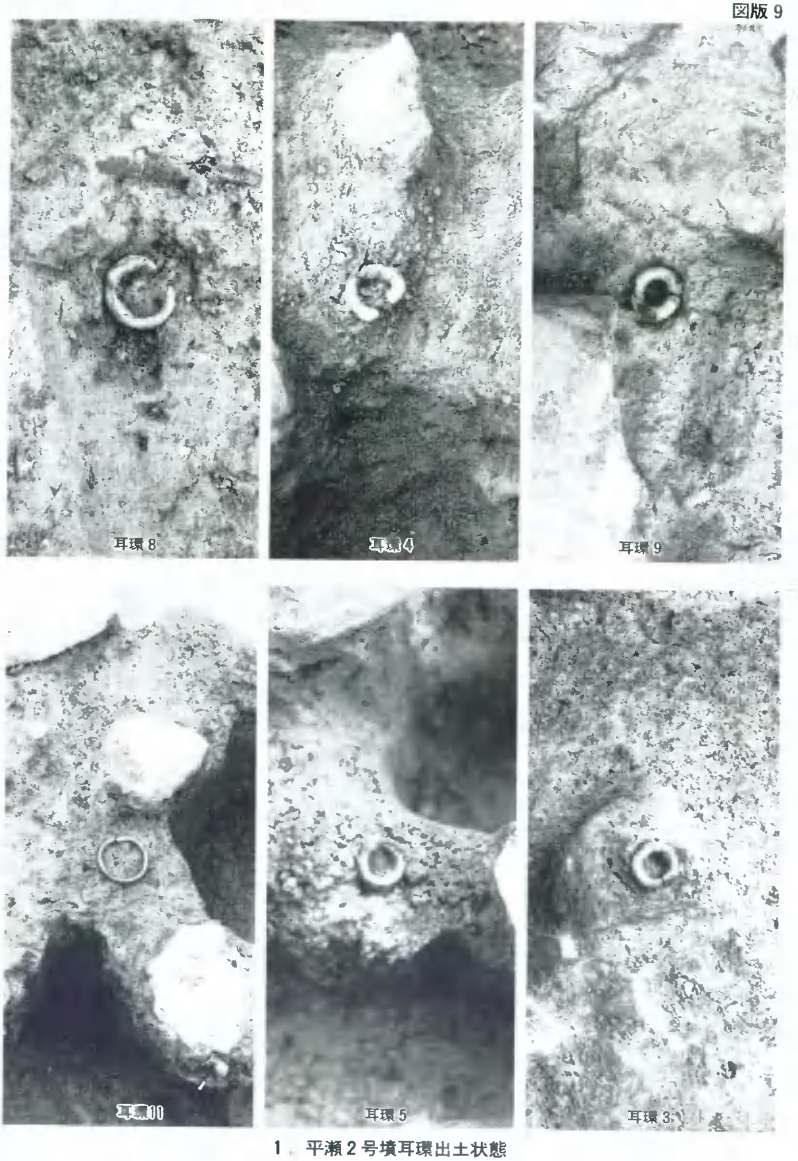


2．平瀬２号墳第１次埋葬面（北東から）

図版 8

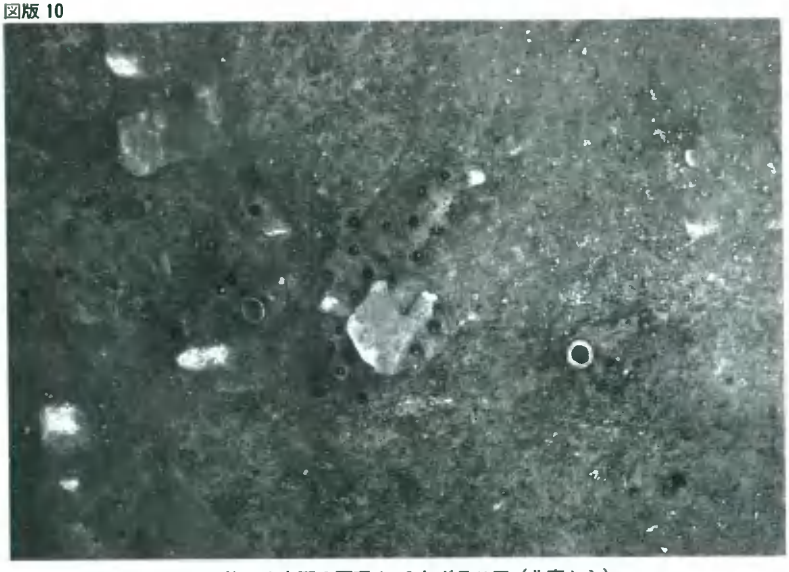
1．平瀬２号墳床面の横断面（南西から）

2．平瀬２号墳床面遺物（南西から）



1．平瀬 2 号墳耳環出土状態

図版 10



1．第1次床面の耳環1・2とガラス玉（北東から）

2．第1次床面の耳環3と緑色ガラス玉（南東から）

1．平瀬３号墳調査前状況（南から）

2．平瀬３号墳全景（西から）

図版 12

1．平瀬３号墳全景（南東から）

2．平瀬３号墳石室（南西から）

1．平瀬３号墳東トレンチ（南東から）

2．平瀬３号墳北トレンチ（西から）

図版 14

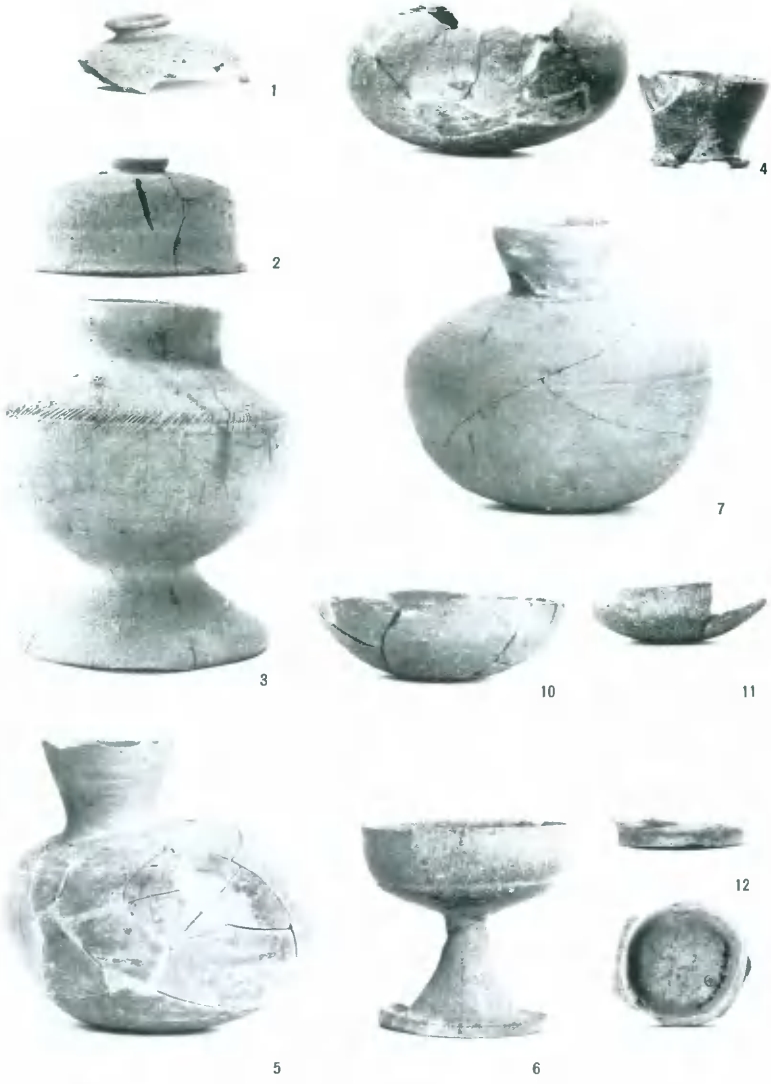
1．平瀬３号墳石室内（南から）

2．平瀬３号墳床面（北東から）

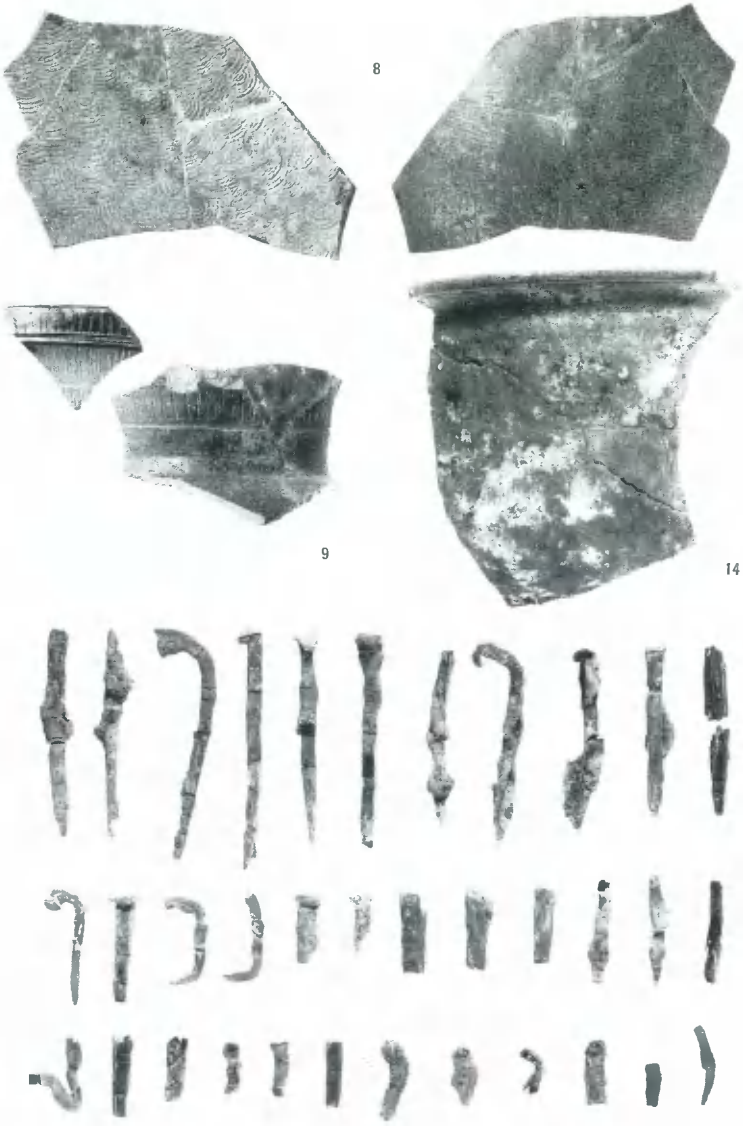
1．平瀬３号墳奥壁付近の遺物（南から）

2．平瀬３号墳石室中央付近の遺物（南から）

図版 16



1．平瀬1号墳出土須恵器・土師器



1．平瀬1号墳出土須恵器・棺釘等

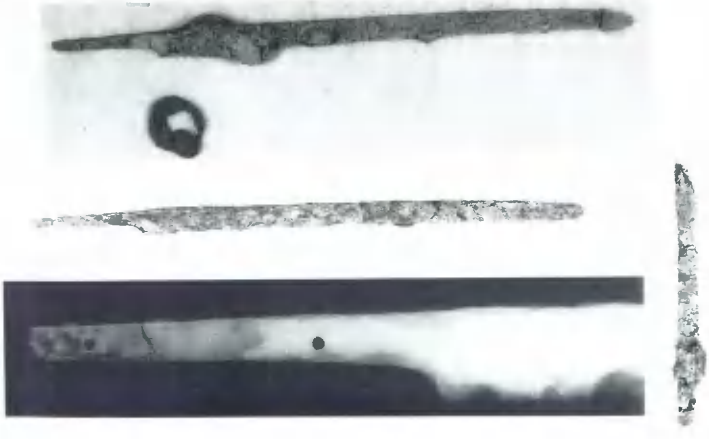
図版 18

1．平瀬２号墳出土須恵器１

1．平瀬２号墳出土須恵器 2

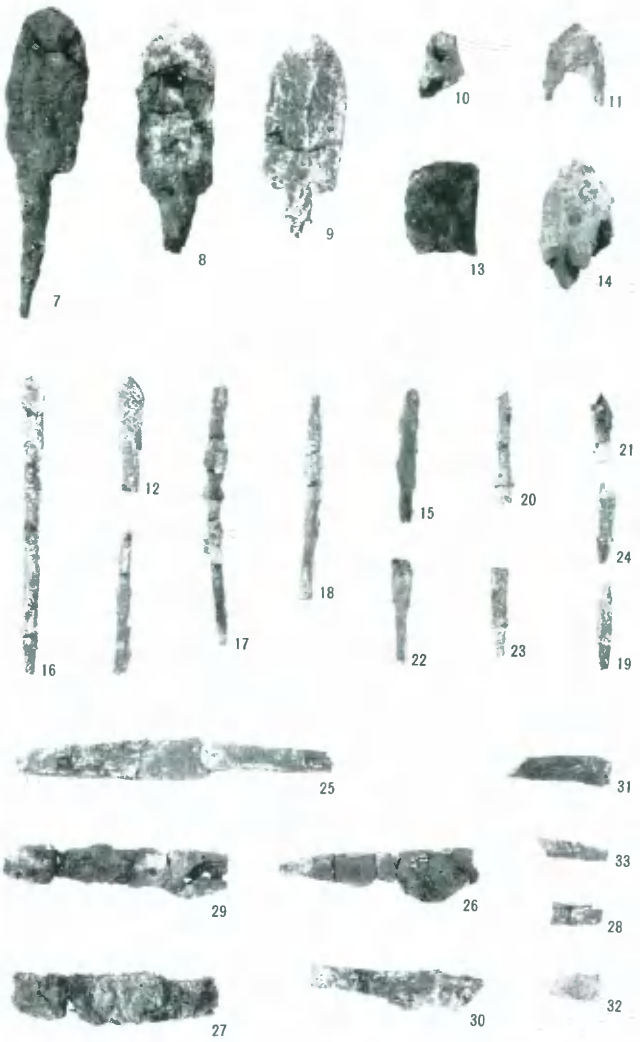
図版 20

1．平瀬２号墳出土須恵器 3)・土師器

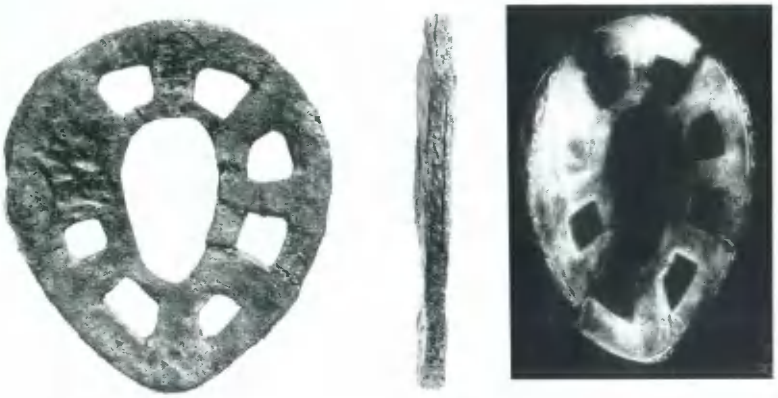


1．平瀬２号墳出土須恵器(4)・大刀・小刀

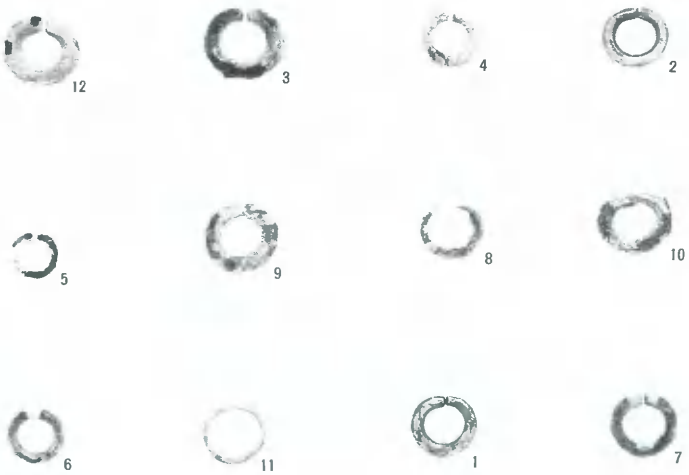
図版 22



1．平瀬２号墳出土鉄鏃・刀子等

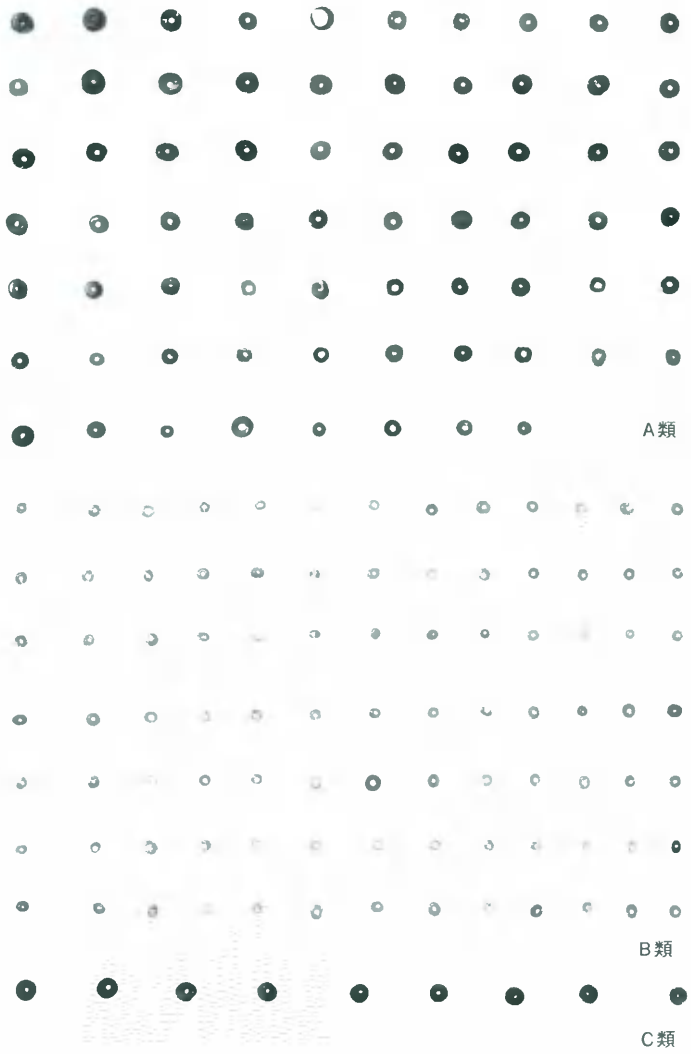


1．平瀬２号墳出土倒卵形八窓鍔



2．平瀬２号墳出土耳環

図版 24

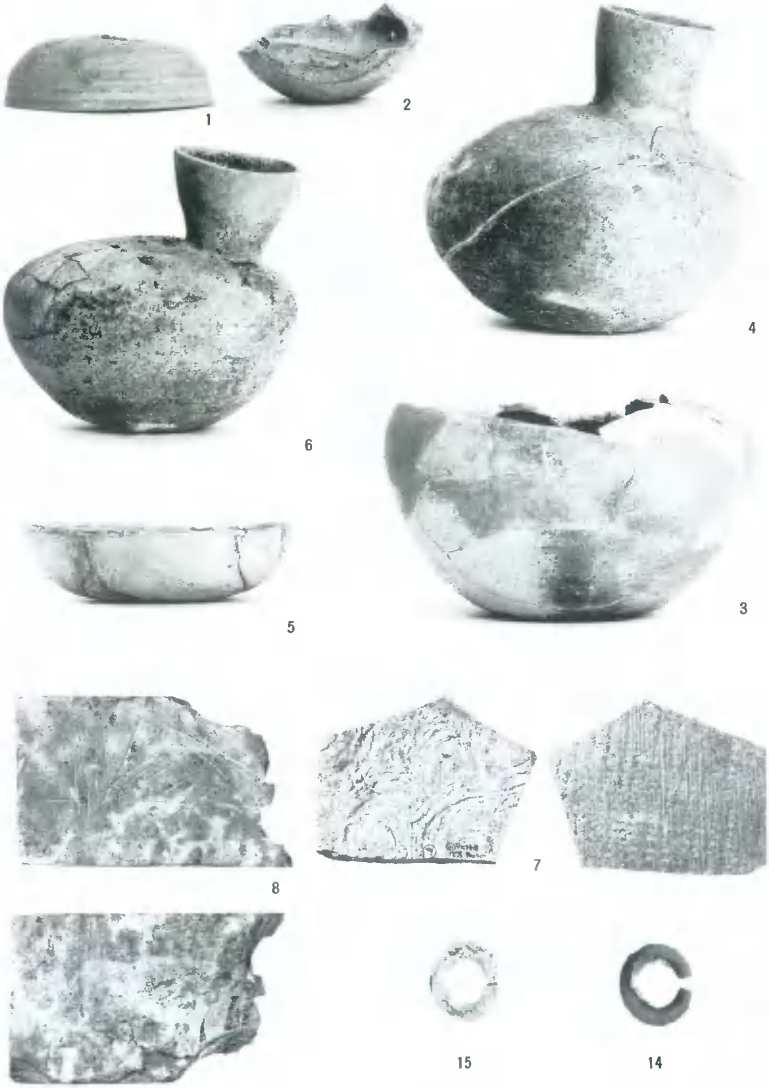


1．平瀬2号墳出土玉類

1．平瀬２号墳出土棺釘等(1)

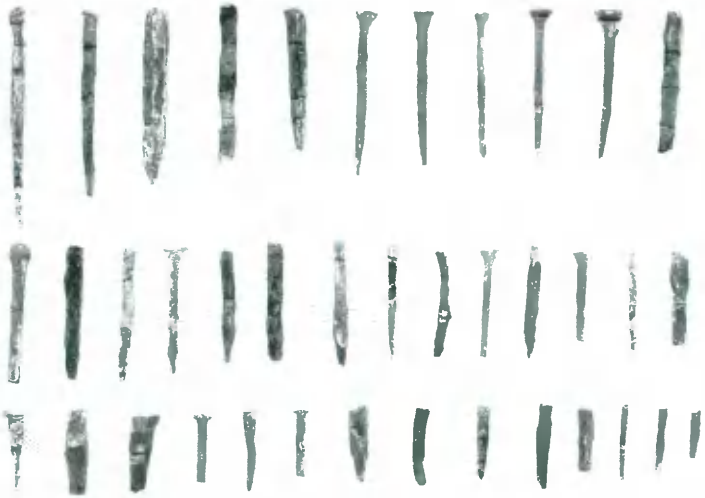
図版 26

1．平瀬２号墳出土棺釘等 2)



1．平瀬３号墳出土の副葬品

図版 28



1．平瀬 3 号墳出土棺釘等

2．平瀬 3 号墳出土の近世陶磁器等

富原西奥古墳

凡　　例

1．本書は日本道路公団の委託により、山陽自動車道の建設に先がけて、昭和63年に岡山県教育委員会が実施した岡山市富原西奥1614—2所在の富原西奥（とみはらにしおく）古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査の実施は、下記の日程、担当者で岡山県古代吉備文化財センター（以下センター）が行った。

第1次調査　　担当者　松本和男、佐守　学

　　調査期間　昭和63年1月29日～2月12日

第2次調査　　担当者　松本和男

　　調査期間　昭和63年4月5日～6月13日

3．発掘調査の実施にあたっては、「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の指導を受けた。

4．出土遺物の整理はセンター津寺事務所と学南町発掘調査事務所で行った。

5．本報告書の執筆、編集は松本が行った。

6．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さぬかぎり磁北である。

7．報告書で用いた時代区分は、一般的な政治区分に準拠し、それを補うため文化史区分、世紀を併用している。

8．報告書に関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325—3）に保管している。

目　　次

凡　　例 ……103
目　　次 ……105
1．調査の経過 ……109
2．位置と環境 ……111
3．発掘調査の概要 ……116
(1) 墳丘と周堀 ……116
(2) 横穴式石室 ……118
(3) 埋葬主体 ……118
(4) 出土遺物 ……122
4．ま と め ……127

図 目 次

第1図　山陽自動車道と発掘調査遺跡位置図（黒丸印）……107
第2図　遺跡の位置（黒丸印）……112
第3図　周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）……113
第4図　富原西奥古墳位置図（黒角）（S＝1/2,000）……115
第5図　古墳周辺地形測量図（S＝1/200）……116
第6図　墳丘測量図（S＝1/150）……117
第7図　石室平面図（S＝1/30）……119
第8図　墳丘断面図（S＝1/60）……120
第9図　横穴式石室実測図（S＝1/30）……121
第10図　出土遺物実測図（S＝1/4）……123
第11図　釘の木目付着分類（模式図）……124
第12図　木棺痕跡検出面での鉄釘出土状況（S＝1/20）……125
第13図　木棺底面での鉄釘出土状況（S＝1/20）……125
第14図　出土遺物実測図（鉄釘）（S＝1/3）……126
第15図　木棺配置想定図（S＝1/30）……127
第16図　木棺復元図 ……128

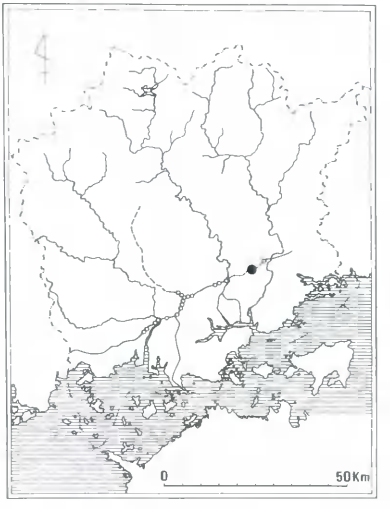
表 目 次

表—1　遺跡名称一覧表 ……114
表—2　土器観察一覧表 ……123
表—3　鉄釘一覧表 ……124

図 版 目 次

図版1—1　古墳近景（北から）……131
2　古墳近景（南西から）……131
図版2—1　墳丘表土除去後（南南東から）……132
2　墳丘表土除去後（北北西から）……132
図版3—1　天井石検出状況（南西から）……133
2　天井石検出状況（北から）……133
3　天井石除去後（北北西から）……133
図版4—1　埋葬主体検出状況（南南東から）……134
2　埋葬主体（木棺痕跡）検出状況（南南東から）……134
図版5—1　埋葬主体（木棺痕跡）検出状況（北北西から）……135
2　床面での鉄釘出土状況（南南東から）……135
図版6—1　北側小口底面での鉄釘出土状況 ……136
2　（左）1の西側鉄釘拡大 ……136
（右）1の東側鉄釘拡大 ……136
3　南側小口底面での鉄釘出土状況 ……136
図版7—1　床面下の配石状況 ……137
2　床面下の配石除去後 ……137
図版8—1　石室側壁（東側）……138
2　石室側壁（西側）……138
図版9—1　石室基底部配列状況 ……139
2　石室掘り方（奥壁部）……139
3　石室基底部配列状況 ……139
4　石室基底部の根石 ……139
5　石室基底部の根石 ……139
図版10—1　墳丘断面（C～Dラインの西側）（南から）……140
2　墳丘断面（C～Dラインの東側）（南から）……140

図版11－1　墳丘腐葉土除去作業 ……141
2　天井石除去作業 ……141
3　埋葬主体検出作業 ……141
図版12　出土遺物 ……142
図版13　出土遺物 ……143
図版14　出土遺物 ……144



第１図　山陽自動車道と発掘調査位置図（黒丸印）

1．調 査 の 経 過

(1) 発掘調査に至る経過

山陽自動車道は、吹田市を起点とし、瀬戸内海沿岸を結んで山口市に至る総延長約460kmの高速自動車道である。この道路は、東は神戸市北部で中国縦貫自動車道と合流し、西では中国横断自動車道、瀬戸中央自動車道等に接続する、山陰地方、四国地方を結ぶ広域幹線道路網の中心となる高速自動車道である。

1971年に基本計画が策定され、翌年にはルートが決定した。これを受けて岡山県教育委員会は建設省、日本道路公団と協議を行い、第6次施行命令区間である姫路～備前間、倉敷～福山間の発掘調査を順次実施してきたのである。

第7次施行命令区間である岡山～倉敷間（約27.4km）は1973年10月19日に整備計画が決定し、同日付で日本道路公団に施行命令が出された。そして、1977年1月13日に実施計画が許可され、同年10月29日に路線発表されたのである。

日本道路公団（以下、公団）の委託を受けた岡山県教育委員会は、用地買収の完了している岡山ジャンクションを中心とする足守川右岸までの遺跡（第3図）の発掘調査を調査員の大幅増員による組織強化で大規模に開始した。

今回報告する富原西奥古墳は、足守川左岸に所在する遺跡群（津寺遺跡、三手遺跡、政所遺跡）の全面発掘調査に先がけて実施した。すなわち、岡山インター（仮称）建設予定地は工事着工が早いため、早急に予定地内に存在する富原大池奥山遺跡の範囲、時期及び性格を把握する必要が生じたため、昭和63年2月1日～12日にかけて調査中にこの富原西奥古墳は新規発見されたのである。

富原大池奥山遺跡は岡山インターの本線敷となる標高67mの丘陵頂部に位置する直径約15m、高さ0.5mの楕円形状の墳墓と考えられていた。このため、調査は遺構及び遺跡推定範囲内に幅2m、長さ5m～40mの各種トレンチを合計11ヶ所に設定した（第4図）。調査面積は300m²である。

調査の結果、尾根上は表土直下から地山層、斜面では表土、無遺物堆積層、地山層となり、いずれのトレンチにおいても遺構、遺物が全く確認されず、また周辺地区においても遺物の散布が認められないことから、当遺跡は遺跡では無いことが判明したのである。

岡山インター建設予定地内は完全に樹木の伐開が終了しており、富原大池奥山遺跡の第1次調査は容易であった。遺構、遺物が確認されないため、インター予定地内を踏査したところ、富原大池奥山遺跡の南西約80mの位置に墳丘の低い円墳と思われる古墳を新規発見し、直ちに公団に対し発掘調査の必要を通知した。古墳は北から南に延びる丘陵に1基のみ独立して存在し、字名が西奥であるため富原西奥古墳と名づけられた。

発掘調査は昭和63年４月５日～６月13日にかけて実施した。４月５日から８日までは、調査担当者である松本、佐守そして調査補助員の馬場昌一、難波雅志によって古墳の地形測量、発掘器材の搬入を行い、本格調査は４月13日から松本によって開始された。調査前の予想では墳丘が小さく、低いため内部主体が木棺直葬の古墳であろうと考えられていたが、調査の結果、盗掘を受けてはいるが古墳時代の終末に位置づけられる横穴式石室墳であることが確認できたことは大きな成果であった。

(2) 発掘調査の体制

発掘調査は日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会があたり、調査の専門的指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱した。

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員

鎌木　義昌	岡山理科大学	稲田　孝司	岡山大学	1991年から
水内　昌康	岡山県文化財保護審議会委員	土井　基司	岡山大学	1991年から
西川　　宏	山陽女子高校			
間壁　葭子	倉敷考古館			
根木　　修	岡山市教育委員会			
高見　周夫	岡山県遺跡保護調査団			
新納　　泉	岡山大学　1991年まで			
西岡周一郎	岡山県遺跡保護調査団　1991年まで			

昭和62年度

岡山県教育委員会文化課

課　　長　　高橋　誠記（12月15日まで）
　　吉尾　啓介（12月16日以降）
課長代理　　河野　　衛
課長補佐（埋蔵文化財係長）　伊藤　　晃
主　　査　　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　橋本　泰夫

総務課

総務課長　　佐々木　清
総務主幹　　藤本　信康

主　　任　　花本　静夫、岡田　祥司

調査第一課

課　　長　　河本　　清

調査第二課

課　　長　　葛原　克人

文化財保護主幹（第一係長）　　正岡　睦夫

文化財保護主査（第二係長）　　松本　和男（調査担当）

主　　事　　佐守　　学（調査担当）

昭和63年度

岡山県教育委員会文化課

課　　長　　吉尾　啓介

課長代理　　河野　　衛

課長補佐（埋蔵文化財係長）　　伊藤　　晃

主　　査　　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　水田　　稔

総務課

総務課長　　佐々木　清

総務主幹　　藤本　信康

主　　任　　花本　静夫、岡田　祥司、片岡　淳司

調査第一課

課　　長　　河本　　清

調査第二課

課　　長　　葛原　克人

第二係長　　松本　和男（調査担当）

2．位置と環境

富原西奥古墳は終末期の古墳で、岡山市の北西、吉備高原南縁の丘陵地帯に位置する古墳である。古墳は岡山市街地に接する北西低丘陵にある堂敷山（標高207m）から南に派生する標高67mの丘陵上に所在し、行政区画は岡山市富原字西奥1614－2に属する。

古墳は北から南に延びる丘陵の南緩斜面に1基のみ独立して存在している。

富原西奥古墳は旧備前国の西部に位置し、旧郡名は津高郡で、平安時代に編纂された『和名抄』では津高郷の地域に当たる所である。

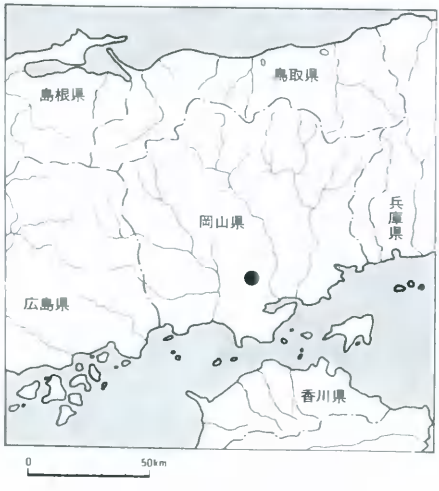
当古墳の所在する丘陵には古墳が少なく、北側に前期古墳と思われる方墳と後期古墳である青谷３、４号墳が確認されているのみである。

南側の丘陵斜面には弥生時代の散布地が１ヶ所と、南側の坊主山々塊との間に三ヶ所の古瓦出土地点が存在する。１つは富原字荒神にある富原北廃寺である[1]。この寺院址は出土した瓦から白鳳時代に創建したと考えられる。四至は瓦の出土場所からみて方１町の寺域が推定されるが、伽藍配置等については不明である。この富原北廃寺から約400m南西の丘陵斜面には、富原遺跡から出土する奈良時代の瓦を焼成した上の段窯址が存在する。富原北廃寺の南400mに所在する富原遺跡は、かつて富原南廃寺、才の木廃寺と呼ばれていたものである[2]。遺構については不明であるが、出土瓦が奈良時代のものであり、しかもこの遺跡のすぐ南側を古代山陽道が東西に走っているため、近年では富原遺跡を津高駅家に想定する説[3]が有力である。

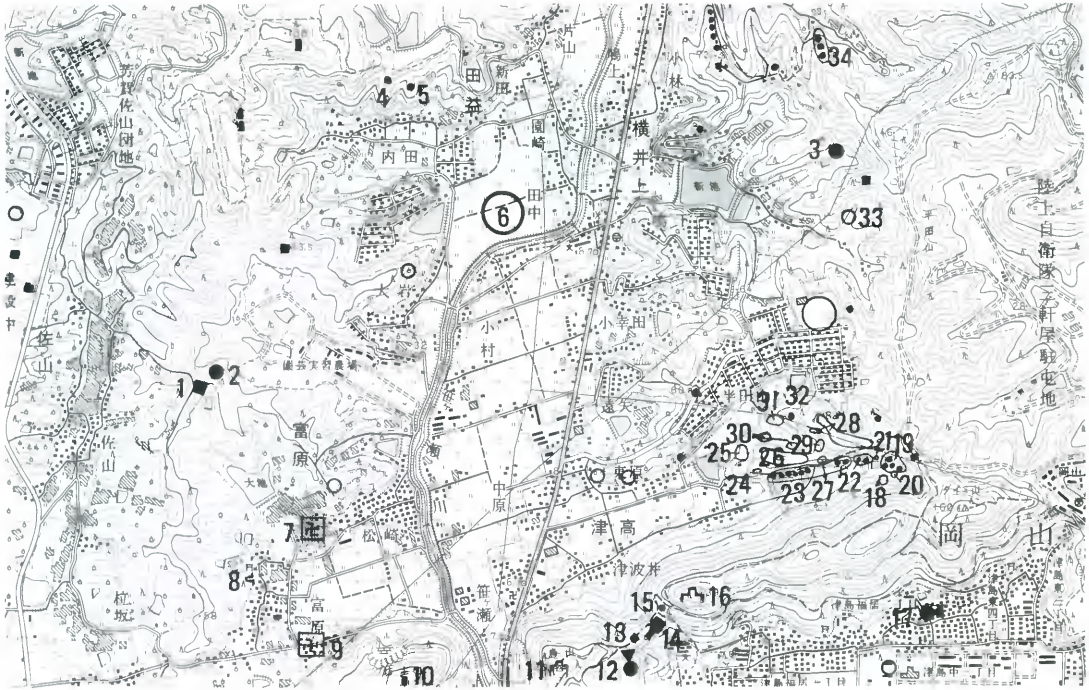
このように、富原西奥古墳の南には白鳳時代創建の富原北廃寺、奈良時代の駅家（津高駅）、それに伴う瓦窯址など重要な遺跡が集中している地域である。

笹ヶ瀬川右岸の沖積地には今まで遺跡が確認されていなかったが、山陽自動車道建設に伴う発掘調査で縄文時代後期～中世の遺物が出土する田益遺跡[4]が発見されており、今後さらに集落址が発見されるであろう。

笹ヶ瀬川を挟んだ東側の津高のダイミ山山塊には、著名な弥生時代の墳丘墓である都月坂２号墳[5]、最古の埴輪である「都月型」を出土した古墳時代前期初頭の都月坂１号墳[6]、七つ坑１号墳[7]などがある。ダイミ山の北側丘陵は近年、団地造成に伴う発掘調査によって弥生時代中期末から古墳時代末の遺構が多数発掘されている。特に注目される遺構として、奥山遺跡では製鉄炉、長形炭窯、猪ノ坂南遺跡東地点で製鉄炉、猪ノ坂谷尻遺跡、立越南遺跡、新田上南遺跡、



第２図　遺跡の位置（黒丸印）



遺跡の種別記号

⬭	散布地及び遺跡地	●▬	前方後円墳	⎍	窯跡	▮	祭祀址
●	円墳	■▬	前方後方墳	卍	寺院址	⌂	城跡
■	方墳						

第3図　周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）

表—1　遺跡名称一覧表

番号	名　　称	番号	名　　称
1	富原西奥古墳	18	立越南遺跡
2	富原大池奥山遺跡	19	奥池古墳群
3	白壁古墳	20	奥池遺跡
4	青谷３号墳	21	立越北遺跡
5	青谷５号墳	22	擂鉢池古墳群
6	田益遺跡	23	佐良池谷尻古墳群
7	荒神廃寺	24	新田上南遺跡
8	上の段窯址	25	新田上西遺跡
9	矢望城廃寺	26	新田上遺跡
10	坊主山遺跡	27	新田上東遺跡
11	烏山城	28	猪ノ坂東遺跡
12	都月坂　３号墳	29	猪ノ坂谷尻遺跡
13	都月坂　２号墳	30	猪ノ坂南遺跡
14	都月坂　１号墳	31	猪ノ坂遺跡
15	都月坂　４号墳	32	猪ノ坂東古墳
16	半田山城	33	白壁奥遺跡
17	お塚様古墳	34	猿場古墳群

猪ノ坂東遺跡南斜面において長形炭窯が発掘され[8]、この地域で６世紀末～７世紀代に大規模な鉄生産が行われていたことが確認されている。

このように、丘陵上には弥生時代中期～古墳時代の重要な遺跡が確認されている地域である。

註

1）富原北廃寺の名称は永山卯三郎が津高北寺と呼んでいたが、巌津政右衛門は富原荒神廃寺という名称を与えていた。岡山市遺跡地図では荒神廃寺と記載されている。
永山卯三郎『岡山県通史』上編　岡山県通史刊行会　昭和59年復刻
巌津政右衛門　「岡山平野の平地伽藍」『岡山市史』古代編　岡山市　昭和37年
岡山市教育委員会　『岡山市遺跡地図』　1983年

2）永山卯三郎は津高南寺ないし才の木、矢望城と称している。巌津政右衛門は富原矢望城廃寺、岡山市遺跡地図では矢望城廃寺と記載されている。
文献は註１）に同じ。

3）高橋美久二　「情報を制するものは」　『古代史復元　9　古代の都と村』　講談社　1989年
伊藤　晃　「富原北廃寺．富原遺跡」　『岡山県史』第18巻　岡山県　1986年

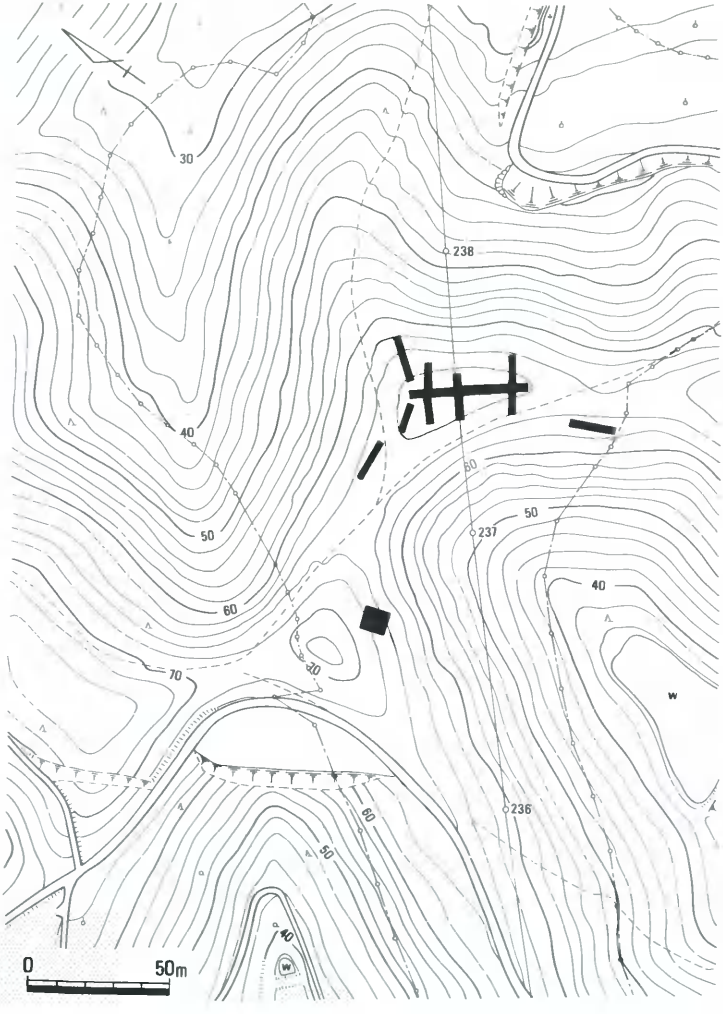
4）1991年に岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施している。報告書未刊。

5）近藤義郎　「都月坂２号弥生墳丘墓」　『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年

6）近藤義郎　「都月坂１号墳」　『岡山県史』第18巻　岡山県　1986年

7）近藤義郎他　「岡山市　七つ坑古墳群」　七つ坑古墳群発掘調査団　1987年

8）岡山市教育委員会　「津高住宅団地造成地内遺跡　発掘現地説明会資料」による　1991年



第４図　富原西奥古墳位置図（黒角）（Ｓ＝1/2,000）

3．発掘調査の概要

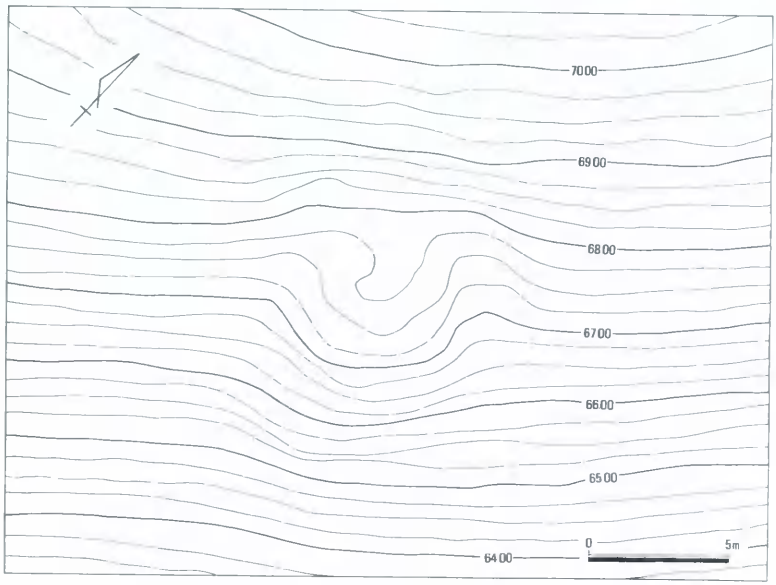
(1) 墳丘と周堀（第5、6、8図、図版1、2、10）

富原西奥古墳の所在する丘陵は北から南に延びる。古墳はこの丘陵南斜面に1基のみ独立して存在する。古墳の位置、石室の開口方向からみて、南東方向を強く意識していたものと思われるが、この古墳の眼下には富原北廃寺、富原遺跡、上の段窯址などが存在する。

古墳の位置する丘陵斜面は緩やかであり、古墳は僅かの盛土によって確認された（第5図）。調査前の現況は、墳丘中央部が陥没し、盗掘を受けた痕跡が認められたが、墳形は良好に遺存しており、古墳規模を直径8～9m、高さが前方端墳から約2mを測る円墳と想定した。

発掘調査の結果、墳丘は南北が7.7m、東西7.6m、高さは前方墳端から約2.25mを測り、その平面形は東側が少し突出した五角形を呈しているように見える、若干墳形が崩れた方墳であると思われる。

古墳の築造は、まず石室掘り方の掘削のため、山側（北側）の地山を削平し、その排土で墳丘下段となる緩斜面を比較的丁寧に盛土して平坦面をつくった後に石室を築造していた。墳丘

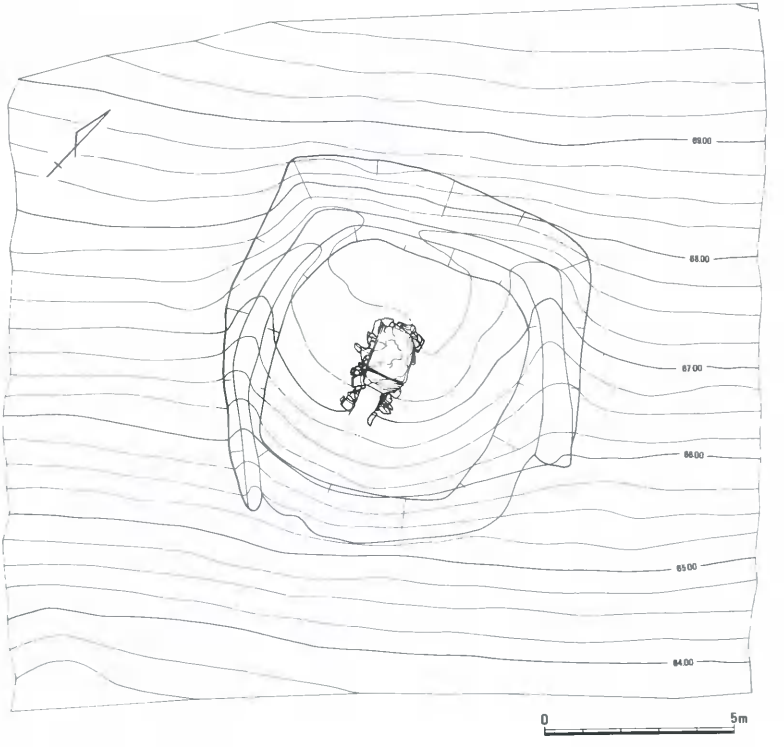


第5図　古墳周辺地形測量図（S＝1/200）

は第８図の断面観察によれば、墳丘盛土は約70cm程残存していたものと考えられる。墳丘盛土の状況は第８図Ｃ－Ｄライン断面図では第５層から下層が、またＡ－Ｂライン断面図では第３、５～７層が盛土に相当すると考えられる。東西断面であるＣ－Ｄラインの西側における盛土は側壁を１段構築するごとに10～30cm程度の厚さで、ほぼ水平に近い状態で地山面から盛土されていた。一方、東側では地山面から約50cm程が一度に盛土されていたようである。

南北断面であるＡ－Ｂラインの断面観察では、横穴式石室の掘り方や墳丘の一部が確認された。石室奥壁の裏側の石室掘り方埋土は地山土で一度に埋められていた。

このように、墳丘断面の観察で確認された盛土の残存状況をみてみると、墳丘上部がかなり



第６図　墳丘測量図（Ｓ＝1/150）

破壊をうけ、天井石を中心に撹乱されていたが、本来は天井石の上に約50～60cm厚の盛土で覆われていたものと考えられる。

周堀は山側にコの字状に認められた。周堀は墳形と同じ方形となるように地山面を掘削しており、確認された幅は1.0～2.2m、最深部は約1.1mを測る。断面形は「U」字形を呈し、底部幅は0.3～1.0mである。埋土は丘陵上部からの流入土である。なお、石室開口部である南側には周堀が掘られていなかったと思われる。

(2) 横穴式石室（第７～９図、図版７～９）

当古墳の内部主体は横穴式石室である。石室は地山面を幅約1.8m、長さ約2.3mにわたって掘り込んだ墓壙内に構築されていた。この壙内に築かれた石室は第８図でみるように、まず地山面まで掘削した後、灰黄色土や灰色土で整地後に石室を構築している。なお、石室は南の谷頭に向って開口している。

石室は盗掘によって天井石、側壁の一部が失われているが、残存する石室床面での計測値は、全長302cm、幅は奥壁部で69cm、開口部で58cmを測る。石室高は奥壁付近で68cm、開口部で56cmを測る。石室平面形からみて、当古墳は玄室と羨道の区別のない狭長な無袖式の横穴式石室であったと推察される。

１．天井石（第７図、図版３—12）

現状では２枚が残存していたが、これは本来１枚の天井石であったものが割れた結果である。構築時には入口部にもう１枚天井石が存在していたものと考えられる。残存する天井石の復元計測値は172×115cm、厚さ９～16cmを測る長方形の板状石材である。そして、この天井石の長辺を石室長軸方向に乗せていた。

２．奥壁（第９図、図版７—１、２、９—１、２）

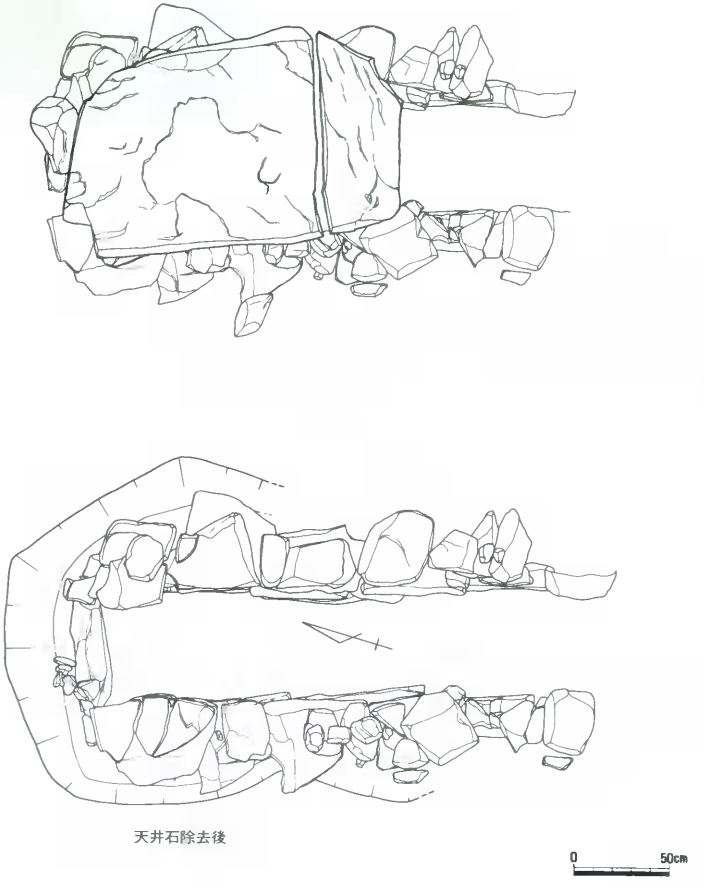
奥壁には最大高65cm、最大幅68cm、最大厚22cmの石材を平担な面を内側にして、床面に垂直に立て、奥壁右上端に小形の割石をはめ込んでいた。

３．側壁（第７、９図、図版８—１、２）

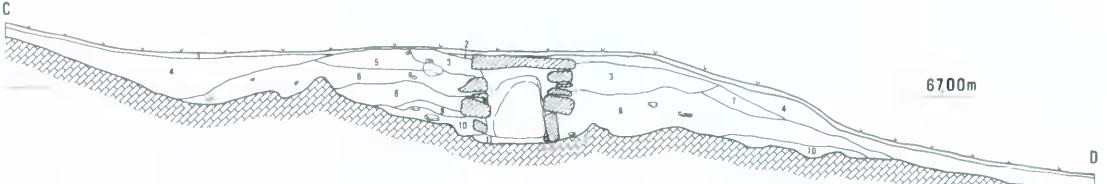
両側壁は割石を用いて構築している。構築方法は割石の平担面を内側にし、壁面全体をほぼそろえて積んでおり、床面にほぼ垂直か僅かに内傾している。側壁基底部は東側では長さ67～80cm、幅12～20cm、西側では長さ59～90cm、幅16～32cmの板状石材を３個横長に並べて基底部としている。基本的には３～４段積みであり、２段目からは横長石材で積むが、間隙には小角礫をはめ込んでいる。なお、側壁基底部石にはいずれも石材安定のため小角礫が根石として用いられていた。

(3) 埋葬主体（第12、13図、図版第４—２、５、６）

発掘調査の結果、木棺１基の埋葬が確認された。木棺は棺痕跡、鉄釘の出土状態などから、

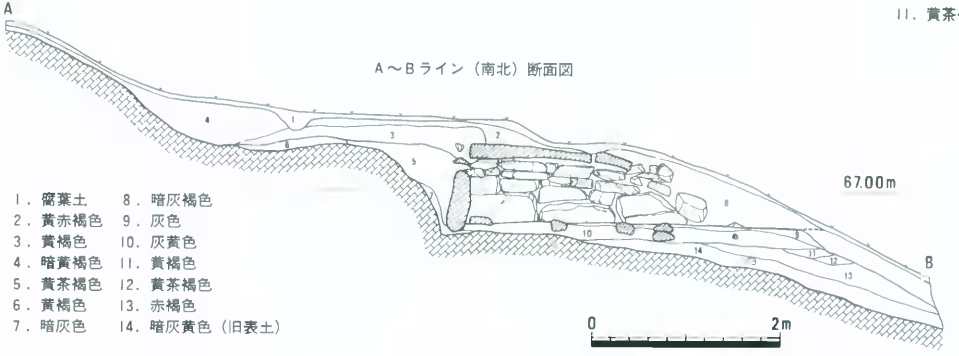


第７図　石室平面図（Ｓ＝1/30）



C～Dライン（東西）断面図

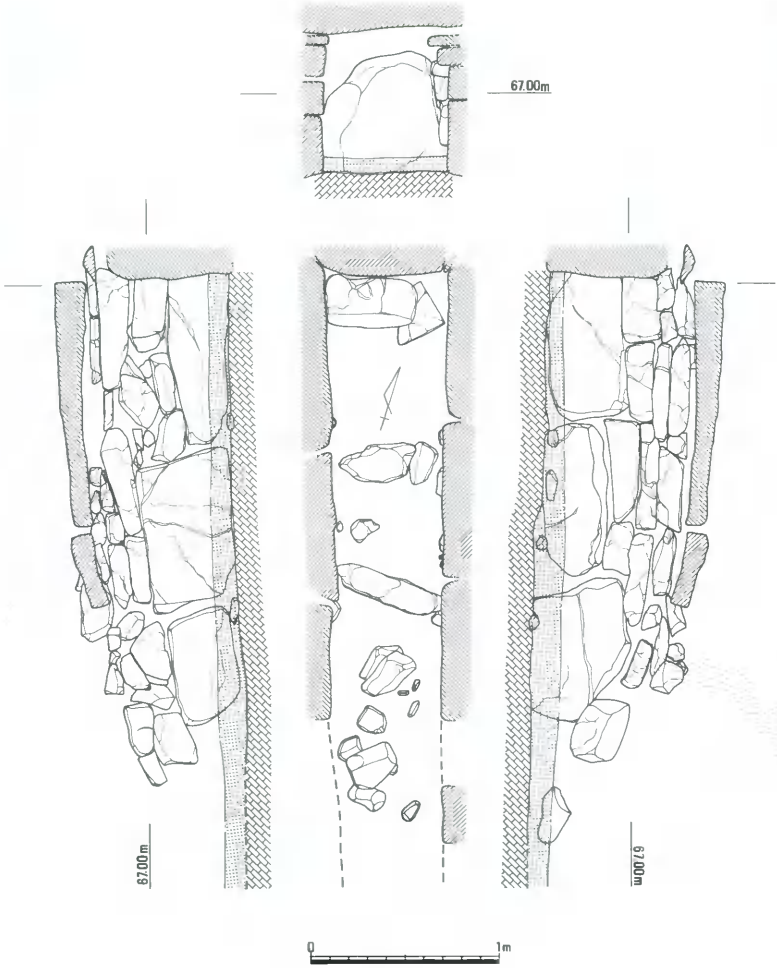
1．腐葉土
2．黄赤褐色
3．淡黄褐色（攪乱）
4．暗黄褐色
5．黄灰褐色
6．茶褐色
7．淡黄灰色
8．暗灰褐色
9．赤褐色
10．灰黄色
11．黄茶褐色



A～Bライン（南北）断面図

1．腐葉土
2．黄赤褐色
3．黄褐色
4．暗黄褐色
5．黄茶褐色
6．黄褐色
7．暗灰色
8．暗灰褐色
9．灰色
10．灰黄色
11．黄褐色
12．黄茶褐色
13．赤褐色
14．暗灰黄色（旧表土）

第8図　墳丘断面図（S＝1/60）



第９図　横穴式石室実測図（Ｓ＝1/30）

その外法は184×32cmを測るものと思われる。

木棺痕跡は棺底と考えられる棺台石[1]から約7cm程上面で検出された。痕跡は石室内埋土である暗黄灰色土層内で、やや灰色を呈することや鉄釘の出土状態によって識別が可能であった。

鉄釘の約半数は棺材に打ち込まれた状態で出土した。特に小口板と側板の接合状態が良好に確認できた。直立し、先端が上を向く縦釘は南側、北側の底板で各1本(10)、(20)、東、西両側板で各1本（9）、(13) 出土している。また、釘先端が横を向く横釘は東側板から北側小口板へ打ち込まれたものが（2）、(12) が各2本、北側小口板から東と西側板へ打ち込まれたものが各1本（7）、(11)、東側板から南側小口板に打ち込まれたものが1本 (22)、南側小口板から東と西側板に打ち込まれたものが各1本（4）、（6）認められた。

このような釘の出土状態からみて、棺材の組み合せ方は、まず底板の上に小口板、側板を立てるが、その際に両側板が小口板を挟む箱式の木棺であったと推察される。

なお、棺内では人骨、副葬品は認められなかった。

註

1）木棺の底板下には、15～60cm大の上面が平担な角礫が計7個認められた。この石は床面上に棺台石として置かれたものではなく、石室床面をつくる際に棺台石としての機能をもたせるため、床面から表面が露出するように設置していたと思われる。

(4) 出土遺物について（表—2、3、第12、13図、図版12～14）

出土遺物は須恵器、土師器、鉄器(鉄釘)、炉壁片がある。木棺内からは鉄釘以外の遺物は認められず、須恵器、土師器、炉壁片は石室前面の南斜面から出土したが、原位置を保つものではなかった。鉄釘は原位置を保たないものも認められたが、大部分は原位置を保つ状態で出土しているため、木棺復元が可能であった。

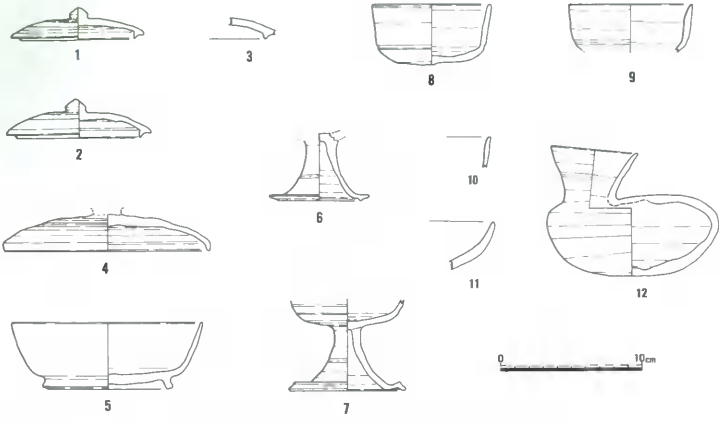
須　恵　器

須恵器は杯蓋4点、杯身4点、高杯2点、平瓶1点の合計11点が出土した。

杯蓋(1)、(2)、(4)はつまみがつくものである。(3)も同様のものと思われる。(1)、(2)は天井部にやや丸味をもち、外面中央に擬宝珠様つまみをもち、口縁端部は丸く内傾するかえりをもつが、(4)は天井部がやや丸味をもち、剥離しているが、擬宝珠様の扁平なつまみがついたものと思われる。なお、口縁部は垂直に下る。このように杯蓋は口縁部内面にかえりをもつものと、垂直に下るものの2種類が認められる。

杯身は高台のあるもの(5)と無いもの(8)～(10)の2種類がある。前者はハの字型の高台を付し、後者は底部に丸味をもち、口縁部が上外方にのびるものである。

高杯は脚裾部が水平に開くもの(6)と屈曲するもの(7)の2種類がある。



第10図　出土遺物実測図（S＝1/4）

表―2　土器観察一覧表

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器	杯蓋	7.9		2.3	口縁部は外下方に下り、端部は丸い。内傾するかえりを有し、端部は鋭い。擬宝珠様のつまみあり。天井部外面2/3回転ヘラ削り調整。他はヨコナデ調整。	内外面とも灰白色。	1mm以下の砂粒含む。	完形。
2	〃	〃	8.55		2.8	口縁部は外下方に下り、端部は丸い。内傾するかえりを有し、端部は鋭い。擬宝珠様のつまみあり。天井部外面3/4回転ヘラ削り調整。他はヨコナデ調整。	内外面とも灰白色。	1mm以下の砂粒含む。	完形。
3	〃	〃				口縁部は外下方に下る。内傾するかえりを有し、端部は丸い。天井部外面には回転ヘラ削り、ヨコナデ調整あり。	外面は灰色。内面は灰白色。	微砂含む。	
4	〃	〃	14.4			口縁部はほぼ垂直に下り、端部は丸い。天井部はやや丸味をもち、中央に擬宝珠様のつまみがつくものである。天井部外面1/2は回転ヘラ削り調整。	内外面とも青灰色。	黒色土粒0.5mm以下の砂粒含む。	
5	〃	杯身	13.3	8.4	4.75	体、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部は平らである。高台がつく。	内面は緑灰色。外面は灰白色。	1mm以下の砂粒と0.5mm程の黒色粒含む。	口縁は約1/6、底部は3/4残存。
6	〃	高杯		5.8		脚に一条の凹線。裾部で水平に開き、内傾し、端部はやや丸い。	内外面とも青灰色。	1mm以下の砂粒含む。	脚部残存。
7	〃	〃		8.1		脚に一条の凹線。脚部は端部近くで屈曲し、端部はやや丸い。	内外面とも青灰色。	微砂を含む。	杯、脚部2/3残存。
8	〃	杯身	8.2		4.3	体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部は丸味をもつ。底部外面は回転ヘラ削り調整。	内外面とも灰白色。	微砂を多く含む。黒色土粒多い。	3/4残存。
9	〃	〃	8.5			体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。	内外面とも青灰色。	微砂を含む。	底部は欠損。
10	〃	〃				体部、口縁部が上外方にのび、端部は丸い。	外面は緑灰色。内面は暗緑灰色。	微砂を含む。	
11	土師器	皿				体部、口縁部は内湾気味に上外方にのび、端部は丸い。底部付近はヘラミガキ調整。	内外面とも橙色。	微砂を含む。	
12	須恵器	平瓶	5.85		9.3	口縁は漏斗状に外へひらき、端部は丸い。底部はほぼ水平。体部中央より底部にヘラ削り調整。他はヨコナデ調整。	外面は暗青灰色。内面は青灰色。	5mm程度の礫を含む。	完形。

土　師　器

土師器は細片となっているが、皿が1点のみ出土している。

炉　壁　片

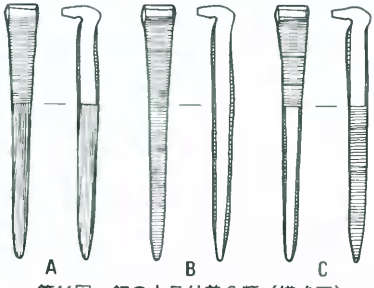
確認された炉壁片は５点である。いずれも高火度で焼けており、内部にはスサを含む多孔質のものである。この炉壁片が製鉄関係の炉壁であることが確認されている[1]。

鉄　　釘

鉄釘は合計32点出土している。これらの釘は木棺の板材接合に使用されたものであるが、板材との接合関係が判明しているものは13点であり、他は原位置を保っていなかった。

釘は鍛造品であり。全長は最長が10.5cm(5)、最小が5.9cm(16)である。断面は長方形のものと正方形があり、その寸法は最大が9.5×8.0mm(21)で、最小は5.5×6.5mm(9)であり、ややバラツキがみられる。頭部の形態は、一端を薄く叩き延ばした後一方へ折り曲げて作られている。

釘には木目痕の付着が認められるものがある。木目方向と付着する面との関係によって、A、B、C類の分類がなされているが[2]、当古墳出土の釘で確認できたA類は(4)、B類は(8)、(20)、(26)、C類は(7)である。なお、棺材は釘A、C類における木目痕から、板材厚が推測可能である。A類に属する(4)は右側板から小口に打ち込まれたものであるが、釘の木目痕から側板は約4.2cm厚、小口板は約5.2cm厚、底板が約4.5cm厚の棺材が使用されていたと推測される。



第11図　釘の木目付着分類（模式図）

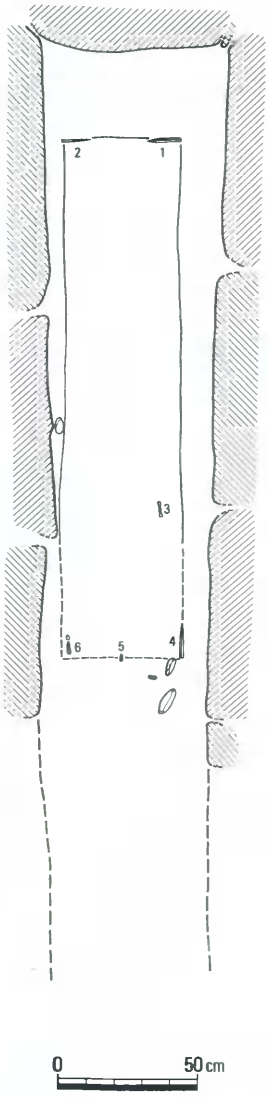
表—３　鉄釘一覧表

図番号	計測最大値(mm) 全長(現存長)	計測最大値(mm) 断面	重量(g)	遺存部位	調査時番号
1	91.0	9.0×6.0	13.00	先端を欠く	No.2
2	94.0	8.0×8.0	12.91	〃	No.7
3	95.0	6.0×6.0	13.31	頭，先端を欠く	No22
4	95.0	6.0×8.0	10.41	完形	No11
5	103.0	7.0×6.0	10.45	頭の先を欠く	No.4
6	92.0	6.5×7.0	10.50	頭，先端を欠く	No.1
7	92.5	7.0×8.0	15.08	頭の先を欠く	No.9
8	71.0	6.0×6.0	5.15	〃	No.8
9	63.5	5.5×6.5	5.03	頭，先端を欠く	No18
10	76.0	7.0×8.0	1.64	〃	No15
11	58.5	6.0×5.5	5.72	〃	No26
12	47.0	8.0×7.5	4.89	先端を欠く	No.3
13	45.0	6.5×6.0	5.50	〃	No23
14	33.0	7.0×8.0	5.30	頭，先端を欠く	No20
15	36.0	7.5×7.5	4.10	〃	No28
16	59.0	8.0×5.5	4.84	〃	No12
17	34.0	7.0×8.0	3.13	〃	No14
18	13.5	6.0×5.5	0.64	〃	No21
19	33.0	8.0×9.0	4.87	胴	No10
20	74.0	6.5×8.5	12.38	〃	No27
21	67.0	9.5×8.0	10.14	〃	No21
22	37.0	6.5×7.0	3.92	〃	No19
23	17.0	7.0×7.0	7.07	〃	No20
24	32.0	8.0×7.0	2.42	〃	No20
25	27.0	5.0×5.5	2.49	先端	No13
26	43.0	8.0×7.0	5.64	胴	No28
27	56.0	6.0×6.0	4.18	〃	No.6
28	45.0	6.0×7.5	3.17	胴，先端	No25
29	42.0	6.0×4.5	3.00	胴	No16
30	44.0	6.0×7.5	3.24	胴，先端	No17
31	28.0	6.0×8.0	1.64	先端	No.5
32	27.0	6.0×5.0	1.22	胴	No24

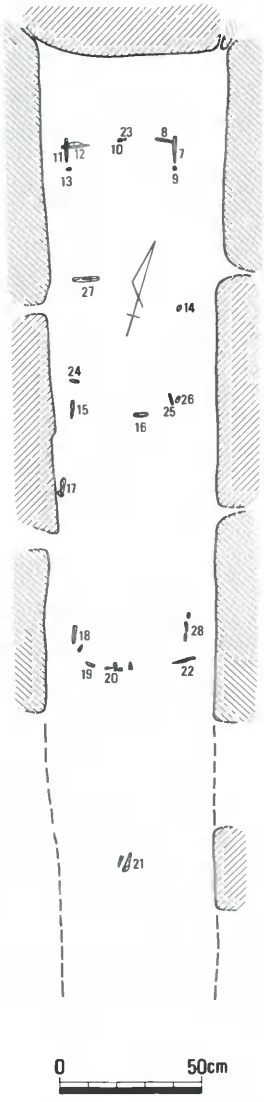
註

1）付載参照のこと。

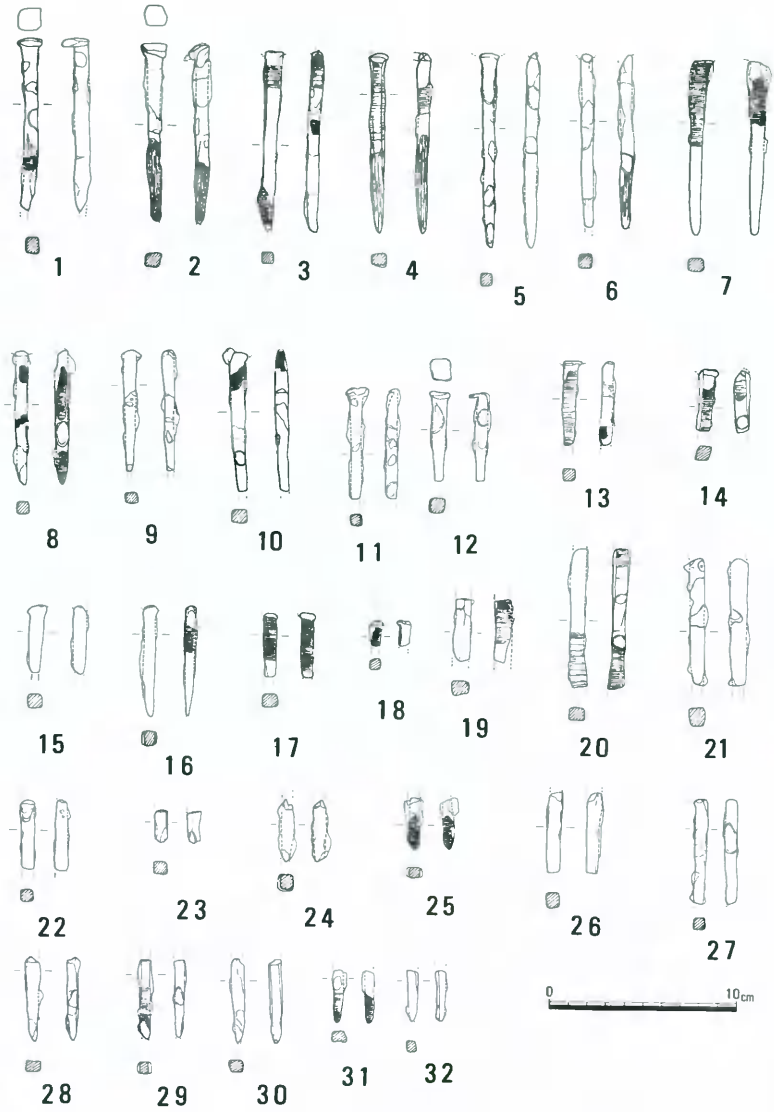
2）分類の基準は木下保明ほか『旭山古墳群発掘調査報告』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1981　による。



第12図　木棺痕跡検出面での鉄釘出土状況（S＝1/20）



第13図　木棺底面での鉄釘出土状況（S＝1/20）



第14図　出土遺物実測図（鉄釘）（S＝1/3）

4．ま　と　め

発掘調査の結果、当古墳は古墳時代の終末期に位置づけられるものであることが判明した。以下、調査の過程で明らかとなった事実を記してまとめにかえたい。

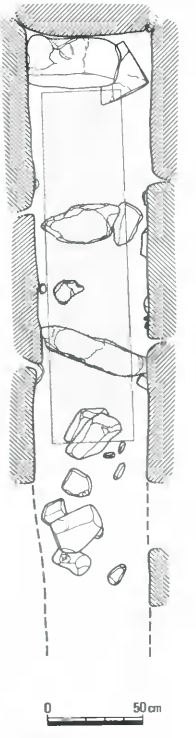
(1)　墳丘について

調査前は、当古墳を直径８～９ｍ、高さが前方墳端から約２ｍ程の円墳と想定したが、調査の結果、墳形は東側がやや角ばる形状を呈し、完全な方形ではないが、一応、方墳の範疇に入るものと考えられる。墳丘高は復元すると、前方墳端から約2.8m程を測ることが判明した。墳丘の断面観察によれば、版築は認められず、盛土は西側では５回程に分けて比較的丁寧に築造しているが、東側では丁寧な盛土がなされていなかった。

(2)　内部施設について

当古墳の内部施設は横穴式石室である。残存する石室の規模は全長302㎝、幅は奥壁部で69㎝、石室高は奥壁付近で68㎝を測る小規模な横穴式石室で、石室の平面形態は非常に狭長な無袖式の横穴式石室であった。この横穴式石室の埋葬主体は箱式木棺であり、検出された木棺の外法は長さ184㎝、幅32㎝を測るもので、石室の規模、鉄釘の出土状態からみて１体だけ葬る単葬墓であることが判明した（第15図）。

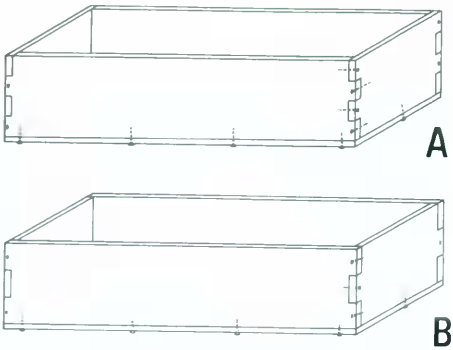
検出された箱式木棺は、木棺痕跡と原位置を保つ鉄釘の出土状態の在り方、鉄釘の木質付着状況によって箱式木棺の復元が可能となった。木棺の組合せは、小口板、側板、底板への釘の打ち込まれた状態によって復元が可能であり、当古墳の木棺は、底板の上に小口板、側板を立て、さらに天井板を蓋として組合せる箱式木棺であることが想定される。小口板と側板の組合せ方は、釘の出土状態からみて、両板の接合が最下位の釘が側板から小口板に向けて打ち込まれ、その上位の釘は小口板から側板に向けて打ち込まれていることからみて、この木棺は両板の隅に切り込みを設けて(相欠きの組手による接合)、そこに板材をはめ込んで固定し、釘を打ち込む組手による接合木棺であることが判明した[1]。この組手による接合も二種類が考えられる(第16図)。Ａは両側板を小口板の間にはめ込む組手の接合となり、釘の使用は26本となる。Ｂは小口板を両側板の間にはめ込む組手の接合であり、釘の使用は



第15図　木棺配置想定図（Ｓ＝1/30）

22本である。

当古墳の木棺使用釘は、盗掘を受けているため正確ではないが、釘頭部近くが18本出土していることからみて、22本前後の使用が考えられるため、木棺の復元はBを想定しておきたい。



第16図　木棺復元図

(3)　古墳の築造時期について

築造時期の指標となる須恵器が石室内で原位置を保つ状態で出土しなかったが、石室前面の南斜面に掻き出された須恵器のうち、特に編年研究の進んでいる坏蓋を中心に築造年代を考えてみたい。

坏蓋は4点出土したが、大きく2つに分類が可能である。Ⅰ類は(1)、(2)で天井部中央に擬宝珠様つまみをもち、内面にかえりを有する。口径は7.9cmと8.55cm、器高は2.3cmと2.8cmである。Ⅱ類は(4)で、天井部中央に擬宝珠様つまみをもつが、内面にかえりをもたない。口径は14cmである。Ⅰ類は陶邑窯の中村編年[2]ではⅢ型式のⅡ～Ⅲ段階、田辺編年[3]では TK 46型式、Ⅱ類は中村編年ではⅣ型式のⅠ段階、田辺編年では TK 48型式にほぼ相当するものと思われる。

一方、岡山県南の窯跡出土資料と比較すれば、Ⅰ類が寒風B類[4]、土橋窯[5]の古相、上竹西の坊窯[6]のB類の類似し、Ⅱ類は寒風C類[7]、土橋窯[8]の新相に類似している。また、近年、総社市久代地内の「西団地遺跡群」[9]の発掘調査によって出土した須恵器編年と比較すれば、Ⅰ類は TK 217型式（新）に類似している。

以上、述べたように2類に分類可能な遺物が出土したのであるが、本古墳が追葬の認められない単葬墓であることから、Ⅰ類とⅡ類が並行して存在する型式の可能性が考えられるが、ここでは一応、7世紀の第Ⅱ～Ⅲ四半期頃に築造された古墳と考えておきたい。

(4)　被葬者の性格について

本古墳は横穴式石室の退化形態である狭長な無袖式の横穴式石室であり、出土した須恵器からみても古墳時代の終末に築造されたものといえよう。

終末に築造される古墳は、地方においては有力首長ないし有力官人など特定の人の墳墓として築造されたものと考えられることから、本古墳の被葬者もそのような人物であったと考えられる。

本古墳の墳丘は、(1)で述べたように県下では二子14号墳[10]、大谷1号墳[11]、定北古墳[12]の如く、

墳丘が二段ないし三段に築かれ、各段には外護列石をめぐらすというような極めて壮大な墳丘ではなく、さらに石室が切石積や横口式石槨でもない、極めて小規模な横穴式石室であることからみて、畿内政権と直接に結びつく、吉備中枢の有力官人の墳墓とは考えられないであろう。

あえて、推察するならば、本古墳の立地する眼下には富原北廃寺、津高駅家が想定されている富原遺跡などの官衙遺跡が存在することから、有力な官人層の墳墓が想定される一方で、本古墳から須恵器とともに僅かではあるが炉壁片[13]が出土していることから、製鉄[14]に関係する有力な階層の墳墓も想定されるのである。

註

1）このような木棺は高松塚古墳をはじめ、類例が増加している。しかしながら、終末期の木棺が全て組手による接合木棺ではなく、簡略化された木棺も数多く確認されている。例えば、大阪府柏原市の田辺古墳群では、確認された5基の木棺はいずれも両側板の間に座板を挟み、その小口部に小口板を落し込む組合式木棺であるが、平尾山古墳群では両者が存在している。
木下保明ほか　『旭山古墳群発掘調査報告』　「京都市埋蔵文化財研究所調査報告　第5冊」財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1981年
花田勝広　『田辺古墳群、墳墓群発掘調査概要』　「柏原市文化財概報」1986―Ⅳ　柏原市教育委員会　1987年
北野　重　『平尾山古墳群 ― 太平寺山手線建設に伴う　その3 ―』　「柏原市文化財概報」1989―Ⅲ　柏原市教育委員会　1990年
北野　重　『平尾山古墳群平野・大県支群 ― ミニゴルフ場建設に伴う ―』　「柏原市文化財概報」1991―Ⅲ　柏原市教育委員会　1992年
2）中村　浩ほか　『陶邑Ⅲ』　「大阪府文化財調査報告書第30輯」　大阪府教育委員会　1978年
3）田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981年
4）山磨康平　『寒風古窯址群』　「岡山県埋蔵文化財発掘調査報員」37　岡山県教育委員会　1978年
5）岡田　博　『土橋窯址出土遺物について』　「岡山県埋蔵文化財報告」13　岡山県教育委員会　1983年
6）井上　弘ほか　『上竹西の坊遺跡』　「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」69　岡山県教育委員会　1988年
7）註4に同じ
8）註5に同じ
9）村上幸雄ほか　『西団地内遺跡群』　「総社市埋蔵文化財発掘調査報告」9　総社市教育委員会　1991年
10）倉敷市二子に所在。山陽自動車道建設に伴い、1986年5月～8月と1987年4月～6月の2度にわたって、岡山県古代吉備文化財センターによって発掘調査が実施された。「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82」に収載予定。
11）上房郡北房町上中津井に所在。
大谷1号墳発掘調査団　『大谷1号墳』　岡山県上房郡北房町教育委員会　1989年
12）上房郡北房町上中津井に所在。
岡山大学考古学研究室定北古墳発掘調査団によって、1990年から4次にわたって発掘調査が実施された。
『定北古墳発掘調査　現地説明会資料』　1992年
13）大澤正己氏による炉壁片分析結果を付載している。参照のこと。
14）現在のところ、本古墳の周辺では製鉄に関係する遺構は確認されていない。しかしながら、笹ヶ瀬川を挟んだ東側の津高（ダイミ山山塊）では、製鉄遺構（鍛冶炉、炭窯）が確認され、佐良池古墳群では鉄滓、炉壁

片が副葬されていたことから、製鉄遺跡との関係が想定されており、本古墳周辺の丘陵部で将来、製鉄遺構が発見される可能性がある。

岡山市教育委員会　「津高住宅団地造成地内遺跡　発掘現地説明会資料」　1991年

1．古墳近景（北から）

2．古墳近景（南西から）

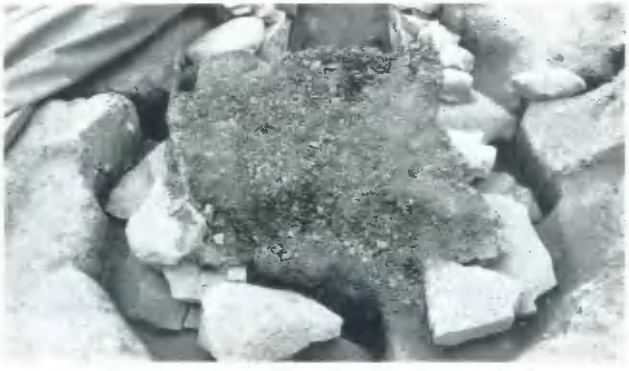
図版 2

1．墳丘表土除去後（南南東から）

2．墳丘表土除去後（北北西から）

1．天井石検出状況（南北から）

2　天井石検出状況（北から）



3　天井石除去後（北北西から）

図版 4

1．埋葬主体検出状況（南南東から）

2．埋葬主体（木棺痕跡）検出状況（南南東から）

1．埋葬主体（木棺痕跡）検出状況（北北西から）

2．床面での鉄釘出土状況（南南東から）

図版 6

1　北側小口底面での鉄釘出土状況

2　(右)1の東側鉄釘拡大
(左)1の西側鉄釘拡大

3　南側小口底面での鉄釘出土状況

1′ 床面下の配石状況

2′ 床面下の配石除去後

図版 8

1．石室側壁（東側）

2．石室側壁（西側）

1．石室基底部配列状況

2．石室掘り方（奥壁部）

3．石室基底部配列状況

4．石室基底部の根石

5．石室基底部の根石

図版 10

1．墳丘断面（C～Dラインの西側）（南から）

2．墳丘断面（C～Dラインの東側）（南から）

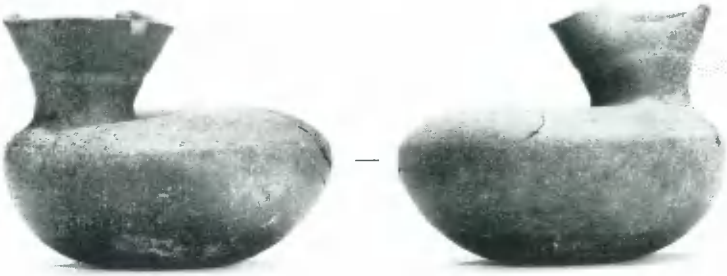
1 墳丘腐葉土除去作業

2 天井石除去作業

3 埋葬主体検出作業

図版 12

出土遺物



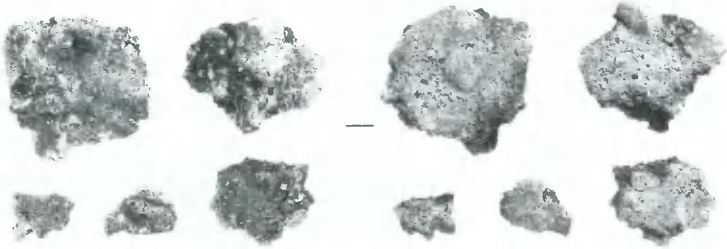
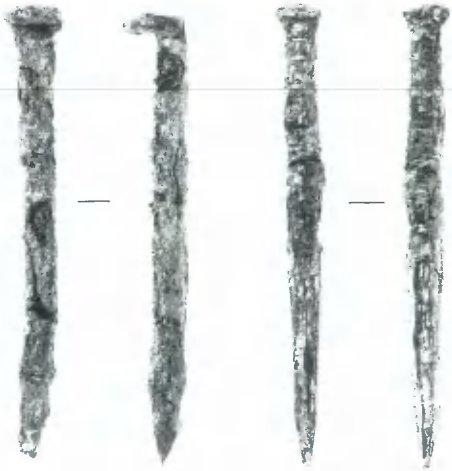
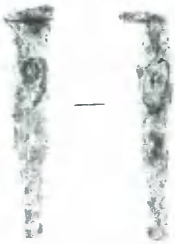


表　　炉壁片　　裏

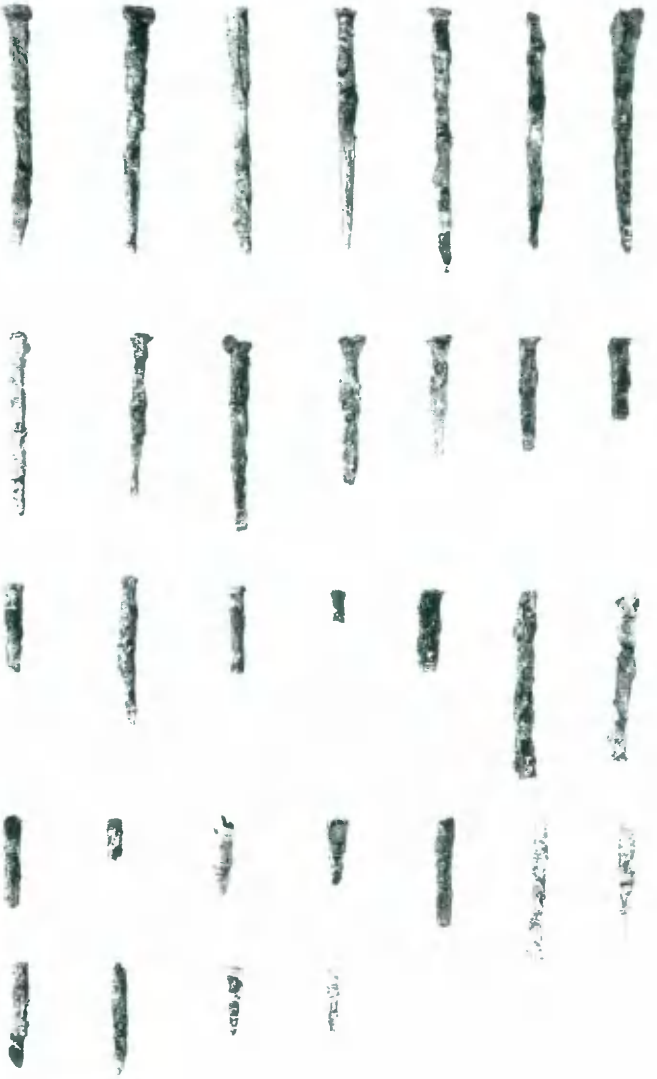


出土遺物



鉄釘拡大写真

図版14



出土遺物

白　壁　古　墳

凡　　例

1．本書は日本道路公団の委託により、山陽自動車道の建設に先がけて、平成3年に岡山県教育委員会が実施した岡山市横井上字中ノ谷1064—12所在の白壁（しらかべ）古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は平成3年1月10日～1月30日まで実施した。

3．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員松本和男、佐守学が担当し、地元有志の方々の協力を得て実施した。

特に白壁古墳の地権者である野上忠男氏（岡山市住吉町1—41—1）には、用地外にもかかわらず、墳丘の樹木伐開や墳丘測量でご協力をいただいた。記して感謝いたします。

4．発掘調査の実施にあたっては、「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の指導を受けた。

5．出土遺物の整理はセンター津寺事務所と学南町発掘調査事務所で行った。

6．本報告書の執筆、編集は松本が行った。

7．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さぬかぎり磁北である。

8．報告書で用いた時代区分は、一般的な政治区分に準拠し、それを補うため文化史区分、世紀を併用している。

9．報告書に関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325—3）に保管している。

目　　次

凡　　例 ……147
目　　次 ……149
1．調査の経過 ……151
(1) 発掘調査に至る経過 ……151
(2) 発掘調査の体制 ……151
2．位置と環境 ……152
3．発掘調査の概要 ……157
(1) 墳丘と周堀 ……157
(2) 横穴式石室 ……157
(3) 出土遺物 ……158
4．ま と め ……158

図 目 次

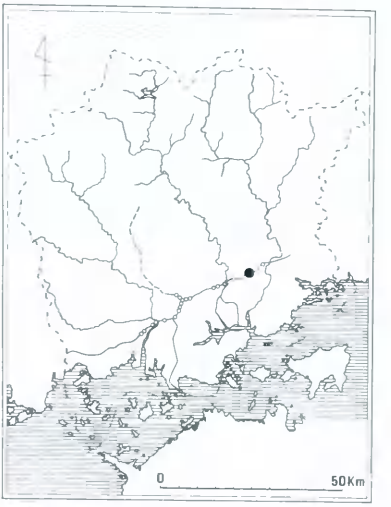
第1図　山陽自動車道と発掘調査遺跡位置図（黒丸印） ……150
第2図　遺跡の位置（黒丸印） ……153
第3図　周辺遺跡分布図（S＝1/25,000） ……154
第4図　白壁古墳位置図（矢印黒丸）（S＝1/2,000） ……156
第5図　古墳周辺地形測量図（S＝1/200） ……159
第6図　墳丘測量及びトレンチ位置図（S＝1/200） ……160
第7図　墳丘測量図（S＝1/200） ……161
第8図　墳丘断面図（S＝1/50） ……162
第9図　第3トレンチ平・断面図（S＝1/50） ……163
第10図　墳端石平面図（S＝1/60） ……163
第11図　出土遺物実測図（S＝1/6） ……164
第12図　出土遺物実測図（S＝1/4、1/6） ……165

表 目 次

表—1　遺跡名称一覧表 ……155
表—2　土器観察一覧表 ……158

図版目次

図版１－１　古墳遠景（南西から）……167
　　２　古墳遠景（西から）……167
図版２－１　古墳近景（南西から）……168
　　２　墳丘検出状況（西から）……168
図版３－１　墳丘検出状況（北西から）……169
　　２　第３トレンチ（南から）……169
図版４－１　羨道部側壁検出状況（南から）……170
　　２　第３トレンチ断面（南西から）……170
　　３　第２トレンチ断面（南西から）……170
図版５－１　第２トレンチ断面（南東から）……171
　　２　発掘調査風景（西から）……171
　　３　墳丘検出状況（北西から）……171
図版６　出土遺物……172



第１図　山陽自動車道と発掘調査遺跡位置図（黒丸印）

1．調査の経過

(1) 発掘調査に至る経過

山陽自動車道は、吹田市を起点とし、瀬戸内海沿岸を結んで山口市に至る総延長約460kmの高速自動車道である。この道路は、東は神戸市北部で中国縦貫自動車道と合流し、西では中国横断自動車道、瀬戸中央自動車道等に接続する、山陰地方、四国地方を結ぶ広域幹線道路網の中心となる高速自動車道である。

1971年に基本計画が策定され、翌年にはルートが決定した。これを受けて、岡山県教育委員会が建設省、日本道路公団と協議を行い、第6次施行命令区間である姫路～備前間、倉敷～福山間の発掘調査を順次実施してきたのである。

第7次施行命令区間である岡山～倉敷間（約27.4km）は1973年10月19日に整備計画が決定し、同日付で日本道路公団に施行命令が出された。そして、1977年1月13日に実施計画が許可され、同年10月29日に路線発表されたのである。

日本道路公団（以下、公団）の委託を受けた岡山県教育委員会は、用地買収の完了している岡山ジャンクション周辺に所在する遺跡群(津寺遺跡、三手遺跡、政所遺跡)、岡山西インター近くの高塚遺跡（第3図）の発掘調査を調査員の大幅増員による組織強化で大規模に実施した。その結果、用地未買収の一部を残して、平成2年12月で調査が終了したため、第7次施行命令区間に未調査遺跡の1つとして残る白壁古墳の発掘調査が平成3年1月10日から実施された。

本古墳は山陽自動車道の本線敷からはずされてはいるが、墳丘の約1/3程が用地内にありカットされるため、カット部分のみ調査を実施した。なお、調査が用地内だけでは充分な成果が得られないため、用地外地権者の同意を得て墳丘全体の樹木伐開後、墳丘測量を実施して用地内の発掘調査を開始した。

調査は用地内墳丘の表土排除後、トレンチを4ヶ所に設定して墳丘規模等について確認した。墳頂部は大規模な石材抜取による大穴で、内部主体である横穴式石室の奥壁一部が露出していたが、調査の結果、羨道部の左側壁が検出されたため、横穴式石室墳であることが確実となった。墳丘は径約19m、墳丘高は前方墳端から約3.5m以上あったと推定される円墳であることが判明した。なお、古墳築造の時期については確認することができなかっ。

(2) 発掘調査の体制

発掘調査は日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会があたり、調査の専門的指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱した。

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員

鎌木　義昌　　岡山理科大学　　稲田孝司　岡山大学　1991年から

水内　昌康　　岡山県文化財保護審議会委員　　土井基司　岡山大学　1991年から

西川　　宏　　山陽女子高校

間壁　葭子　　倉敷考古館

根木　　修　　岡山市教育委員会

高見　周夫　　岡山県遺跡保護調査団

新納　　泉　　岡山大学　1991年まで

西岡憲一郎　　岡山県遺跡保護調査団　1991年まで

岡山県教育委員会文化課

課　　長　　鬼澤　佳弘

課長代理　　光吉　勝彦

課長補佐（埋蔵文化財係長）　　伊藤　　晃

主　　査　　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　長瀬日出明

次長（調査第１課長）　　河本　　清

総務課

総務課長　　竹原　成信

課長補佐（係長）　　藤本　信康

調査第３課

課　　長　　正岡　睦夫

課長補佐（係長）　　松本　和男（調査担当）

文化財保護主事　　佐守　　学（調査担当）

2．位置と環境

白壁古墳は後期古墳で、岡山市の北西、吉備高原南縁の丘陵地帯に位置する古墳である。古墳は岡山市街地に接する北西低丘陵にある笠井山（標高334.8m）から南西に派生する丘陵（標高47m）の南側斜面に所在し、行政区画は岡山市横井上字中ノ谷1064—12に属する。

古墳は東から西に延びる丘陵の南側斜面に１基のみ独立して存在している[1]。

白壁古墳は旧備前国の西部に位置し、旧郡名は津高郡で、平安時代に編纂された『和名抄』

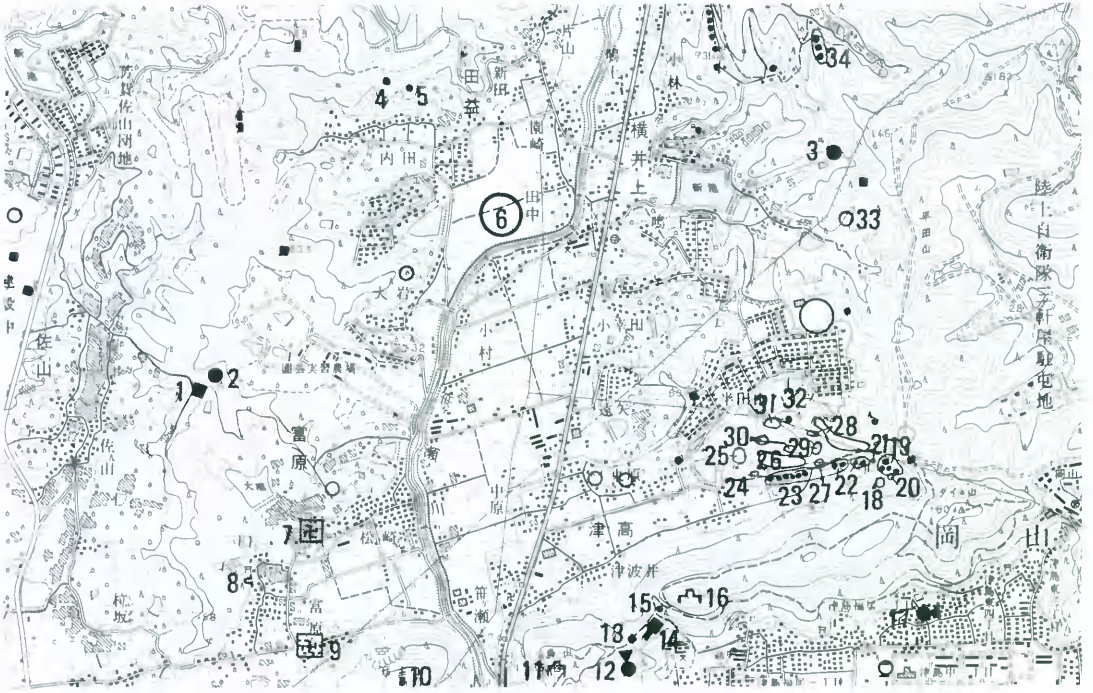
では津高郷の地域に当たる所である。

当古墳の所在する丘陵には他に遺跡は現在確認されていないが、北側の丘陵には後期古墳の群集墳が2ヶ所認められている。津高のダイミ山山塊には著名な弥生時代の墳丘墓である都月坂2号墳[2]、最古の埴輪である「都月型」を出土した古墳時代前期初頭の都月坂1号墳[3]、七つ坑1号墳[4]などがある。ダイミ山の北側丘陵には、団地造成に伴う発掘調査によって弥生時代中期末から古墳時代末の遺構が多数発掘されている。特に注目される遺構として、奥山遺跡では製鉄炉、長形炭窯、猪ノ坂南遺跡東地点で製鉄炉、猪の坂谷尻遺跡、立越南遺跡、新田上南遺跡、猪ノ坂東遺跡南斜面において長形炭窯が発掘され、この地域で6世紀末～7世紀代に大規模な鉄生産が行われていたことが確認されている[5]。このように、丘陵上には弥生時代中期～古墳時代の重要な遺跡が確認されている地域である。

笹ヶ瀬川右岸の沖積地には今まで遺跡が確認されていなかったが、山陽自動車道建設に伴う発掘調査で縄文時代後期～中世の遺物が出土する田益遺跡[6]が発見されており、今後さらに集落址が発見されるであろう。丘陵には遺跡が少なく、わずかに弥生時代の集落址2ヶ所、前期古墳1基、後期古墳2基、終末期古墳1基が確認されているのみである。丘陵の南側斜面、坊主山山塊との間に三ヶ所の古瓦出土地点が存在する。1つは富原字荒神にある富原北廃寺[7]である。この寺院址は出土した瓦から白鳳時代に創建したと考えられる。四至は瓦の出土場所からみて方一町の寺域が推定されるが、伽藍配置等については不明である。この富原北廃寺から約400m南西の丘陵斜面には、富原遺跡から出土する奈良時代の瓦を焼成した上の段窯址が存在する。

富原北廃寺の南400mに所在する富原遺跡は、かつて富原南廃寺、才の木廃寺と呼ばれていたものである[8]。遺構については不明であるが、出土瓦が奈良時代のものであり、しかもこの遺跡のすぐ南側を古代山陽道が東西に走っているため、近年では富原遺跡を津高駅家に想定する説が有力である[9]。

第2図　遺跡の位置（黒丸印）



遺跡の種別記号

散布地及び遺跡地　円墳　方墳　前方後円墳　前方後方墳　窯跡　寺院址　祭祀址　城跡

第3図　周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）

このように、富原地区には白鳳時代創建の富原北廃寺、奈良時代の駅家（津高駅）、それに伴う瓦窯址など重要な遺跡が集中している地域である。

表―1　遺跡名称一覧表

番号	名　　称	番号	名　　称
1	富原西奥古墳	18	立越南遺跡
2	富原大池奥山遺跡	19	奥池古墳群
3	白壁古墳	20	奥池遺跡
4	青谷３号墳	21	立越北遺跡
5	青谷５号墳	22	擂鉢池古墳群
6	田益遺跡	23	佐良池谷尻古墳群
7	荒神廃寺	24	新田上南遺跡
8	上の段窯址	25	新田上西遺跡
9	矢望城廃寺	26	新田上遺跡
10	坊主山遺跡	27	新田上東遺跡
11	烏山城	28	猪ノ坂東遺跡
12	都月坂　３号墳	29	猪ノ坂谷尻遺跡
13	都月坂　２号墳	30	猪ノ坂南遺跡
14	都月坂　１号墳	31	猪ノ坂遺跡
15	都月坂　４号墳	32	猪ノ坂東古墳
16	半田山城	33	白壁奥遺跡
17	お塚様古墳	34	猿場古墳群

註

1）用地外に古墳らしきものが１ヵ所だけ地形図で認められ、現地踏査を実施したが、既に地形が大規模に改造され、古墳の存在を確認することができなかった。

2）近藤義郎　「都月坂２号弥生墳丘墓」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年

3）近藤義郎　「都月坂１号墳」『岡山県史』第18巻　岡山県　1986年

4）近藤義郎他　「岡山市　七つ坑古墳群」　七つ坑古墳群発掘調査団　1987年

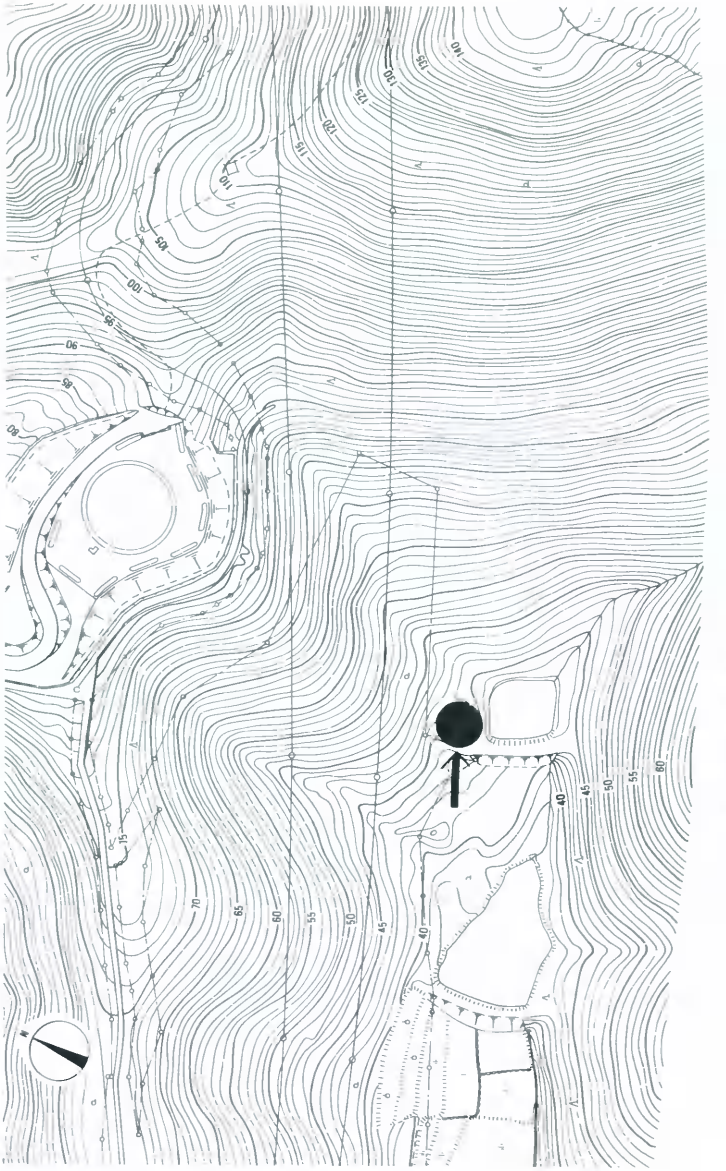
5）岡山市教育委員会　「津高住宅団地造成地内遺跡発掘現地説明会資料」による。　1991年

6）1991年に岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施している。報告書未刊

7）富原北廃寺の名称は永山卯三郎が津高北寺と呼んでいたが、巌津政右衛門は富原荒神廃寺という名称を与えていた。「岡山市遺跡地図」では荒神廃寺と記載されている。
永山卯三郎著　『岡山県通史』上編　岡山県通史刊行会　昭和59年複刻
巌津政右衛門　「岡山平野の平地伽藍」『岡山市史』古代編　岡山市　1962年
岡山市教育委員会　「岡山市遺跡地図」　1983年

8）永山卯三郎は津高南寺ないし才の木、矢望城と称している。巌津政右衛門は富原矢望城廃寺、「岡山市遺跡地図」では矢望城廃寺と記載されている。
文献は註１に同じ。

9）高橋美久二　「情報を制するものは」『古代史復元　9　古代の都と村』　講談社　1989年
伊藤　晃　「富原北廃寺・富原遺跡」『岡山県史』第18巻　岡山県　1986年



第4図　白壁古墳位置図（矢印黒丸）（S＝1/2,000）

3．発掘調査の概要

(1) 墳丘と周堀（第５～８、10図、図版２－２、３－１、４－３、５－１）

白壁古墳は白壁集落の谷奥に所在する。古墳はこの谷奥の南斜面に位置し、前面には灌漑用の池がある。古墳はこの池を作る際に一部破壊しているようである。

古墳の位置する丘陵斜面は緩やかであるが、かなり大きな墳丘であるため、容易に確認できた。

調査前の現況は、墳丘中央部を中心に８×10mと２×1.5m程の穴が２ヶ所認められた。大きな穴は内部主体である横穴式石室が存在していた位置であり、奥壁の一部を除いてほとんどが持ち去られているようである。地元の人々によれば、これらの石材は古墳の南にある池堤の基礎に使用されているということであった。

このように墳丘中央部には石材抜取りによる大きな陥没がみられたが、墳丘は良好に残存しており、古墳規模を直径19m、高さが前方墳端から約3.6mの円墳と想定した。

発掘は用地内だけの限定調査であったため、用地外に残る内部主体である横穴式石室や墳丘の調査は出来なかったが、調査の結果、墳丘は径19m、墳丘高は前方墳端から約3.5m以上あったと推定される円墳であることが確認できた。

墳丘は第２トレンチの断面観察によれば、墳丘下の旧表土層を削平して、平担面をつくった後に築造しており、現状の盛土は約２m程残存する。第５～11、13～17層が盛土に相当すると考えられる。第１トレンチでは第５～８層が盛土である。盛土はほぼ一定の厚さで築造され、暗灰色土と黄褐色土で交互に積まれている。特に墳端部は丁寧に築成されているようで、墳丘裾に角礫の石列が認められた。石列は墳丘の北西部に長径５～25cmの角礫が墳丘裾部を取り巻くように出土した。これは墳丘盛土内にくい込む様に認められるものと周堀内に流出しているものがあるが、これらの石列は墳丘築造時に人為的に置かれたものと考えられる。（第10図）

周堀は調査区南側では池堤のため確認できなかったが、山側の北側では検出できた。周堀は墳形と同じ円形となるように地山面を掘削しており、確認された最大幅は約2.5m、深さ約0.8mを測る。断面形は「U」字形を呈し、底部幅は1.2～1.8mである。埋土は第１トレンチでは丘陵上部からの流入土で、第２トレンチでは墳丘上からの流入土で埋まっていた。

(2) 横穴式石室（第７、９図、図版３－２、４－１、２）

当古墳の内部主体は横穴式石室である。石室は用地外であるため未調査であるが、石材抜取による大穴で露出している奥壁と今回の調査によって確認された羨道左側壁の基底部石から、全長約12mの南に開口する横穴式石室墳であることが判明した。

１．羨　道

第３トレンチによって、当古墳の羨道が長さ約２m程かろうじて確認できた。検出された羨

道は左側壁の基底部石である。構築は割石の平担面を内側にし、壁面はそろえているが2段目以上は存在しなかった。なお、確認された6個の基底部石は長さ30～60cm、幅30～65cm程度の石材である。

(3) 出土遺物（第11、12図、図版6）

出土遺物は須恵器だけである。遺物はいずれも第4トレンチ周辺の周堀内から出土した。須恵器は少破片であり、その出土量はコンテナ整理箱に2箱である。器種は甕(1)～(4)、(6)、(7)と長頸壺(5)だけであった。甕は口縁部の形態から5個体分あり（第11、12図）、(1)と(2)、(3)の間には時代幅が存在するようである。

4．ま　と　め

白壁古墳は白壁部落の谷奥にほぼ孤立した状態で所在する古墳である。発掘は用地内という限定調査であり、内部主体を調査しなかったため、古墳の詳細は今後の課題としなければならないが、調査結果をもってまとめとしたい。

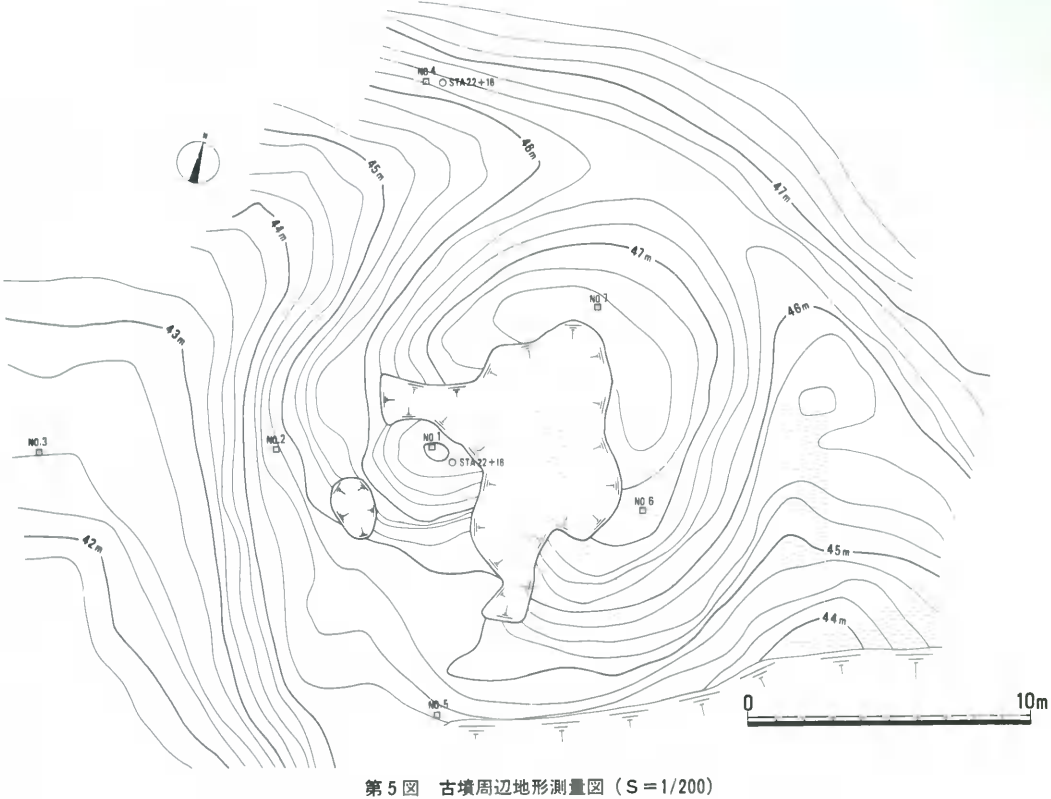
古墳は墳丘が径19mのかなり大きな円墳であり、内部主体は約12m程の横穴式石室墳であることが推察できる。出土遺物は甕と長頸壺のみであり、年代幅がある。(1)は7世紀前半頃のものと思われるが、(2)～(4)、(6)はそれ以後のものと思われる。(5)は7世紀後半頃のものと思われる。

これらの遺物からみて、今回出土した遺物は古墳築造時期の遺物ではなく、追葬時の副葬品であったと考えられる。

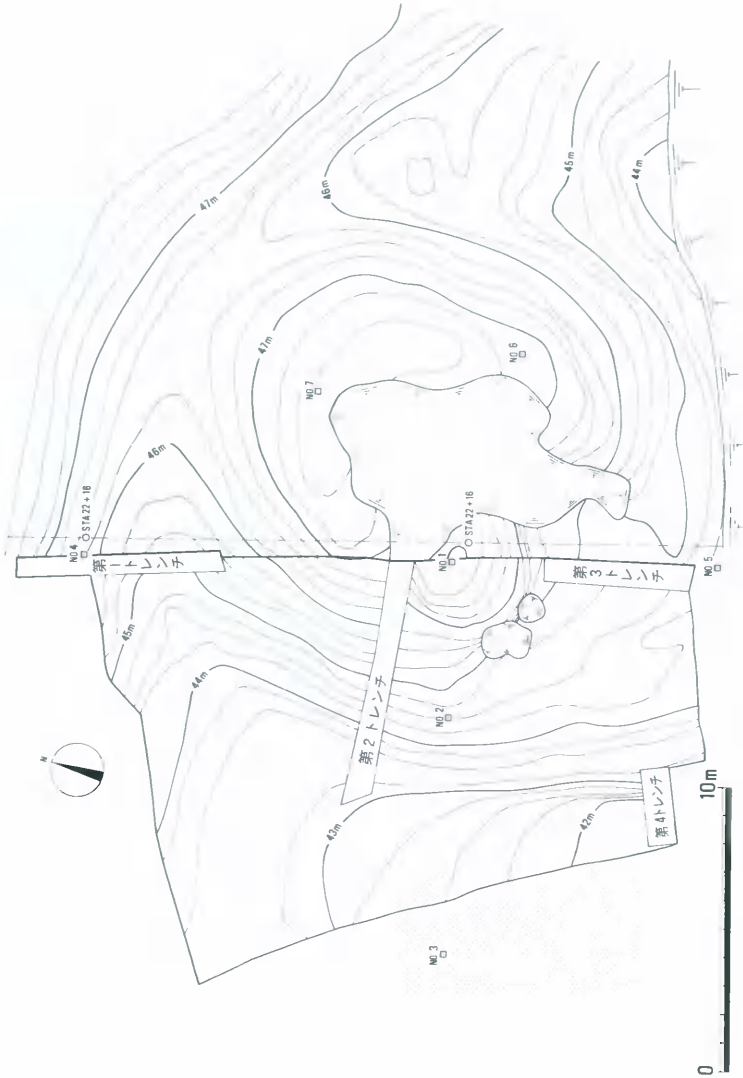
恐らく当古墳は、6世紀後半頃に築造され、7世紀後半～8世紀代まで数次の追葬が行なわれていた古墳と考えられる。

表—2　土器観察一覧表

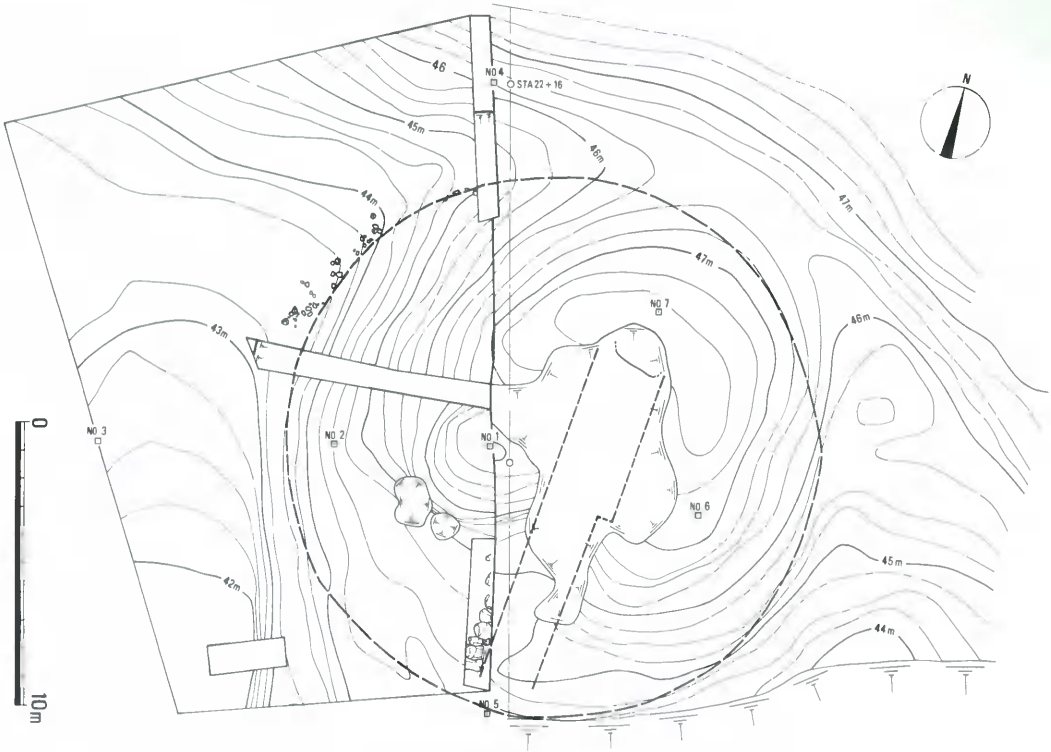
挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	須恵器	甕	23.2		(44.4)	口縁部は斜め上方に立ち上る。口唇部は折返し、肥厚している。端部は丸い。外面は平行タタキとハケ目。内面は同心円文のタタキ目である。	外面　青灰色 内面　暗青灰色	1㎜以下の砂粒を含む。	約1/2残存
2	〃	〃	21.4		50.2	口縁部は斜め上方へ立ち上る。端部は丸い。外面は上位が横位のハケ目、下位は平行タタキ。内面は同心円文のタタキ目がある。	外面　緑灰～暗緑灰色 内面　青灰色	1㎜以下の砂粒、長石を含む。	約1/2残存
3	〃	〃	23.6		(45.6)	口縁部は斜め上方へ立ち上る。外面上位は横位のハケ目、下位は平行タタキと横位ハケ目。内面は同心円文のタタキ目である。	内外面とも緑灰色	2㎜以下の砂粒を含む。	1/2強残存
4	〃	〃				口縁部は斜め上方へ立ち上り、端部はわずかに肥厚する。内外面ともヨコナデ。	外面　暗緑灰色 内面　緑灰色	微砂含む。	
5	〃	壺				長頸壺の頸部である。外面に一条の凹線あり。内外面ともヨコナデ。	内外面とも青灰色	1㎜以下の砂粒含む。	
6	〃	甕	16.2			口縁部は斜め上方に立ち上り、端部は上方にのびる。内外面ともヨコナデ。	内外面とも暗青灰色	微砂を含む。	
7	〃	〃				外面は平行タタキ後、横位のハケ目をする。底部は平行タタキだけ。内面は同心円文を呈した青海波文がみられる。底部は半円弧状のタタキ目痕である。	内外面とも緑灰色	2㎜前後の砂粒を含む。	



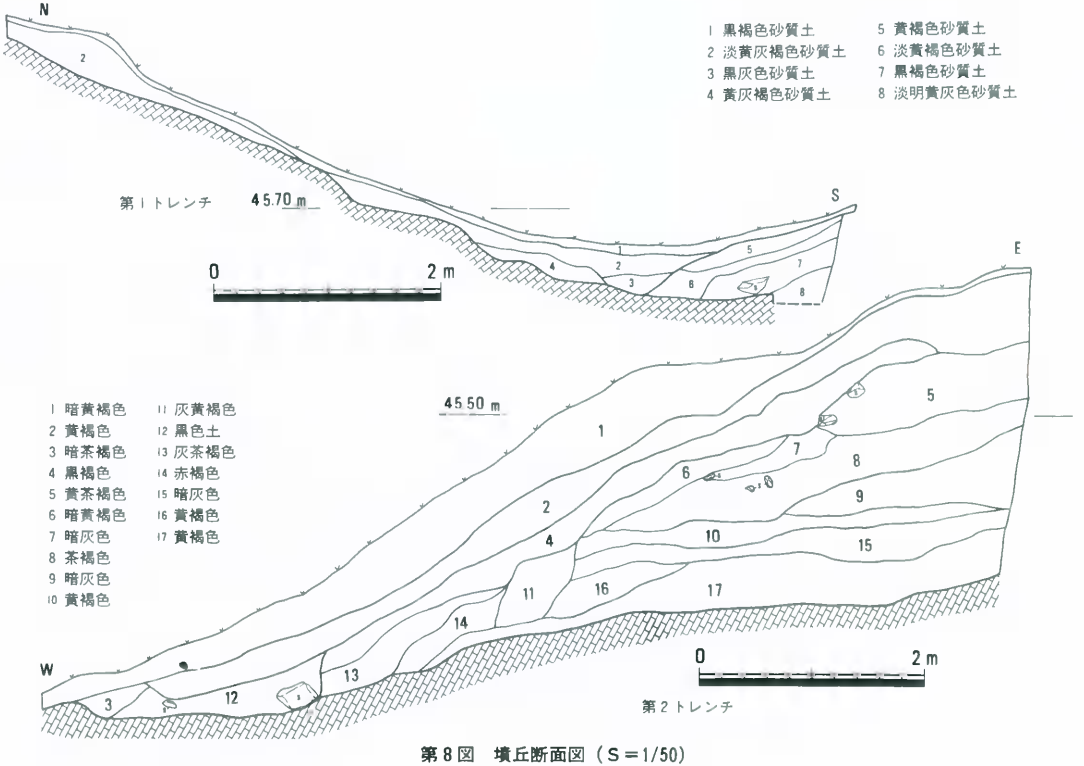
第５図　古墳周辺地形測量図（Ｓ＝1/200）



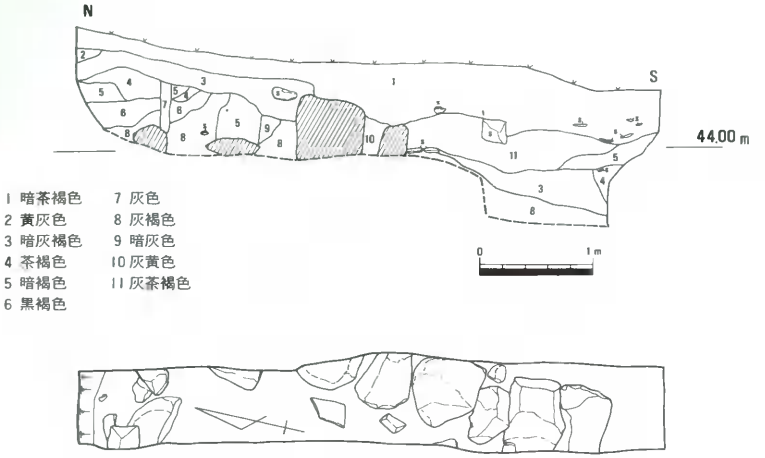
第6図　墳丘測量及びトレンチ位置図（S＝1/200）



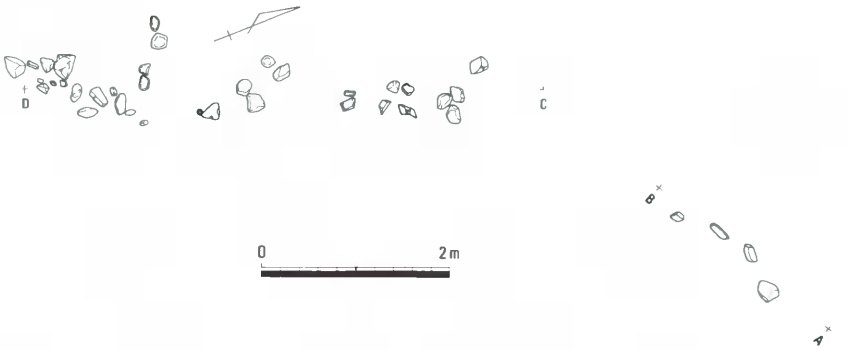
第７図　墳丘測量図（Ｓ＝1/200）



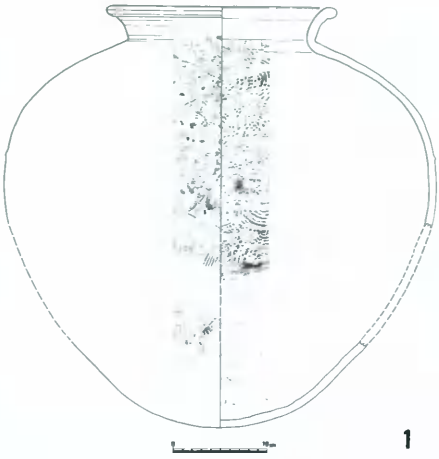
第8図　墳丘断面図（S＝1/50）

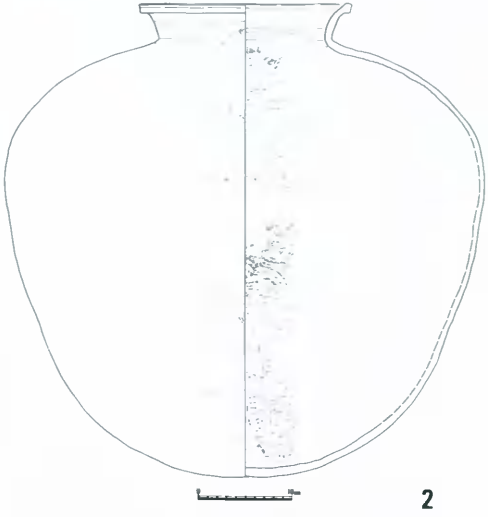


第9図　第3トレンチ平・断面図（S＝1/50）

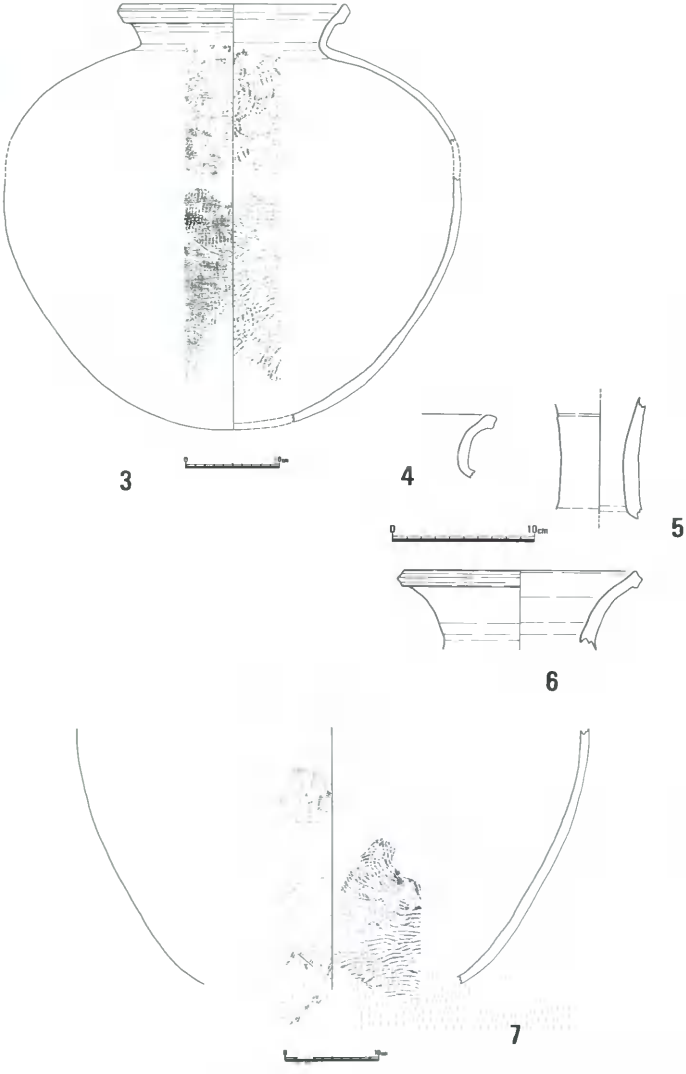


第10図　墳端石平面図（S＝1/60）





第11図　出土遺物実測図（S＝1/6）



第12図　出土遺物実測図（S＝1/4、1/6）

1．古墳遠景（南西から）

2．古墳遠景（西から）

図版 2

1．古墳近景（南西から）

2．墳丘検出状況（西から）

1．墳丘検出状況（北西から）

2．第3トレンチ（南から）

図版 4

1. 羨道部側壁検出状況（南から）

2. 第3トレンチ断面（南西から）

3. 第2トレンチ断面（南西から）

図版 5

1. 第2トレンチ断面（南東から）

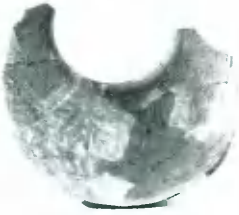
2. 発掘調査風景（西から）

3. 墳丘検出状況（北西から）

図版 6

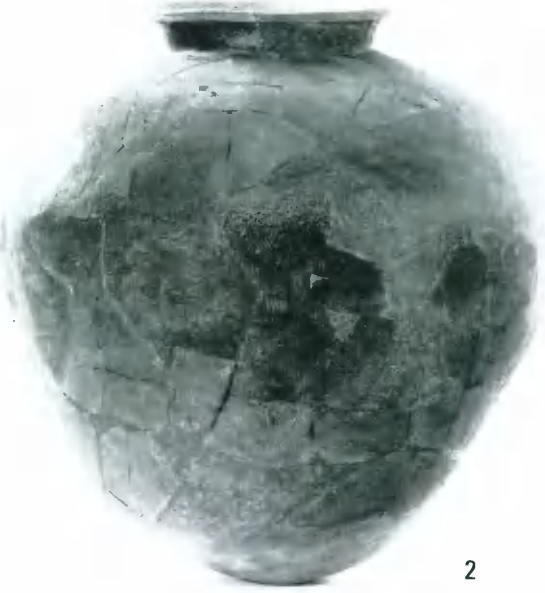
1

3



1

3



2

出土遺物

付　載

富原西奥古墳出土鉄滓と平瀬2号墳出土小鉄塊の金属学的調査

大　澤　正　己

概　　要

7世紀中葉の富原西奥古墳出土鉄滓と平瀬2号墳出土小鉄塊を調査して次の事が明らかとなった。

〈1〉　富原西奥古墳出土の炉壁溶融ガラス質鉄滓は、砂鉄製錬の炉壁である。ガラス質スラグ中には半還元砂鉄が残存し、二酸化チタン（TiO_2）が1.71%含有される。炉材粘土の耐火度は1,300℃であった。

〈2〉　平瀬2号墳からは小鉄塊が検出された。鉄塊は亜共折鋼（C：0.77%以下）であった。この小鉄塊は製鉄炉から取り出した直後の荒鉄である。精錬鍛冶による成分調整を施すことにより鉄素材となる。古墳供献には鉄滓以外に小鉄塊の存在を示す貴重な例である。表皮付着スラグや非金属介在物が検出されなかったので製鉄原料が砂鉄か鉱石かの分類はできなかった。

1．い　き　さ　つ

富原西奥古墳は岡山市富原に所在する。当古墳は1辺が9mの方形を呈し、現存墳丘高は約2mを測る。内部主体は無袖の横穴式石室で、石室長さは302cm、幅69cm、高さ68cmを測る。1枚の平石の天井石が認められた。石室床面で長さ約184cm、幅約32cmを測る木棺痕跡が1基検出されている。供試材は墳丘周辺より少量出土したが、その中の1点である。羨道部付近の撹乱層で出土した須恵器から7世紀中葉の築造と推定されている[1)]。

平瀬2号墳は岡山市平瀬地内に含まれる。その位置するところは旭川右岸、宗谷山の西山裾である。小円墳5～6基で支群を形成するが、このたび発掘調査の対象となったのはうち3基の無袖横穴式石室墳。平瀬2号墳から夥しい量の玉類が検出され、これを機に床面ちかくの土砂すべてを採集し洗浄したところ、ここに報告する小鉄塊が混入していることに気付いたのであった。

2．調　査　方　法

2—1　供　試　材

Table 1に示す。供試材は、富原西奥古墳出土のガラス質鉄滓及び平瀬古墳出土小鉄塊の各1点である。

Table 1　供試材の履歴と調査項目

符　号	遺跡名	試　料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目			
					大きさ (mm)	重量 (g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA	化学組成
TND-1B	富原西奥古墳	ガラス質鉄滓	墳丘表土中	7C中葉	32×58×26	59	○			○
HRS-1	平瀬2号墳	小鉄塊	床　面	6C後半	25×27×18	14	○	○	○	

2－2　調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡組織

(3)　ビッカース断面硬度

(4)　CMA（Computer Aided X-ray Micro Analyzer）調査

(5)　化学組成

(6)　耐火度

3．調　査　結　果

3－1　富原西奥古墳出土品

TND-1B　炉壁溶融ガラス質鉄滓

①　肉眼観察

灰黒色のガラス質鉄滓と裏面は淡赤色粘土である。

②　顕微鏡組織

Photo 1の①～③に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグ中の局部に半還元砂鉄が残留する。①は暗黒色ガラス中に砂鉄粒子が還元される途上で、白色多角形のウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）と針状結晶のイルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）へ分離成長する手前の状態組織である。②③はまだ砂鉄粒子が半還元の状態で止まっている。当炉は装入された砂鉄はチタン（Ti）の高い塩基性砂鉄と想定される。岡山市内では足守中遺跡では塩基性砂鉄製錬が確認されている[2)]。

③　化学組成

Table 2に示す。炉壁粘土の溶融物なので鉄分少なくガラス質成分が主体となる。すなわち、全鉄分（Total Fe）6.37%に対して金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第1鉄（FeO）1.87%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）7.00%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は87.90%である。このうちの酸化アルミニウム（Al_2O_3）は11.45%と低目なので、耐火度の高温は望めない。二酸化チタン（TiO_2）は粘土自身の値であり砂鉄粒子は量が少ないのでこれからの影響はないものと考えられる。粘土組成は倉敷市に所在する各遺跡のものに近似する[3)]。

④　耐　火　度

炉壁粘土は高温度に加熱されても軟化しなくて、温度の急変にあっても膨張収縮による亀裂を起さぬ事が要求される。それらの目安に耐火度の測定を行なっている。粘土の軟化現象を示す温度は1,300℃であった。古代製鉄炉材として使用されているレベルである。

3－2　平瀬2号墳出土品

HRS-1　小鉄塊

①　肉眼観察

鉄錆に覆われて赤褐色を呈した梅干形の14ｇの小鉄塊。表面には亀裂が走り、磁性が強く僅かに金属鉄の残留が予測された。

②　顕微鏡組織

Photo 1の④～⑧に示す。金属鉄は極く微小残存した。ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）浴腐食でパーライト（Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織。フェライトとはα（アルファー）鉄または純鉄を指す。セメンタイトとは鉄と炭素の化合物で Fe_3C で表わされる）が現われた。パーライトの占める面積は炭素含有量の増加にともなって増し、焼きならし状態では0.4％前後で約半分、0.77％で全部パーライトとなる。該当の炭素含有量は亜共折鋼の0.5％前後と推定される。鉄器加工用として適当なものであろう。ただし、鉄素材として精錬鍛冶を行なった場合、当然一部は酸化を受けて脱炭される。

③　ビッカース断面硬度

Photo 1の④に金属鉄の炭素含有量の推定を目的とした硬度測定を行なった結果の圧痕写真を示す。硬度値は240Hv であった。製鉄炉内の焼ならし状態の組織であって炭素量は0.5％前後とすると、硬度値としては妥当なところであろう。

④　ＣＭＡ調査

Photo 2のＳＥ（２次電子像）に示した非金属介在物らしきものを目標に分析したが外れていた。基地鉄の分析なので鉄（Fe）のみの検出となった。微量の硫黄（Ｓ）が認められたが、これは土壌汚染の影響と考えられる。

4．ま　と　め

富原西奥古墳出土の炉壁溶融ガラス質鉄滓は７世紀中葉の砂鉄製錬を証明する。砂鉄はチタン（Ti）分の高い塩基性（赤目系）が想定された。鉄滓中の半還元砂鉄からウルポスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）やイルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）への移行が認められた。炉壁に使われた粘土は、酸化アルミニウム（Al_2O_3）の低いもので、耐火度は高温が望めぬものであった。耐火度は1,300℃を示す。倉敷市の古代製鉄で使用されたレベルで実用上支障ない品位である。

平瀬２号墳には小鉄塊が供献されていた。小鉄塊の炭素含有量は0.5％前後で鍛冶素材としては良好な品位である。製鉄集団の古墳副葬に鉄滓以外に小鉄塊が岡山県下で確認できた意義は大きい[4]。製鉄の目的は小鉄塊の確保である。

註

1）岡山県古代吉備文化財センター『岡山県埋蔵文化財報告』19　1989
2）岡山市教育委員会調査。鉄滓分析は当方で行なっているが未報告。
3）菅生小学校裏山遺跡、西坂古墳、矢部奥田遺跡、矢部古墳群Ａらの炉壁粘土である。
4）福岡県下の古墳供献小鉄塊例は下記の拙稿に報告済みである。
　大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会1983　109頁

Table 2　鉄滓の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
TNO 1B	蒲原西奥古墳	墳丘表土中	ガラス質滓	7 C 中葉	6.37	0.04	1.87	7.00	69.95	11.45	1.52	0.85	2.88	1.25	0.17	1.71	0.07	0.006	0.17	0.02	0.03	0.003	87.90	13.7990	0.26844
TUT- 10	津寺	中屋3BII区 No.5 住居跡	鍛錬鍛冶滓	古墳時代後半	51.47	0.13	5.07	67.77	8.83	1.29	0.30	0.22	0.235	0.105	0.16	0.06	0.028	0.093	0.34	2.11	0.001	0.175	10.98	0.2133	0.00116
11	〃	〃 No.8 住居跡	〃	〃	58.11	0.11	55.57	21.17	13.94	3.03	2.10	1.20	1.250	0.290	0.16	0.12	0.028	0.008	0.23	0.20	0.003	0.030	21.81	0.3753	0.00206
12	〃	中屋3BIII区 No.8 住居跡	〃	〃	42.73	0.12	9.27	50.62	19.06	4.84	1.33	0.58	0.765	0.435	0.20	0.24	0.032	0.031	0.62	0.62	0.044	0.385	27.01	0.6321	0.00561
14	〃	中屋E2区 No.10住居跡	〃	〃	48.54	0.09	9.27	58.97	14.74	3.20	0.38	0.27	0.500	0.270	0.12	0.12	0.024	0.056	0.12	0.20	0.002	0.930	19.36	0.3988	0.00247
15	〃	〃 No.11住居跡	〃	〃	41.68	0.10	44.04	10.50	26.21	5.59	4.87	1.70	1.205	0.480	0.62	0.24	0.044	0.013	0.29	0.006	0.004	0.050	40.055	0.9610	0.00575
16	〃	中屋M11-III区 溝6b	〃	奈良時代	45.28	0.10	44.10	15.59	20.45	5.30	2.06	0.85	0.850	0.545	0.32	0.25	0.028	0.016	0.32	0.05	0.006	0.010	30.055	0.6637	0.00552
17	〃	中屋H1区No.50	〃	6 C 後半	66.23	0.09	72.10	14.44	6.70	1.87	1.08	0.81	0.415	0.155	0.20	0.08	0.024	0.010	0.20	0.04	0.002	0.065	11.03	0.1665	0.00120
19	〃	〃	〃	〃	66.16	0.10	74.75	11.34	5.80	1.62	1.66	1.12	0.560	0.150	0.22	0.08	0.028	0.008	0.18	0.02	0.002	0.095	10.91	0.1649	0.00121
20	〃	〃	〃	〃	59.03	0.11	41.86	37.72	12.51	3.08	1.29	0.87	0.670	0.285	0.21	0.15	0.024	0.019	0.32	0.08	0.003	0.080	18.705	0.3168	0.00254
SSU 1	菅生小学校裏山	2区谷	ガラス質滓	奈良～	5.86	0.16	1.73	6.23	71.01	11.52	3.58	1.31	2.34	0.91	0.16	0.61	0.10	0.007	0.18	0.05	0.01	0.003	90.67	15.4726	0.10409
2	〃	10区B谷C	〃	〃	16.95	0.38	6.27	16.75	54.73	10.24	5.59	0.84	2.30	0.77	0.22	0.42	0.09	0.004	0.20	0.09	0.01	0.018	74.47	4.3935	0.02477
3	〃	11区南砂層	砂鉄製錬滓	〃	53.74	0.09	32.34	40.77	8.32	3.11	0.33	0.50	0.11	0.056	0.25	9.16	0.17	0.024	0.29	0.18	0.24	0.009	12.426	0.2312	0.17045
NSK 1	西坂古墳	周溝	ガラス質滓	7 C 前半	11.99	0.16	5.04	11.31	63.57	10.45	2.26	0.78	2.86	0.94	0.21	0.38	0.05	0.004	0.17	0.01	0.01	0.005	80.86	6.7439	0.03169
YBO 1	矢部奥田	土壙6西半	〃	近世(18C)～古墳時代前半	7.98	0.10	2.38	8.62	61.32	17.98	1.56	1.44	2.05	1.28	0.09	1.27	0.09	0.005	0.09	0.18	0.02	0.003	85.63	10.7305	0.15914
2	〃	土壙7東区	鉱石製錬滓	古墳時代前半～中頃	40.13	0.14	44.30	7.94	29.74	6.03	6.61	1.17	1.13	0.40	0.42	0.41	0.03	0.012	0.43	0.10	0.01	0.003	45.08	1.1233	0.01021
3	〃	Pit 178	〃	14 C 前半	32.38	0.13	33.06	9.37	33.46	7.42	9.61	1.17	0.73	0.64	0.46	0.87	0.03	0.011	0.59	0.13	0.02	0.005	53.03	1.6377	0.02686
YBA 1	矢部古墳群A	11号墳墳丘裾部	鍛錬鍛冶滓	4 C	57.26	0.16	60.37	14.55	14.61	3.36	1.54	0.96	0.78	0.14	0.20	1.73	0.04	0.016	0.17	0.09	0.07	0.004	21.39	0.3735	0.03021
2	〃	37号墳石室床面	砂鉄製錬滓	7 C 前	44.22	0.09	41.29	16.99	16.83	4.99	2.36	1.02	0.41	0.13	0.76	11.64	0.09	0.029	0.42	0.18	0.20	0.005	25.74	0.5820	0.26322
3	〃	〃 〃	精錬鍛冶滓	〃	59.05	0.09	53.38	24.98	7.48	2.29	0.73	0.52	0.14	0.032	0.37	7.15	0.03	0.010	0.16	0.02	0.09	0.013	11.192	0.1895	0.1210
4	〃	38号墳石室内	〃	〃	51.48	0.10	49.85	18.06	15.20	3.60	1.22	0.49	0.39	0.47	0.38	7.03	0.01	0.011	0.28	0.17	0.15	0.005	21.37	0.4151	0.1365
5	〃	〃 前庭部	ガラス質滓	〃	8.68	0.08	4.32	7.50	64.92	13.84	1.87	1.22	3.06	2.02	0.10	0.92	0.05	0.007	0.07	0.01	0.01	0.004	86.93	10.0149	9.1059
6	〃	45号墳周溝内	鍛錬鍛冶滓	7 C 前半	42.00	0.13	36.16	19.68	26.12	6.19	3.05	1.17	1.15	0.34	0.21	0.90	0.01	0.033	0.19	0.27	0.02	0.007	38.02	0.9052	0.02142
YBH 2	矢部堀越	H101(竪穴住居)	〃	6 C 後半	43.75	0.07	43.01	14.65	30.09	4.46	2.20	0.83	0.73	0.37	0.23	0.34	0.03	9.010	0.22	0.02	0.01	0.021	38.68	0.8841	0.00777
3	〃	H106(〃)	〃	〃	40.36	0.06	39.19	14.07	32.31	5.56	2.48	0.75	1.21	0.58	0.23	0.32	0.06	0.018	0.35	0.16	0.01	0.027	42.89	1.0626	0.00792

POS. NO. 3

COMMENT : HRS-1
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A) 07-FEB-92
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	193	**********
RE-m	6.73	155	**********
SR-1	6.86	143	**********
W -m	6.98	136	**********
SI-k	7.13	150	**********
TA-m	7.25	114	**********
RB-1	7.32	114	**********
HF-m	7.54	103	**********
LU-m	7.84	85	**********
YB-m	8.15	72	**********
AL-k	8.34	59	**********
BR-1	8.37	62	**********
ER-m	8.82	46	*********
SE-1	8.99	43	*********
HO-m	9.20	39	*********+
DY-m	9.59	38	*********
AS-1	9.67	32	********
MG-k	9.89	31	*******+
TB-m	10.00	20	*******
GE-1	10.44	24	*******+
GA-1	11.29	14	******
NA-k	11.91	13	******
**	14.72	8	*****
F -k	18.32	5	****

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
TI-k	2.75	102	**********
BA-1	2.78	99	**********
CS-1	2.89	86	**********
SC-k	3.03	81	**********+
I -1	3.15	68	**********
TE-1	3.29	54	**********
CA-k	3.36	64	**********
SB-1	3.44	67	**********
SN-1	3.60	43	*********
K -k	3.74	57	*********+
IN-1	3.77	32	********
U -m	3.91	35	********
CD-1	3.96	38	********+
TH-m	4.14	29	********
AG-1	4.15	31	********
PD-1	4.37	24	********
RH-1	4.60	21	******+
CL-k	4.73	29	*******+
RU-1	4.85	16	*******
OS -k	5.37	54	*********++
MO-1	5.41	11	*****+
NB-1	5.72	6	****
ZR-1	6.07	6	****
P -k	6.16	7	****+

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
BI-1	1.14	69	**********
PB-1	1.18	66	**********
TL-1	1.21	70	**********
HG-1	1.24	67	**********
AU-1	1.28	59	**********
PT-1	1.31	69	**********
IR-1	1.35	71	**********
OS-1	1.39	65	**********
ZN-k	1.44	58	*********+
CU-k	1.54	46	*********
NI-k	1.66	40	*********
TM-1	1.73	33	********
CO-k	1.79	42	*********
◎FE-k	1.94	7603	**********++++++++++
GD-1	2.05	22	*******
MN-k	2.10	18	*******
EU-1	2.12	20	*******
SM-1	2.20	15	******
CR-k	2.29	13	******
ND-1	2.37	10	*****
PR-1	2.46	7	*****
V -k	2.50	6	****
CE-1	2.56	7	****+
LA-1	2.67	3	***

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
  S FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
  SI K CD

Photo 2の SE（2次電子像）に示した非金属介在物を探して、それらしき個所を分析したが外れていた。鉄素地からは鉄（Fe）と硫黄（S）が検出された。硫黄（S）は土壌からの汚染と考えられる。

Table 3　平瀬2号墳出土　小鉄塊（HRS-1）のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果

(1) TND-1B
富原西奥古墳
(墳丘表土中出土)
ガラス質鉄滓

1 ×100
ガラス質スラグ中の半還元砂鉄粒子からの変化

2 ×100
半還元砂鉄粒子

3 ×400
同左拡大

表側

裏側

外観写真 1/2.2

(2) HRS-1
平瀬古墳
小鉄塊

4 ×200
硬度圧痕
260Hv 荷重100g

5 ×100
ヒクラル etch
ハーライト

6 ×400
同左拡大

7 ×100
ヒクラル etch
ハーライト

8 ×400
同左拡大

表側 裏側

外観写真 1/1.7

Photo 1 鉄滓と小鉄塊の顕微鏡組織 (縮小0.79)

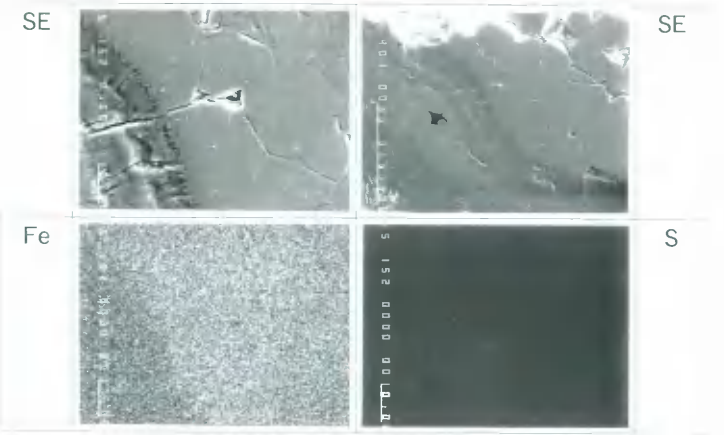


Photo 2　平瀬2号墳出土小鉄塊（HRS-1）の特性X線像　×1,500（縮小0.5）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告83

山陽自動車道建設に伴う発掘調査 7

1993年1月20日　印　刷
1993年1月21日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
　　岡山県教育委員会
印　刷　西尾総合印刷株式会社